
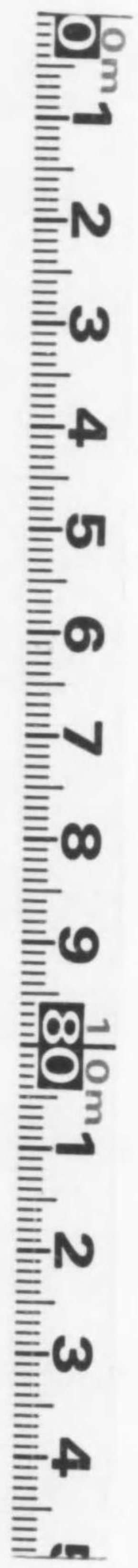


383
154

383-154

1200501455217



始



214



農學士 佐々木祐太郎著

花卉園藝

下卷

東京成美堂發行



383-154

花卉園藝の序

- 一、本書は分つて通論及び各論の二篇となす。通論に於ては、花卉園藝に關する一般の事項を論じ、各論に於ては、箇々の花卉につきて、之が性狀、原種、品種栽培法等に關する事項を述べたり。
- 一、花卉の栽培法は、地方によりて多少其趣を異にするものあり。本書に於ては、主ら本邦中部地方を標準として記載せり。
- 一、各論に於ける花卉排列の順次は、大體に於て開花期によれりと雖も、亦必ずしも然らざるものあり。
- 一、本書殊に各論に於ては、成るべく多數の圖畫を挿入し、以て讀者をして直覺的に會得するの便あらしむると共に、著者筆意の達せざる所をば、之によりて補はんことを圖れり。
- 一、本書固より不備の點多からん。識者の高教と著者今後の研究とによりて大成を他日に期せんと欲す。

大正六年一月

著者識

増訂 花卉園藝の序

一、本書舊版は、大正十二年の大震災に遭遇し、其の紙型と圖版とは悉く烏有に歸したるを以て、茲に舊版に大なる増補訂正を加へ、増訂花卉園藝と題して出版することとなせり。

一、本書は分つて上下二卷となす。上卷は通論と球根類とより成り、下卷には一二年草類・宿根草類及び花木類を收む。

一、本書の舊版と著しく異なる所は、主として次の諸點にありとす。

(い) 通論中に、花卉園藝の沿革・花卉の自然的環境等を加へたること。

(ろ) 球根類中に、グロリオサ・ツバメスキセン・チクリヂア・プロツタ・スノー、ドロツブ・オリニツガラム・シラー・アキメネス・アガパンサス・カイウ・カラヂユム・チユペロース等を加へたること。

(は) 一二年草類中に、ハマアラセイトウ・ヴィスカリア・ジヤコベア・スイートアリツサム・カンヂタフト・アルクトチス・ジブソフィラ・ニゲラ・シザンサス・セントランサス・ハ

ナシエンギク・ブラキコメ・ゴテチア・サルビグロツシス・アロンソア・カムバスラ・マトリカリア・リナリア・ハリフウテウサウ・カヒザイク・ロダンテ・アクロクリナム・夕顔・翠菊・オホケタデ・プロリリア・カ、リア等を加へたること。

(に) 宿根草類中にイカリサウ・ヲダマキ類・スバイレア・石竹類・カルセオラリア・ガーベラ・ゼウム・エリゲロン・ペントステモン類・ストケシア・ノコギリサウ類・フランスギク・ハマギク・シヤスタデージー・宿根フロツクス・リクニス・アンターザ・スタティス・ユツカ・タチアフヒ・ソリダゴ・ルドベツキア・夕霧草・オシロイバナ・サングイソルバ・モナーダ・ヴェロニカ・桔梗・ニチニチサウ・インカーヴイレア・サンゴバナ・リアトリス・フィソステジア・モミヂアフヒ・ヘレニウム・ケロネ・リンダウ・ダンギク・トリカプト・ホルトニア・シウメイギク・ハナシユクシヤ・ベニバナベンケイサウ・アスター類・蘭類等を加へたること。

(ほ) 頭註を附して本文の補足を圖れること。

一、本書は舊版よりも更に多くの圖版を有するのみならず、其の圖版は概して本書のために特に調製せるものとす。花卉の形態は之等の圖版によりて直覺

的に會得するをうべく、栽培の方法も亦之によりて容易に了解しうるの便あるべし。

昭和十年二月

著者 しるす

目次

第一篇 一二年草類

第一章	三色堇	性狀。栽培法。	一	三頁
第二章	金盞草類	類別。栽培法	三	五
第三章	アラセイトウ及びハマアラセイトウ		五	九
第一節	アラセイトウ	性狀。栽培法。	六	八
第二節	ハマアラセイトウ	性狀。栽培法。	八	九
第四章	ネモフィラ	性狀。栽培法。	九	一〇

第五章 ヤグルマキク類 一〇—一三
類別。栽培法。

第六章 ムギナデシコ及びヴァイスカリア 一三—一五
 第一節 ムギナデシコ 一三—一四
性狀。栽培法。

第二節 ヴァイスカリア 一四—一五
性狀。栽培法。

第七章 ヒエンサウ類 一五—一七
類別。栽培法。

第八章 シネラリア及びジャコベア 一七—二二
 第一節 シネラリア 一七—二一
性狀。栽培法。

第二節 ジャコベア 二一—二二
性狀。栽培法。

第九章 シレネ 二二—二五
性狀。栽培法。

第十章 勿忘草 二五—二八
性狀。類別。栽培法。

第十一章 罌粟類 二八—三〇
類別。栽培法。

第十二章 ハナビシサウ 三〇—三二
性狀。栽培法。

第十三章 スウイート、アリツサム 三二—三三
性狀。栽培法。

第十四章 カンチタフト 三三—三五
性狀。栽培法。

第十五章 アルクトチス 三五—三六
性狀。栽培法。

第十六章 ジブソフィラ 三六—三八
性狀。類別。栽培法。

第十七章	クロタネサウ	性状、栽培法	三九—三九
第十八章	シザンサス	性状、栽培法	三九—四〇
第十九章	セントランサス	性状、栽培法	四〇—四一
第二十章	ハナシユンギク	性状、栽培法	四一—四二
第二十一章	ブラキコメ	性状、栽培法	四二—四三
第二十二章	ゴデチア	性状、栽培法	四三—四四
第二十三章	サルビグロツシス	性状、栽培法	四四—四五
第二十四章	アロンソア	性状、栽培法	四五—四六

第二十五章	カムバヌラ	性状、類別、栽培法	四六—五〇
第二十六章	フロツクス	性状、栽培法	五〇—五三
第二十七章	ツクバネアサガホ(ヘチユニア)	性状、栽培法	五三—五四
第二十八章	スウイート、ビー	性状、來歴、類別、栽培法	五四—六三
第二十九章	金蓮花	性状、栽培法	六三—六四
第三十章	クワクカウアザミ	性状、栽培法	六四—六六
第三十一章	テンニンギク	性状、栽培法	六六—六七

第三十二章 トレニア 六七—七〇

性状、栽培法。

第三十三章 百日草 七〇—七一

性状、栽培法。

第三十四章 マリゴールド 七一—七四

類別、栽培法。

第三十五章 スカビオザ 七四—七六

性状、栽培法。

第三十六章 ネメジア 七六—七七

性状、栽培法。

第三十七章 マトリカリア 七七—七八

性状、栽培法。

第三十八章 リナリア 七八—七九

性状、栽培法。

第三十九章 ハリフウテウサウ 七九—八〇

第四十章 キンケイギク及びハルシヤギク 八〇—八二

性状、栽培法。

第一節 キンケイギク 八〇—八一

性状、栽培法。

第二節 ハルシヤギク 八一—八二

性状、栽培法。

第四十一章 ムギワラギク其の他の堪久花 八三—八八

第一節 ムギワラギク 八三—八四

性状、栽培法。

第二節 カヒザイク 八四—八五

性状、栽培法。

第三節 ロダンテ 八五—八六

性状、栽培法。

第四節 アクロクリナム 八六—八七

性状、栽培法。

第五節 センニチサウ 八七—八八

第四十二章 紅花サルヴィア 八八—八九

第四十三章 オランダセンニチ 八九—九〇

第四十四章 ロベリア 九〇—九二

第四十五章 鳳仙花 九二—九三

第四十六章 蔦蘿 九三—九四

第四十七章 マツバボタン 九四—九五

第四十八章 牽牛花 九五—一六二

第一節 牽牛花の來歴 九五—九八

第二節 牽牛花の性狀 九八—一九九

第一項 牽牛花の莖 九八—九九

第二項 牽牛花の葉 九九—一〇八

第三項 牽牛花の花 一〇八—一一九

第三節 牽牛花の分類 一一九—一三五

第一項 性系上の分類 一一九—一二九

第二項 觀賞上の分類 一二九—一三五

第四節 牽牛花の栽培 一三五—一六二

第一項 大輪咲牽牛花の栽培 一三五—一五〇

第二項 變り咲牽牛花の栽培 一五〇—一六二

播種。苗の假植。苗の定植。定植後の手入れ。採種。車咲牡丹。采咲牡丹。獅子咲。

第四十九章 夕顔(夜顔).....一六二—一六三

性狀。栽培法。

第五十章 エゾキク.....一六四—一六九

性狀。來歴。類別。栽培法

第五十一章 オホケタテ.....一六九—一七〇

性狀。栽培法。

第五十二章 プロワリア.....一七〇—一七一

性狀。栽培法。

第五十三章 鶏冠類.....一七一—一七四

類別。栽培法。

第五十四章 向日葵類.....一七四—一七六

類別。栽培法。

第五十五章 カ、リア.....一七六—一七七

第二篇 宿根草類

第五十六章 コスモス.....一七七—一七九

性狀。栽培法。類別。栽培法。

第一章 福壽草.....一八〇—一八五

性狀。品種。栽培法。

第二章 ニホヒスミレ.....一八五—一八七

性狀。栽培法。

第三章 雛菊.....一八八—一八九

性狀。栽培法。

第四章 アルメリア.....一八九—一九一

性狀。栽培法。

第五章 ニホヒアラセイトウ.....一九一—一九二

性狀。栽培法。

第六章 イカリサウ……………一九二—一九四
 性状、栽培法。

第七章 フリムラ(櫻草類)……………一九四—二〇八
 性状、類別、栽培法。

第八章 荷包牡丹……………二〇八—二〇九
 性状、栽培法。

第九章 芍薬……………二〇九—二一三
 性状、類別、栽培法。

第十章 ヲダマキ類……………二一四—二一六
 類別、栽培法。

第十一章 スパイレア……………二一六—二一七
 性状、栽培法。

第十二章 メセムブリアンセマム……………二一七—二一九
 性状、栽培法。

第十三章 ルビナス……………二二〇—二二二

第十四章 カーネーション……………二二三—二三〇
 性状、類別、栽培法。

第十五章 石竹類……………二三〇—二三四
 類別、栽培法。

第十六章 ミムラス……………二三四—二三六
 性状、栽培法。

第十七章 カルセオリア……………二三六—二三九
 性状、栽培法。

第十八章 ビチヨザクラ……………二三九—二四〇
 性状、栽培法。

第十九章 キンキヨサウ……………二四〇—二四一
 性状、栽培法。

第二十章 ガーベラ……………二四二—二四三
 性状、栽培法。

第二十一章 ゼウム……………二四三—二四四
 性状。栽培法。

第二十二章 エリゲロン……………二四四—二四五
 性状。栽培法。

第二十三章 ペントステモン類……………二四五—二四八
 性状。類別。栽培法。

第二十四章 ストケシア……………二四八—二四九
 性状。栽培法。

第二十五章 ノコギリサウ類……………二四九—二五一
 類別。栽培法。

第二十六章 フランスギク・ハマギク及びシヤスタデージー……………二五一—二五四
 第一節 フランスギク……………二五一—二五二
 性状。栽培法。

第二節 ハマギク……………二五二—二五三
 性状。栽培法。

第三節 シヤスタデージー……………二五三—二五四
 性状。栽培法。

第二十七章 宿根フロックス……………二五四—二五六
 類別。栽培法。

第二十八章 リクニス……………二五六—二五九
 類別。栽培法。

第二十九章 アンクローザ……………二五九—二六一
 類別。栽培法。

第三十章 スタテイス……………二六一—二六三
 類別。栽培法。

第三十一章 ユツカ……………二六三—二六五
 類別。栽培法。

第三十二章 タチアフヒ……………二六五—二六七
 性状。栽培法。

第三十三章 ソリダゴ……………二六七—二六九

第三十四章 ルドベッキア 二六九—二七〇
 性状。栽培法。

第三十五章 夕霧草 二七〇—二七一
 性状。栽培法。

第三十六章 アマダマシ 二七二
 性状。栽培法。

第三十七章 オシロイバナ 二七二—二七三
 性状。栽培法。

第三十八章 サンガイソルバ 二七四
 性状。栽培法。

第三十九章 モナーダ 二七五—二七六
 類別。栽培法。

第四十章 ヴエロニカ 二七六—二七七
 類別。栽培法。

第四十一章 桔梗 二七八
 性状。栽培法。

第四十二章 ニチニチサウ 二七八—二七九
 性状。栽培法。

第四十三章 インカーヴィレア 二七九—二八一
 性状。栽培法。

第四十四章 サンゴバナ 二八一—二八二
 性状。栽培法。

第四十五章 リアトリス 二八二—二八三
 類別。栽培法。

第四十六章 フイソステジア 二八四—二八五
 性状。栽培法。

第四十七章 モミチアフヒ 二八五—二八六
 性状。栽培法。

第四十八章 ヘレニユム 二八六—二八七
 性状。栽培法。

第四十九章 ケロネ……………二八七—二八九
 性狀、栽培法。

第五十章 リンダウ……………二八九
 性狀、栽培法。

第五十一章 ダンギク……………二八九—二九〇
 性狀、栽培法。

第五十二章 トリカブト……………二九〇—二九一
 性狀、栽培法。

第五十三章 ボルトニア……………二九二—二九三
 性狀、栽培法。

第五十四章 シウメイギク……………二九三—二九四
 性狀、栽培法。

第五十五章 ハナシユクシヤ……………二九四—二九五
 性狀、栽培法。

第五十六章 ペニバナペンケイサウ……………二九五—二九六
 性狀、栽培法。

第五十七章 アスター類……………二九六—二九八
 類別、栽培法。

第五十八章 菊……………二九八—三二九

第一節 菊の來歴……………二九八—三〇〇

第二節 菊の性狀……………三〇一—三〇二

第三節 菊の類別……………三〇二—三一三
 大菊、中菊、小菊。

第四節 菊の培養土……………三一三—三一四

第五節 菊の肥料……………三一五—三一六

第六節 菊の繁殖……………三一六—三二一

第七節 大菊の栽培法……………三二一—三二六

第八節 中菊の栽培法……………三二六—三二八

第九節 小菊の栽培法……………三二八—三二九

第五十九章 蘭類……………三二九—三五五
性狀、類別、栽培法。

第六十章 天竺葵……………三五五—三六〇
性狀、類別、栽培法。

第六十一章 フクシア……………三六〇—三六三
性狀、栽培法。

第六十二章 ヘリオトロープ……………三六三—三六四
性狀、栽培法。

第六十三章 マーガレット……………三六四—三六五
性狀、栽培法。

第六十四章 ランタナ……………三六五—三六七
性狀、栽培法。

第六十五章 クフエア……………三六七—三六八
性狀、栽培法。

第三篇 花木類

第一章 牡丹……………三六九—三七七
性狀、栽培法。

第二章 躑躅類……………三七七—三八九
性狀、類別、繁殖、植付、施肥其の他の手入。

第三章 薔薇……………三八九—四一一
性狀、類別、繁殖、花壇植、鉢植、仕立方、剪定、温室栽培。



訂增 花卉園藝 下卷

農學士 佐々木祐太郎著



一二年草類

第三章 三色堇

性狀 三色堇は英名をパンジー (Pansy) 學名を *Viola tricolor*, L. と稱し、堇菜科に屬する歐洲原産の花草にして、七八寸の高さに伸長す。葉は卵形又は橢圓形にして鋸齒を有し且つ羽狀に分裂したる托葉を有す。花は一箇づつ葉腋に生ず。花瓣は萼片と等しく五箇あれども、萼片よりも遙かに長大にして、其の大きさ各々相等しからず。花瓣の色には、通例紫・白・黄の三種あるを以て、三色スミレと

稱するも、此の三色は必ずしも一花に存することなく、一色又は二色より成るものあり。要するに花の色彩種々にして、其の大きさも亦相等しからず。隨て品種の數亦頗る多し。開花期は早春より初夏に及ぶを常とす。

圖 一 第



董 色 三

栽培法

三色董を繁殖するには、通例播種法を用ふ。即ち八九月頃、苗床又は平鉢などに種子を播き、薄く土を被ふて鎮壓したる後、薄く薬水苔などを被ひ置くときは、十日餘にして發芽すべく發芽後は薬水苔などを除くべし。此くて苗の三四葉發生したる頃、他の苗床又は鉢に假植し、秋又は早春に於て花壇に定植すべし。早春花壇に移す場合には、更に一回假植するをよしとし、冬間は適宜の霜除をなすを可とす。尙ほ六七月頃、鉢の内に、川砂と畑土とを混じたる土壤を入れ、表面を均らして、之れに嫩梢を

挿し、日蔭となして雨のかゝらぬ處に置き、時々灌水して乾燥を防ぎ、發根せしめて、苗を作ることあれども廣く行はれず。種子は、黄色を帯べる果實が將に破れんとして、上方に向へる頃、採取すべく、此の期を逸するときは、種子が自然に脱落して採收すべからざるに至る處あり。肥料は、植付の際、堆肥、油粕、灰等を施し置くべく、補肥としては、油粕の液肥などを適宜施用するものとす。

三色董は開花の進むに従ひ、草丈高くなるがゆゑに之を防ぐがため、摘心して分枝せしむるを可とす。尙ほ此の花草は、花壇植の外、鉢植に適するものにして、之が爲には、先づ三寸鉢に植ゑ、次に五寸鉢に移して開花せしむべく、鉢に入るる土壤は肥沃にして排水よきを肝要とす。而して冬に開花せしむるには、八月に播種せるものを年内に鉢植となして、木框内に入れ置くべし。但し框内の温度高きに過ぐれば、苗徒長して開花不良となるがゆゑに注意すべし。

第二章 金盞草類

類別

金盞草類とは、菊科カレンジュラ (Calendula) 屬の花草にして、其の主要な

るものは次の二種とす。

(一) 金盞草は其の學名を *Calendula arvensis*, L. 又は *Calendula officinalis*, L. var. *subsp-athulata*, Mig. と稱し、南歐原産の一二年草にして草丈一尺許に達す。葉は廣披針形にして、葉縁に尖鋭なる鋸齒を有し互生す。花は黄色、棒色等にして頭狀花序に排列し、周圍の花は舌狀花冠にして中央のものは筒狀花冠なり。

(二) タウキンセンは其の學名を *Calendula officinalis*, L. と稱し、南歐原産の一二年

草にして近年前種よりも多く栽培せらる。此の種は草姿花容共に前種に類似するも、草立稍々大にして葉縁に殆ど鋸齒なく、莖葉の毛茸は却て前種よりも多きが如し。花も亦概して前種よりも大にして花色は前種に類す。レモンクキン (*Lemon Queen*)・オレンジ

圖 二 第



ン セ ン キ ウ タ

ヂ、キング (*Orange King*)・メテオル (*Meteor*) 等の品種は就中著名なりとす。

栽培法

金盞草類は種子によりて繁殖するものにして、秋の彼岸頃に播種せるものは早春より初夏に亘りて開花し春播種せるものは夏秋の頃に開花す。種子は通例九月頃苗床に播き、一二次假植の後花壇又は畑に定植するものにして、畑植は切花採收の場合に行はる。房州などの如き暖地にては七八月に播種し秋早く定植するも、東京附近にては早春に定植すること多し。定植後補肥として液肥を適宜施し且つ落花後花梗を切り去りて結實を防ぐときは、續々開花して花期長きものとす。栽培甚だ容易なる花草にして堪寒性强きも冬季は適宜霜除をなすを可とす。又鉢植となすには肥沃にして排水よき土壌を用ひ先づ三寸鉢に植ゑ後五寸鉢に移して觀賞すること三色輩に準ず。

金盞草類は花壇植又は鉢植として觀賞する外、切花として用ひらるゝこと頗る多く、冬春の候房州などより東京市場に出づる切花の額少からざるものとす。

第三章 アラセイトウ及びハマアラセイトウ

第一節 アラセイトウ

性状

アラセイトウは英名をストック(Stock)と稱し、本邦にても近年此の名稱を用ふるもの少からず。其の學名は之を *Matthiola incana*, Br. と稱し、十字花科に屬する地中海沿岸地方原産の花草にして二尺餘の高さに伸長す。葉は披針形にして莖と等しく白色の毛茸を被むるがため、帯白綠色を呈す。花は總狀花序に排列し、春季に開花するを常とするも、溫室を利用して冬季に開花せしむることあり。花には一重咲と八重咲とあるも、近年多く栽培せらるゝは後者にして、テン、ウィーク、ストック (Ten Week Stock) と稱する種類などは就中多く栽培せらる。花は紅色を普通

圖 三 第



(咲重一) ウトイセラア

とするも、白色、紫色等を呈するものあり。切花として需要せらるゝこと多く、花壇植、鉢植として觀賞するにも可なり。

栽培法

アラセイトウを栽培するには、通例秋の彼岸頃苗床に播種し、本葉二枚許發生の頃一回假植を行ひ、冬間霜除をなし、翌春花壇其の他に定植するものとす。元來此の花草は直根伸長して細根の發生少きものなれば、苗の成長したるものは移植の際枯死することあり。此の虞を免れんがためには、移植前十分に灌水し根と土との分離せざるやう注意すること肝要なり。尙ほ此の花草は鉢植となし、冬間フレーム内にて培養することあり。其の法、種子を鉢播となし、苗の成長するに随つて三寸鉢、五寸鉢と順次に大形の鉢に移植し、翌春開花の頃に於て鉢より拔取りて花

圖 四 第



(咲重八) ウトイセラア

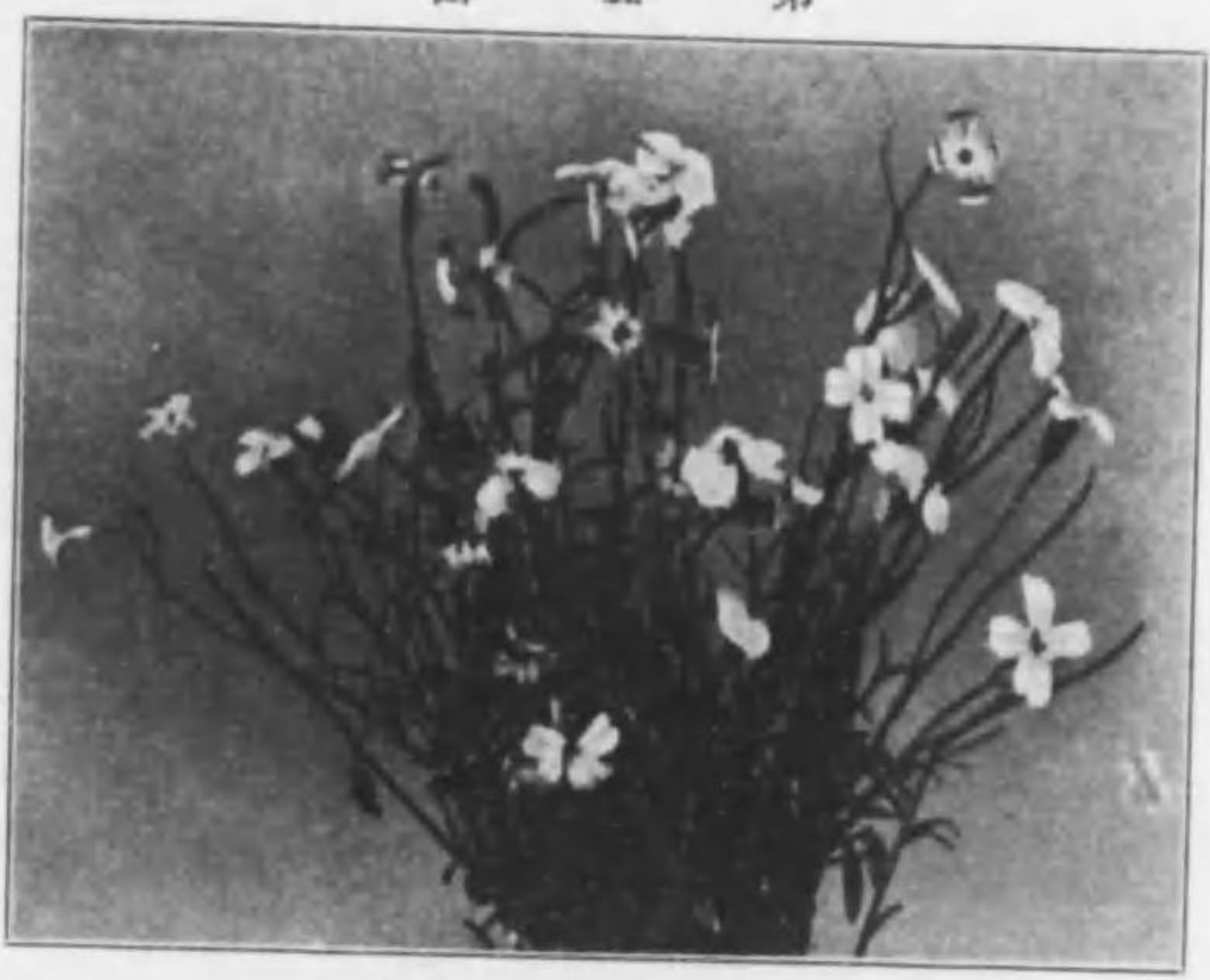
壇に植付くるか又は鉢植のまま觀賞するにあり。此くするときには根の損傷することなきがため苗の枯死する虞なきものとす。アラセイトウには一重咲と八重咲とあること既に述べたるが如し。而して

八重咲は全く種子を産せざるがゆゑに之を繁殖するには親木と稱し八重咲の現出すること多き系統の一重咲より種子を収めて播下せざるべからず。然るときは一重咲と八重咲とが或る割合を以て現出するものとす。

第二節 ハマアラセイトウ

性状 ハマアラセイトウは英名をヴァージニアン・ストック (Virginian Stock) と云ひ、學名を *Malcolmia maritima*, R. Br. と稱し地中

第五圖



ハマアラセイトウ

海沿岸地方に産する十字花科の一二年草にして、草丈は前種(アラセイトウ)よりも遙に低く六七寸を通例とす。葉は前種と異なりて卵形又は橢圓形をなし、長き葉柄を有す。花は前種と等しく總狀花序に排列し、紅、紫、白等の色彩ある四瓣花より成る。要するに此の種の花は前種の如く美大ならざるがため廣く栽培せらるゝことなきも、矮性にして可憐なるを以て賞せらる。

栽培法 ハマアラセイトウの栽培はアラセイトウに準じて可なり。

第四章 ネモフィラ

性状 ネモフィラ (*Nemophila*) と稱して普通に栽培せらるゝ花草は、其の學名を *Nemophila insignis*, Benth. と稱しハセリ草科に屬する北米原産の一二年草にして四五寸の高さに伸長す。

第六圖



ネモフィラ

莖は分枝して地面を被ひ、其の質甚だ軟弱にして有毛なり。葉は羽狀に分裂し有毛にして多くは對生す。花は廣き鐘狀をなして深く五裂し、枝頭の葉腋に一箇づ、開き、長さ花梗を有す。花色は瑠璃色を常とするも、白色のもの、白色の覆輪あるもの、花心に白斑を有するもの等あり。開花期は五六月頃にして頗る可憐の花草なりとす。

栽培法

ネモフィラは草丈低きを以て花壇の縁植となし、毛氈花壇などに採用するに宜しく、又鉢植となして觀賞するに可なり。之を栽培するには春秋二季に苗床又は鉢に播種して可なるも、寧ろ秋播となし、苗の小なる間に鉢植となしてフレームなどに入れて越年せしめ、早春花壇に移植するか又は大鉢に移して觀賞するをよしとす。莖は肉質にして軟弱なるがため、高温多濕の際腐敗病に罹りて枯死することあり。

第五章 ヤグルマギク類

類別

ヤグルマギク類は菊科セントウレア (Centaurea) 屬の花草にして、其の重

ストック

フクロナデシコ

キンセンクワ

ヤグルマギク

パンジー



アノミソウ

アノミソウ

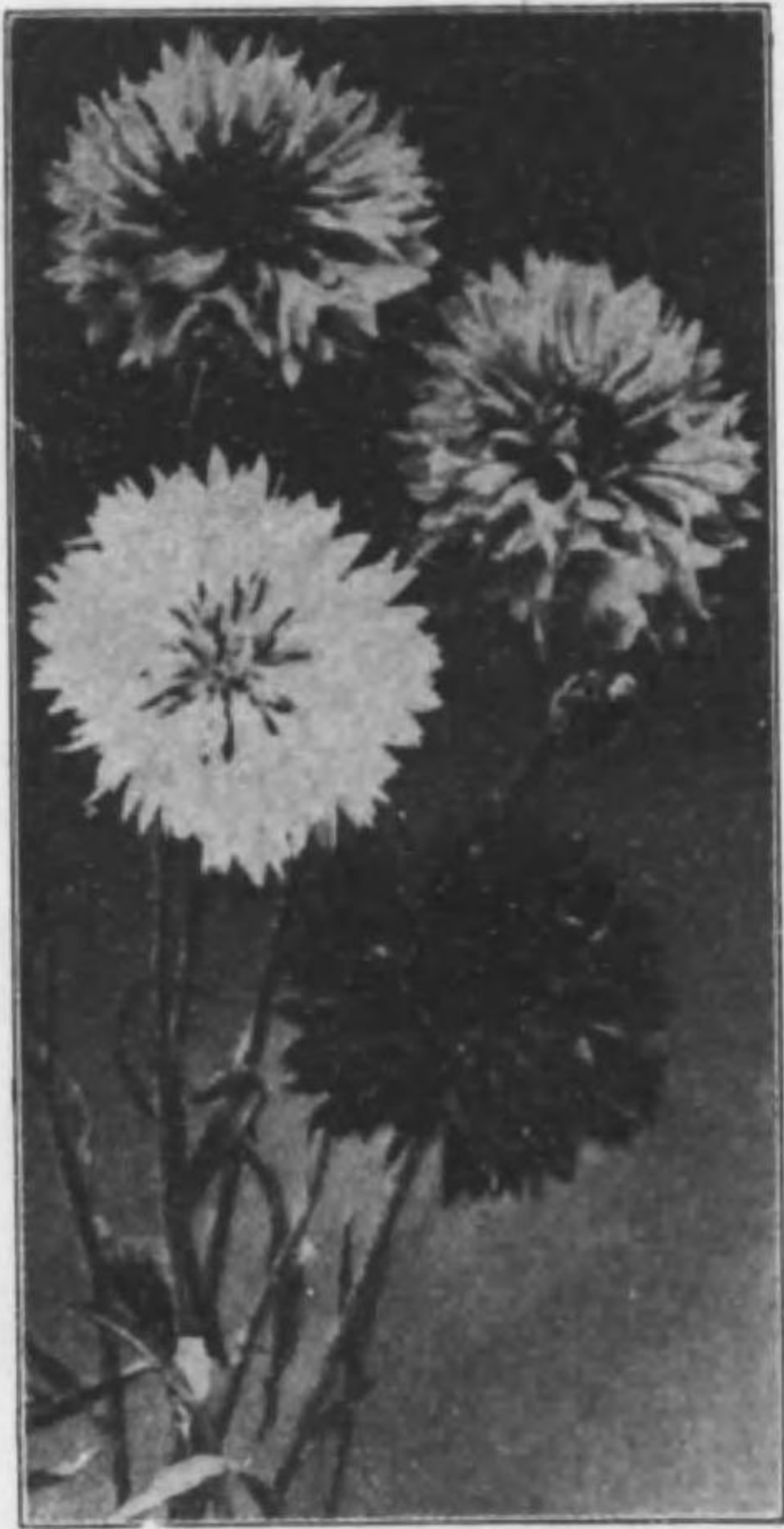
アノミソウ

アノミソウ

アノミソウ

要なるものは次の二種とす。

(一) ヤグルマギクは英名をコーン・フラワー (Corn Flower) 學名を *Centaurea cyanus*,



クギマルグヤ

「と稱し、歐洲原産の一二年草にして、二三尺の高さに伸長し、莖葉共に綿の如き毛を以て被はる。葉は細長く尖りて互生し、花は頭狀花序にして花冠はすべて筒狀をなし、其の周圍のものは、較や大

形にして矢車形をなし紫藍・紅・白等の色彩あり。開花期は通例四五月頃とす。

(二) ニホヒヤグルマギクは英名をスウィート・サルタン (Sweet Sultan) 學名を *Centaurea moschata*, L. と稱し、ベルシア地方の原産にして、二尺餘の高さに伸長す。莖葉共に平滑にして葉は羽狀に裂け、花冠は細裂して毛狀をなす。花色に白・黄・紫・紅等あり何れも香氣を有す。開花期は通例五六月頃とす。

圖 八 第



クギマルグヤヒホニ

り。花は淡紫色にして薊の花に類似す。開花期は六七月頃とす。

栽培法

ヤグルマギク類は、栽培し易き花草にして播種によりて繁殖す。種子は春秋兩季に播下し得るも、秋彼岸頃に播くをよしとす。通例苗床に播き、苗の二三寸に伸長せる頃花壇に定植するも、本葉二三枚發生せる頃一回他の苗床に假植するを可とす。定植後は、開花期までに一二回、油粕などを水に入れて腐熟せしめたるもの、上水を稀釋して、與ふるときは、甚だよく發育するものとす。

(三)アザミヤグルマギク

は英名をバスケットフラワー (Basket Flower) 學名を *Centaurea americana*, Nutt. と稱し、四尺内外の高さに達す。花梗太く、總苞は籠の目の如き觀あるを以てバスケット、フラワーの名あり。

圖 九 第



コシアナギム

此の花草は概して寒氣に堪ふる力強きを以て、秋播せる苗にも、特に霜除を設けずして可なるが如きも、霜除の下にて越冬せしめ翌春定植するの可なるものもありとす。尙ほヤグルマギク類は一般に切花として需要甚だ多きがため、特に切花用として畑地に栽培せらるゝこと多し。性一般に強健にして一旦栽培せば種子落下して年々自生すること往々見る所なりとす。

第六章 ムギナデシコ

及びヴェイスカリア

第一節 ムギナデシコ

性状

ムギナデシコ(ムギセンワウ)は、其の學名を *Lychnis Githago*, Scop. 又は *Agrostemma Githago*, L. と稱し石竹科に屬する花

草にして高さ二尺餘に達す。葉は對生にして狭披針形をなし、花は長き花梗の頂に生ず。花瓣は五箇ありて淡紅紫色を呈し、花形や、梅の花に似たるを以て俗に梅撫子と稱す。萼は其の基部筒狀をなし、上部は五片に分たれ、其の各片は長くして且つ鋭し。

栽培法

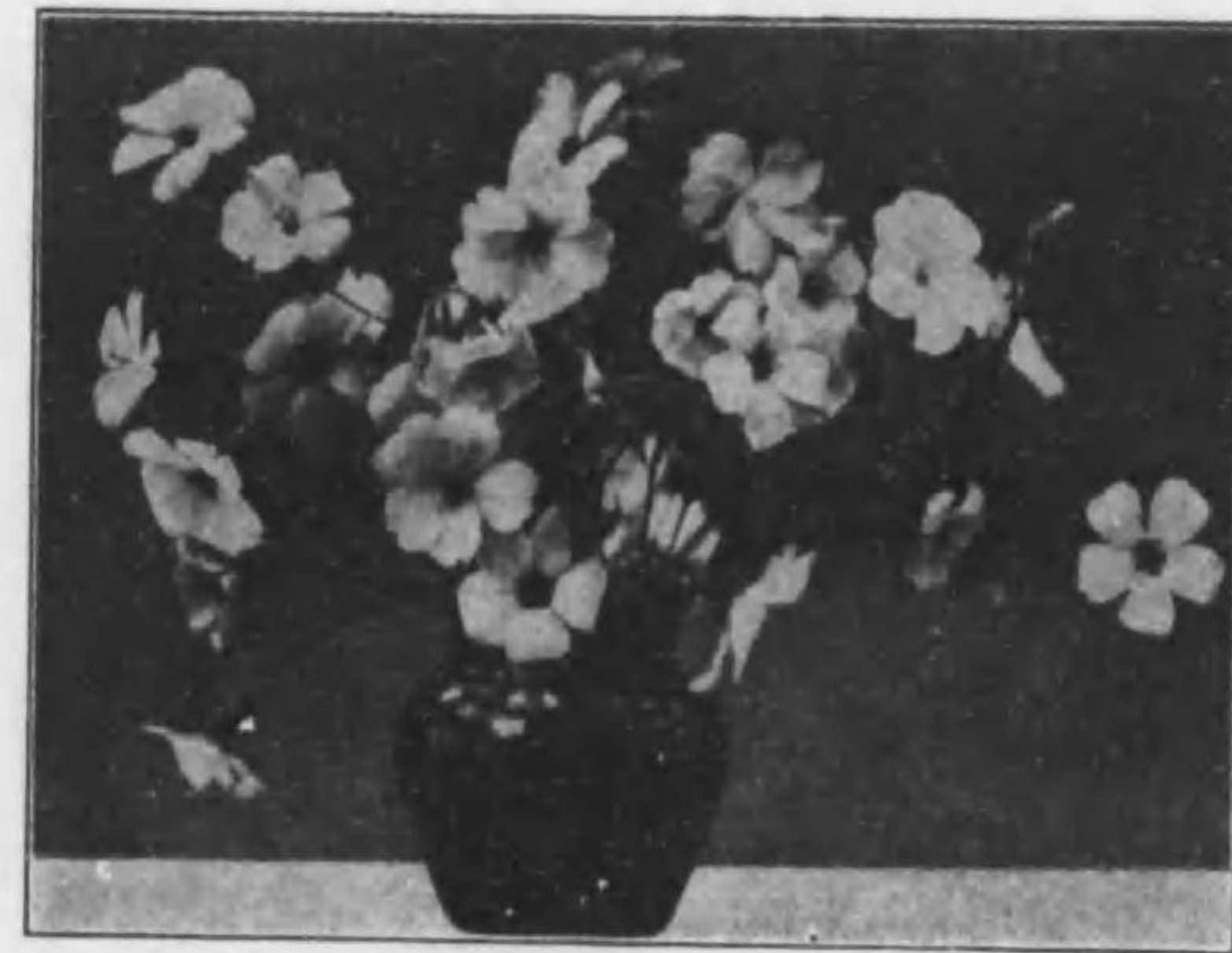
ムギナデシコを栽培するには、早春又は秋苗床に播種し、苗の二三寸に長するを俟ちて、花壇に定植するを常とす。栽培甚だ容易にして、春夏の頃に開花す。此の花草も、亦切花とするに宜しく、之がため、畑地に栽培せらるゝことあり。

第二章 ヴイスカリア

性状

グイスカリア (*Viscaria*) と稱して普通に栽培せらるゝものは其の學名を *Lycchnis*

第十圖



アリカスイダ

viscaria, L. と稱し、石竹科の宿根草なるも、一二年草として栽培せらる。草丈は二尺許にして葉花共に前者に類するも、萼片は前者の如く長からず、葉も亦前者に比して滑かなり。花色は深紅色を普通とするも、紫、淡紅、白等もありとす。

栽培法

グイスカリアは花壇植、鉢植として觀賞するに宜しく、通例秋播となして春に開花せしむ。ムギナデシコよりも多く栽培せらる。

第七章 ヒエンサウ類

類別

ヒエンサウ類は毛茛科 *Delphinium* 属の一二年草又は宿根草にして、本属には、約六十種あるも、本邦にて栽培せらるゝものは主として次の二種とす。

(一) ヒエンサウ (飛燕草) 即ち千

第十圖

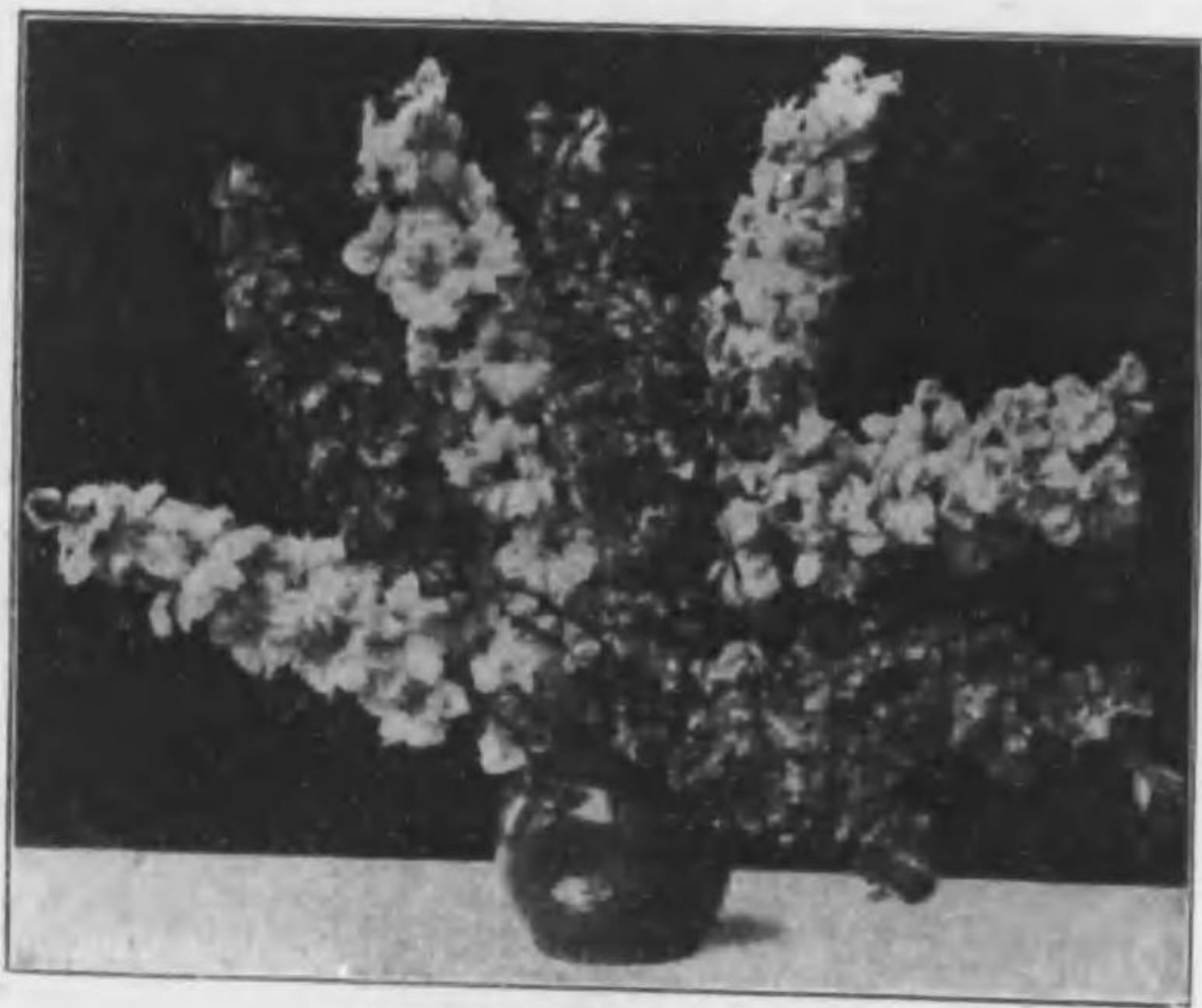


飛燕草

鳥草は英名をラークスバー (Lark Spur) 學名を *Delphinium Ajacis*, L. と稱し、北半球の温帯地方に自生する一二年草にして花形稍や飛燕に似たるを以て、此の名あり。莖は二尺餘に伸長し、葉は互生し、細裂して絲狀をなす。花は總狀花序に排列し、白、紅、青、莖等の色彩を有し、長さ距を具ふ。此の種の變種に、丈低くして、八重の花を開くものあり。矮性ストック咲飛燕草 (Dwarf Stock Flowered Larkspur) の如き即ち是なり。

(二) **ルリヒエンサウ** は其の學名を *Delphinium Consolida*, L. と稱し、歐州原産の一二年草にして、一尺五寸内外の高さに伸長す。葉は互生にして細裂し、恰もウキキヤウの葉の如し。花は前種に類するも較や大にして、花色に紫、青、白等あり。

第三十圖



草燕飛咲クツトス

栽培法 飛燕草は、春秋の彼岸頃に種子を苗床に播下し、苗の稍々長ずるに及んで花壇に定植するものにして、秋播種するときは、春夏の頃に開花し、春播種するときは、夏秋の頃に開花するものなり。本邦にては、通例秋苗床に播種し、本葉二三枚發生する頃他の苗床へ假植し、冬間適宜霜除をなして春花壇に定植す。此の花草は栽培容易にして、肥料の如きも特に多く施すの要なく、開花の頃までに一二回、油粕などの稀薄なる液肥を施せば、良く發育して盛に開花するものとす。尚ほ此の花草は切花として需要せらるゝこと頗る多く、特に其の目的を以て畑地に栽培せらるゝこと多し。

第八章 シネラリア及びジャコベア

第一節 シネラリア

性状 シネラリア (*Cineraria*) は、菊科に屬する花草にして、普通に栽培するものは、主として亞弗利加カナリー島の原産なる *Cineraria cruenta*, Mass. に由來し、元來多年草なるも、一般に一二年草として栽培せられ、堪寒性弱きものとす。莖は一

圖三十第



シリラネシ

は紅・淡紅(桃色)・紫白等にして、蛇の目絞などあり。通例單瓣なれども、重瓣のものあり。又花瓣に廣狹大小の別あるのみならず、咲方に普通の平咲の外カタマス咲 (Cactus-flowered Cineraria)・星咲 (Star Cineraria) 等ありて、品種頗る多し。尙ほシネラリアにはシルバー、シネラリア (Silver Cineraria) と稱するものあり。其の學名は *Cineraria maritima* にして、葉(長くして羽狀の缺刻あり)は表裏共に白色の細毛をし銀白色を呈するがため觀葉の目的を以て栽培せらる。

栽培法

シネラリアを繁殖するには、通例播種法を以てす。即ち六月乃至九月頃に、輕き畑土に腐葉土・川砂などを混じたるものを篩ふて、平鉢又は淺き箱底には鉢の破片などを入れて排水をよくす)の中に入れて、其の表面を壓し均らして、播種し、殆ど土を被はずして、目の極めて細き如露を以て水を與へ(如露にて水を灌ぐ代りに、鉢の底を鹽の水に浸して、水を吸ひ上げしむるも可なり)新聞紙などを被ふて、フレイムなどに入れ、霞簀を覆ひ置くものとす。冬に開花せしむるものは六月乃至七月上旬頃に播種するを可とし、翌春四五月頃に開花せしむるには八九月頃播種して可なり。かくて發芽するまでは溫暖且つ濕潤に保つべくやがて一週間許を経て發芽せば、新聞紙を除きて、空氣のよく通ふやうにし、且つ強き日光に當てざるやう注意すべし。幼

圖四十第



シリラネシ 咲星

苗時代は腐敗し易きがゆゑに、空氣の流通をよくする外、肥料の多きに失せざるやう注意すること肝要なり。斯くて、苗の極めて小なる間(發芽後一週間餘)に他の平鉢又は淺き箱に前と同様の土を盛り、竹製のピンセットを以て一本づつ丁寧に六七分の間隔に移植し、細目の如露にて苗を倒さぬやう丁寧に灌水するか又は鹽の水に浸して水を吸ひ上げしむべし。爾後灌水と日除とに注意すれば



圖 五 十 第

ア リ ラ ネ シ 花 大

數日後には活着するがゆゑに、朝夕のみ日光に曝らし日中の強光を遮るを可とす。やがて本葉二三枚發生せば更に一回前同様の平鉢に移植(此の際用ふる培養土は前回よりも肥料分に富むを要す)し、本葉四五枚發生したる頃徑三四寸の鉢に一本づつ移植すべし。此の際に用ふる培養土は肥

沃にして排水よきを可とし、砂質壤土に腐熟したる堆肥の粉末を多く加へ更に油粕骨粉などを少しく混じてよく腐熟せしめたるものなどを可とす。やがて苗の根が鉢内に十分に擴がり白根が鉢の底穴から露出するに至れば、更に大なる鉢に移し、此くして遂に徑六寸許の鉢に移して開花せしむ。すべて移植の際は根と土との離れぬやう注意すべく、且つ二三日間は日蔭となし、根着きたる後は朝夕日光に當て、十月頃より終日日光に當て、可なり(苗を強健ならしむべし)。尚ほ成長中は、灌水に注意し、且つ三四寸鉢に移植後は、苗の發育に顧みて適宜稀薄の液肥を施すをよしとす。又此の花草は、寒氣に堪ゆるの力弱きが故に九月末頃より夜間は鉢を入れたる木框の上に硝子障子を被ふべく、更に寒氣の加はるに隨ひ藎又は菘を障子の上に覆ふて防寒すべし。然るときは六七月頃に播種せるものは十二月頃より開花し始むるを見るべく、此の際低溫の溫室内に入るゝときは、一齊に開花するものとす。

第二節 ジャコヘア

性状

ジャコベア (Jacobaea) と稱して普通に栽培せらるゝものは其の學名を *Jacobaea elegans*, Moench. 又は *Senecio elegans*,

と稱し菊科に屬する亞弗利加原産の一二年草にして、一二尺の高さに伸長す。莖は直立して分枝し、葉は肉質にして羽狀に裂け其の基部は莖を抱擁す。花はシネラリアに似て枝頭に生じ、舌狀花冠は紫紅色(白色もあり)筒狀花冠は黄色を呈するを常とす。花期は五六月頃なるも播種期によりて一ならず。花には一重咲の外に八重咲もあり。

栽培法

ジャコベアは播種によりて繁殖するを常とし、播種期は秋又は春なるも秋に於て行ふを常とす。播種は床蒔又は鉢蒔とし、苗の小なる間に他の苗床又は鉢に移植し、冬間霜除をなして寒害を防ぎ、翌春花壇に定植して開花せしむるも鉢植として觀賞すること多し。尙ほ鉢植となすものはフレームにて越

圖 六 十 第



アベコヤジ

ハナビシサウ

ジャコベア

ヒエンサウ

シザンサス

ヒナゲシ



イヌハゲ

イヌハゲ

イヌハゲ

イヌハゲ

イヌハゲ

年せしむるを常とし、栽培概してシネラリアに準ず。

第九章 シレネ

類別 シレネ (*Silene*) は石竹科シレネ属の一二年草又は宿根草にして、就中多く栽培せらるゝは次の二種とす。

(一) フクロナデシコ 此の種は一名オホマシテマにして學名を *S. Pendula*, L. と稱し地中海沿岸地に自生する一二年草なり。草丈は一尺餘に達し、莖葉共に毛茸を被ひ、莖は多少地面を匍ふ性あり。葉は對生にして、下部のものは較や大なる橢圓形又は廣披針形をなし、上部に至るに従ひ、漸く小なり。花は春季、葉腋に一二箇づつ生じ、花瓣は五箇にして、淡紅色を呈し、白色もあり、萼は筒状をなし

圖七十第

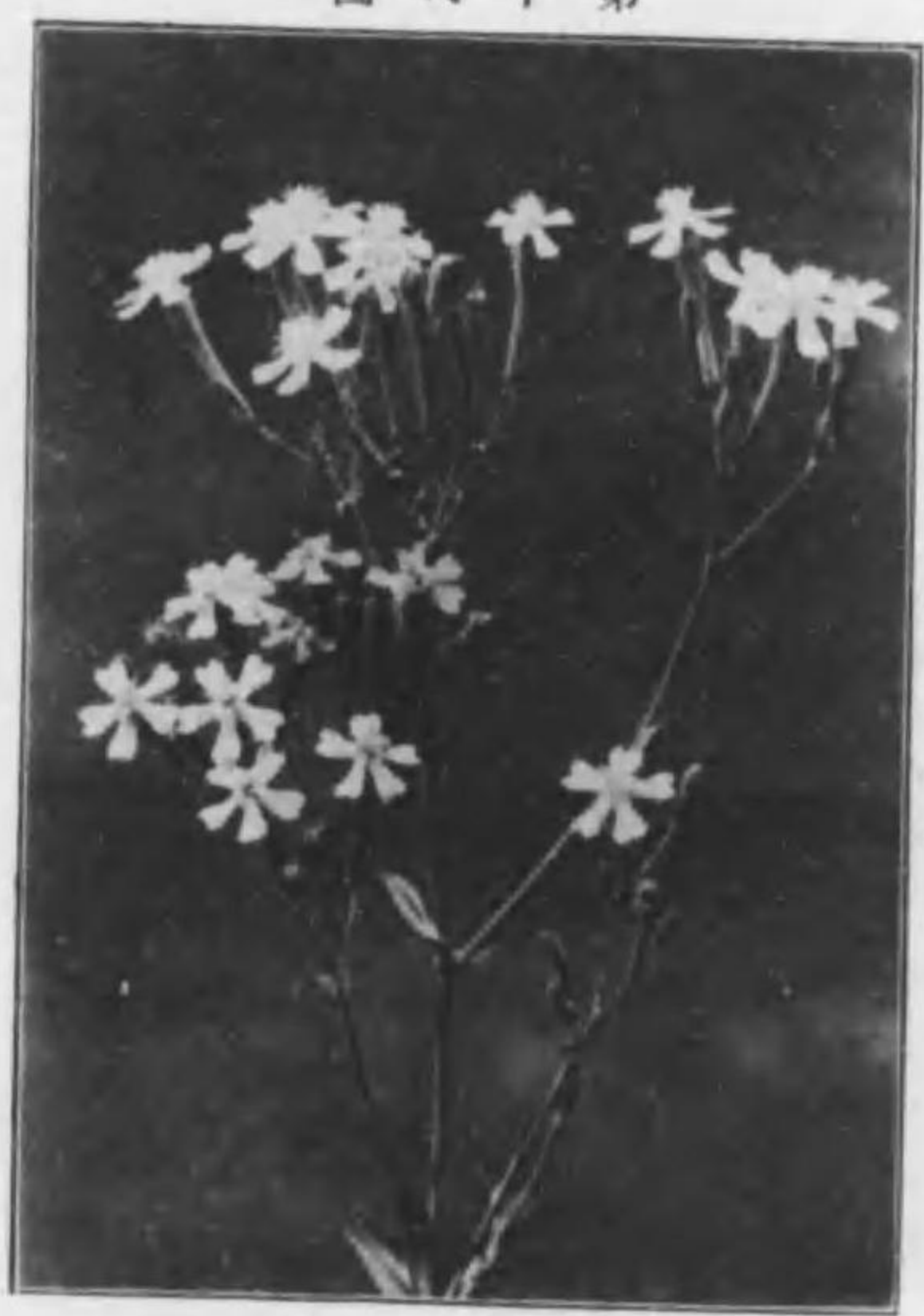


コシデナロクフ

て膨大し、縦の脈あり。此種の變種に、コムバクタ (var. compacta) と稱する極めて矮性のものあり。花壇の縁植となし、又は毛氈花壇などに植込むに好適す。

(二) **ムシトリナデシコ** 此の種は學名を *S. Armenia, L.* と稱し、歐洲南部の原産にして、英名をローベルス、キャッチフライ (Lobel's Catchfly) と稱し、邦名はムシトリナデシコの外、俗に小町櫻の稱あり。一二年草にして、草丈は二尺内外に達し、上部の節の下より褐色の粘液を分泌し、小蟲の上昇するを防ぐ性あり。葉は對生にして、長卵形又は卵圓披針形をなす。花は紫紅色(又は白色)にして、五六月頃枝の頂に聚繖花序をなして生ず。

栽培法 シレネは耐寒性强き花草にして、多くは秋彼岸頃に播き、春夏の候に觀賞す。されど、春三四月頃播種して、夏秋の觀賞に供することあり。元來、強健



ムシトリナデシコ

第八十圖

なる花草にして、殊にムシトリナデシコの如きは、一旦之を栽培するや、種子自ら落下して發生し、再び播種の要なきこと、往々見る所なり。フクロナデシコも亦往々自生することあり。

第十章 勿忘草

性状類別

勿忘草は、英名を *Forget-me-not* と稱し、紫草科ト、ミーナット (*Forget-me-not*) と稱し、紫草科ミオソチス屬 (*Myosotis*) の多年草(又は一二年草)にして、此の屬には約三四十種あるも、花壇に栽培せらるゝものは、僅に數種に過ぎず。葉は概ね細長き橢圓形にして、多少毛を被ひ、根生葉には葉柄あるも、莖生葉は無柄なるを常とす。元來、學名ミオソチスは、希臘語の *Mis* 即ち鼠と、*os* 即ち耳と

第九十圖



サゲナレスワ

に由来するものにして、蓋し、葉形の鼠の耳に類似するものあるに基づくなり。花は、春夏の候に開き、藍白淡紅等の色彩を呈し、頗る可憐の小輪花にして、花序は總狀をなし、其の先端旋回す。萼は五箇の萼片より成れども、其の基部に於て合着し、花冠は裂片部と筒部とに分たれ、裂片即ち花瓣は五箇ありて、盆狀又は漏斗狀をなす。雄蕊も亦五箇あり、短き花糸によりて、花冠筒部の咽喉に着生す。花柱短く、種子は暗色にして一花に四箇を生ず。ミオソチス屬の原産地は温帶地方なるも、現今栽培せらるゝものは主として歐洲産のものとする。今此の屬の主なる種二三を擧ぐれば、次の如し。

(一)ミオソチスシルワチカ (*M. sylvatica*, Hoffm.) 此の種は歐洲及び北亞細亞に原産の多年草にして、其の丈一尺乃至二尺許あり。莖は基部より分枝し、毛あり。葉は橢圓狀披針形にして、毛あり。花は鮮藍色を常とするも、白淡紅等の色彩を有するものあり。尚ほ此の種の花序は長くして、花の着生疎なるを常とす。

(二)ミオソチスアルベストリス (*M. alpestris*, Schmidt.) 此の種は歐洲原産にして、前種に類するも、矮性にして三寸乃至八寸許の草丈を有し、花序短くして、花の着

生密なり。尚ほ此の種の花梗は短大にして向上し、萼と略ぼ同長なるも、前種にありては花梗は萼よりも遙に長きを常とす。莖は分枝性多くして、叢生し半直立性にして毛あり。花は藍色にして中心黄色を呈す。本邦に於て普通に栽培せらるゝは本種なりとす。

(三)ミオソチスパルストリス (*M. palustris*, Lam.) 此の種は、眞の勿忘草にして、草丈五六寸乃至一尺餘あり。葉は橢圓狀披針形又は倒披針形をなして毛あり。花は疎に排列せる總狀花序をなし、空色にして花心黄色を呈す。多年草にして歐亞に自生す。

栽培法 勿忘草は通例、花壇に栽培し、又鉢植となして觀賞するに用ひられ、開花期は五六月を常とす。之を繁殖するには挿木、分株などの法を用ふることあるも、播種法によるを常とす。播種は春秋二季に行はるゝも、通例秋播となし、冬季霜除を行ふ。此の際苗を徑二三寸の小鉢に移植して冷床に入れ越冬せしむれば甚だ可なり。かくて春に至れば鉢植として觀賞するものは徑五寸許の大鉢に移植すべく、花壇植となすものは小鉢より丁寧に採取りて適當の位置に植

付くべし。一旦栽培したる地には種子は往々落下して自然に發芽することあり。

第十一章 罌粟類

類別 罌粟類(英名 Poppy)は、罌粟科パ、ペル(Papaver)属の一二年草又は宿根草にして、歐洲北亞細亞等の原産なり。之等の中、本邦にて普通に栽培する一二年草は、次の二種とす。

(一) 罌粟(英名 Opium Poppy)は、其の學名を *Papaver somniferum*, L. と稱し、草丈四五尺に達す。葉は無柄にして莖を抱き、長橢圓形又は長卵形にして缺刻又は鋸齒を有し、葉面には白粉を被ふ。花は、美大にして、長き花梗の上に開き、四箇の花弁を有す(重瓣種は、花瓣の數更に多きこと、

圖 十二 第



シケ

勿論なり)。萼片は二箇あるも、蕾の間之を包擁し開花と同時に脱落す。果實は蒴にして殆ど球狀をなし、數多細微の種子を藏す。此の果實の未熟なるものを傷つけて出づる所の乳狀液を乾かせるものは、即ち藥用亞片にしてモルヒネは、之より製するものなり。花色は、紅色、紫色、白色等にして、單瓣並に重瓣の二種あり。重瓣種中、牡丹の如き花を開くものを牡丹咲罌粟(*Paeoniaeflorum*)と云ひ、艶麗なるを以て稱せらる。花期は春夏の候とす。切花に適せず。

(二) 虞美人草(英名 Corn Poppy)は、其の學名を *Papaver Rhoeas*, L. と稱し、草立花形共に前種よりも小なり。即ち高さ二尺内外の草本にして、莖葉共に毛を有し、葉は羽狀に分裂して互生す。花は、前種と等しく、通例二萼片、四花瓣にして、萼は開花の時に脱落し、花梗及び萼に毛あり。花

圖 一十二 第



シケナヒ

色は紅紫、白、覆輪等にして開花期は春夏の候とす。花瓣は甚だ散じ易くして、切花に適せず。シャローレー、ポッピー (Shirley Poppy) は之に屬す。

栽培法 罌粟類は、其の性移植を厭ふがゆゑに、種子は之を直播となすべく、播種期は、九十月頃又は三四月頃とす。秋播せるものは、翌年春夏の候に開花し、春播は稍々遅れて開花す。本邦にては、通例秋播となし、春夏の候に開花せしむるも、寒地にては春播となすこと多し。播種終れば、種子の上に極薄く土を被ふて、鎮壓すべく、種子細微なるを以て被土の深きに陥らざるやう注意すること肝要なり。斯くて發芽せる苗の一二寸に伸長するに及べば、罌粟は一尺四五寸、虞美人草は六七寸の距離に、一本づつ残して間引くべく開花の頃まで、一二回、稀薄の液肥を施すときは、良く發育して、美大の花を開くものとす。尙ほ落花後は、速に切り去りて、結實せしめざることも、美大の花を續々開花せしむるに肝要なる手入なりとす。

第十二章 ハナビシサウ

性状

ハナビシサウ(英名 Californian Poppy) は、其の學名を *Escholtzia californica* Hook. と稱し、罌粟科に屬するカリフォルニア原産の多年草(一二年草)にして、一二尺の高さに伸長す。葉は絲狀に細裂して、帶白綠色を呈す。花は大にして日照時のみ開き、通例黄色なるも、赤色、白色を呈するものあり。花形ヒナケシに類し、四箇の花瓣と二箇の萼片とを有す。萼は、蕾の間は、鞘の如く之を包めども、開花するに至れば、脱落す。果實は、莢狀の裂果にして、長さ三寸内外に及び、多くの種子を有す。

栽培法

ハナビシサウは、其の性、移植を忌むがゆゑに、種子は直播となすべく、苗の極幼小なる間は、根を切らざるやう注意して、丁寧掘取るときは、移植し得ざるにあらず、其の時期は、春秋何れにても可なり。栽培容易にして、美大の花を開き、花壇植又は鉢植となすに適す。開花

圖 二 十 二 第



ハナビシサウ

期は、播種期によりて異なるものにして、三四月頃播種せるものは、夏秋の候に開花し、九十月頃播種せるものは、翌年春夏の候に開花す。本邦にては、秋播となし、春夏の候に開花せしむるを通例とし耐寒性强し。尚ほ此の花草は移植を忌むこと前述の如くなるを以て、一本づつ鉢植となし置けば、開花中と雖ども安全に移植することを得て、便利なりとす。其の他、手入としては、鉢植のものは勿論、花壇植のものと雖ども、乾燥甚しき場合には、適宜灌水すべく、開花期までに一二回、稀釋せる液肥を施すときは、良く繁茂して、續々美大の花を開くものなり。此の花草の缺點とする所は、移植の困難なること並に花瓣の散り易きことにして、花の美大なると葉の優美なるとは共に觀賞に値するものとす。

第十三章 スウィート、アリツサム

性状

スウィート、アリツサム (Sweet Alyssum) は、其の學名を *Alyssum maritimum*,

Lam. と稱し、十字花科に屬する歐洲原産の一年草にして、通例七寸内外の高さに伸長す。葉は線形乃至披針形をなして、基部細く、花は小なるも白色にして、芳

ムギナデシコ

ムシトリナデシコ

ジブソフィラ

カムバヌラ

ウイスカリア

カンヂタフト



ムササビ

ムササビ

ムササビ

ムササビ

ムササビ

ムササビ

香を有し、總狀花序をなして數多着生す。開花期は春夏の頃とす。此の花草は草丈甚だ低くして分枝性に富み、枝頭に花を密生するがゆゑに、花壇の縁植となすに宜しく、又毛氈花壇などに栽培せらるゝこと多し。

栽培法

スウィート、アリッサムは播種によりて繁殖するものにして多くは秋に於て行ふ。秋播となせるものは冬季は霜除をなし、翌春霜害の虞なきに至りて花壇に定植す。又鉢植となして早春に開花せしむるものは低温の温室内に入れ置くを可とす。

第十四章 **カンヂタフト**

性状

カンヂタフト (Candytuft) は學名を *Iberis amara*, L. と稱し、十字花科に屬す

圖 三 十 二 第



ムサツリア トーイウス

圖四十二第



トフタヂンカ

壇に植付けて觀賞するに可なり。尙ほ花は白色を常とするも紅色のものもあり。花輪の大小草丈の高低も亦品種によりて相違あるが如し。

栽培法

カンヂタフトを栽培するには春秋二季に播種するものにして、春播は初夏の頃に開花し、秋播は春に開花す。通例秋播となし、霜除の下にて越年せしめ、翌春花壇に定植するも、移植は稍々困難なるを以て、花壇に直播して適宜間引を行ふを可とす。

第十五章 アルクトチス

性状

アルクトチス (Arctotis) と稱して普通に栽培せらるゝものは、學名を *Arctotis stoechadifolia*, Berg. と稱し、

菊科に屬する一二年草又は宿根草にして草丈は二尺許あり。根生葉は廣披針形にして葉縁に缺刻あり。又莖生葉は根生葉よりも小にして、且つ上部に至るに従つて漸次小形となる。葉は何れも白色の毛茸を以て被はる。莖

圖五十二第



スチトクルア

は分枝性に富み殊に根際に於て數多分枝し枝端に開花す。花は白色なるも其の外側は多少淡紫色を帶ぶ。開花期は六七月頃にして切花として需要せらるること多く、花壇植として觀賞するにも可なり。日中殊に午前中によく開花す。

此の花草は亞弗利加の原産なるを以て英名を African Daisy と稱す。

栽培法 アルクトチスを栽培するには春秋二季に播種して可なるも、通例は秋苗床に播種し、本葉二三枚の頃他の苗床へ移植して冬間霜除をなし、春季處要の位置に定植するものとす。秋播のものは六七月頃に開花するも、春播のものは夏秋の候に開花す。

第十六章 ジブソフィラ

性状・類別

ジブソフィラ (Gypsophila) は石竹科に屬する歐亞原産の一二年草又は宿根草にして通例二三尺の高さに伸長す。莖は分枝すること多く、白色又は紅色の小花群生して恰も霞の棚引けるが如き觀あり。故に霞草と稱せらる。ジブソフィラ屬中主要のものは次の二種とす。

圖六十二第



ライソソフィラ

(一) ジブソフィラ・エレガンス (Gypsophila elegans, Bieb.) 此の種はコーカサス原産の一二年草にして、二尺許の高さに伸長す。葉は上部にあるものは線形をなし下部にあるものは長橢圓形又は筵形をなし何れも莖を包擁す。花は五瓣の小花にして白色を常とするも紅色のものあり。切花として近年多く需要せらる。開花期は五六月頃とす。

(二) ジブソフィラ・パニキュラタ (Gypsophila paniculata, L.) 此の種は歐洲原産の宿根草にして前種よりも稍々高く伸長す。葉は線狀披針形にして上方のものは下方のものよりも小なり。花は前種に等しく白色を常とす。切花として多く需要せらるゝこと亦前種に等し。開花期は五六月頃とす。

栽培法

ジブソフィラは春秋二季に播種して可なるも、通例秋播となしフルームなどに入れて越冬せしめ、翌春花壇其の他に定植するものとす。但し宿根性のものは晩秋根元より枝を剪除し置くときは、翌春新芽を發生して開花す。尙ほ宿根性のものは分株によりて繁殖することを得るも、往々播種法を用ひて繁殖す。

第十七章 クロタネサウ（ニゲラ）

性状

クロタネサウ (*Nigella*) は學名を *Nigella damascena*, L. と稱し、毛茛科に屬する南歐原産の一二年草にして、二尺内外の高さに伸長し、能く分枝す。葉は深綠色にして糸狀に細裂し、花は藍色又は白色を呈して枝頭に生ず。花瓣は五箇ありて其の先端は淺く二裂し、總苞も亦細裂して之を包圍す。果實は球狀をなして黑色の種子を含むがゆゑに黒種草の名あり。屬名ニゲラの起原も亦茲にありとす。此の花草は五六月頃に開花するを常とし、花壇に栽培する外、切花として需要せらるゝこと多く、一重咲の外、八重咲あり、又花輪の大なるものもありとす。英名をラヴ、イン、ア、ミスト (*Love in a Mist*)

第二十七圖



ウサネタロク

と云ふ。

栽培法

クロタネサウは春秋二季に播種して可なるも、秋播となし、苗の一、二寸に伸長せる頃他の苗床に移植して霜除の下に越冬せしめ、翌春花壇に定植するを常とす。栽培容易なる花草なり。

第十八章 シザンサス

性状

シザンサス (*Schizanthus*) は茄科に屬する智利原産の一二年草にして數種あるも、就中重要なるものは學名を *Schizanthus pinnatus*, Ruiz. et Pav. 又は *Schizanthus grandiflorus*, Hort. と稱し、英名ウイングリーフ、バターフライフラワー (*Wingleaf Butterfly-flower*) の稱あるもの是なり。此

圖八十二第



スサンザシ

の花草は二尺内外の高さを有し、葉は羽狀に裂け裂片に鋸齒あるを常とす。花は圓錐花序をなして枝頭に生ず。花冠の基部は筒狀をなし、上部は上下兩唇に分れ、且つ屬名シザンサス(裂けたる花の意あり)の稱あるが如く、深き切れ込を有す。花色には紫、紅、白等種々あり。此の花草には矮性の改良種ありて特に鉢植に適し、梢頭一圓に花を以て被はるゝの觀あり。開花期は温室にては冬春の候なるも露地にては春夏の候とす。

栽培法

シザンサスを栽培するには春又は秋に於て播種す。即ち温室内に於て鉢植として觀賞するには夏播又は秋播を行ふも、花壇植となすには秋播となしてフレーム内にて越年せしむるか又は春播となすものとす。播種は鉢又は苗床に於て行ふ。耐寒性は強からず。

第十九章 セントランサス

性狀

セントラサス(Centranthus)と稱して普通に栽培せらるゝ花草は、其の學名を *Centranthus macrosiphon*, Boiss. にして、敗醬科に屬する西班牙原産の一二年草

にして一二尺の高さに伸長す。葉は卵形帶白綠色にして缺刻及び鋸齒を有し對生す。花は稍々不齊なる合瓣花冠にして淡紅色を呈し、其の形小なるも、繖房狀に排列し梢頭に密生するを以て、美觀あり。春夏の候に開花す。

栽培法

セントランサスは春秋二季に播種するも、秋播となして其の苗を冬間フレームに入れ又は霜除の下にて保護し、翌春に至りて花壇に定植するときは、五月頃より開花す。花壇植の外、鉢植として觀賞するに可なり。

圖九十二第



スサンラトンセ

第二十章 ハナシユンギク

性狀

ハナシユンギクは學名を *Chrysanthemum carinatum*, L. と稱し、菊科に屬す

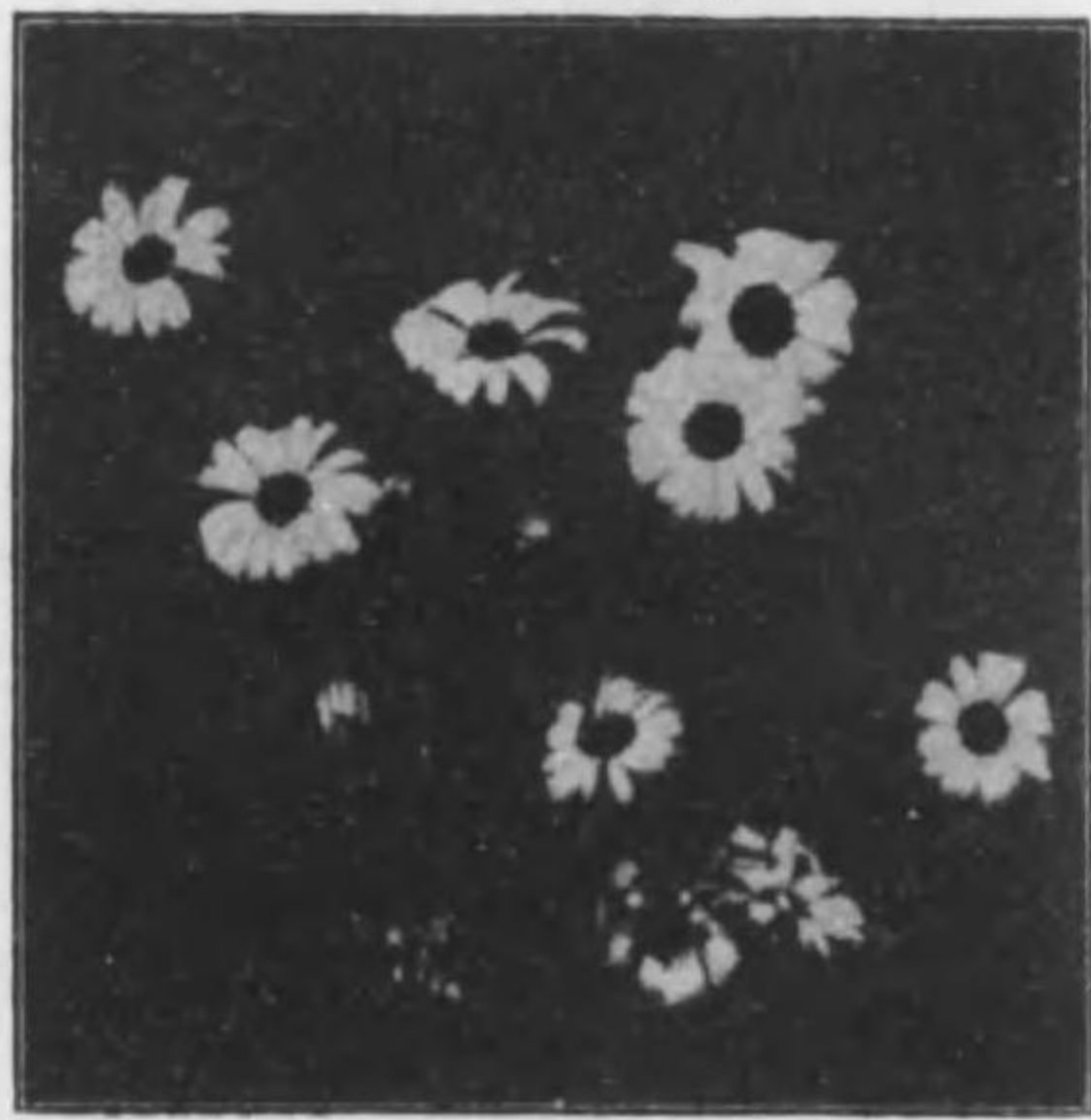
るモロッコ原産の一二年草にして二三尺の高さに伸長す。葉は羽狀に裂けて葉莖共に帶白綠色を呈す。花は枝頭に一箇づつ生じ筒狀花は暗紫色なるも舌狀花には白・黄・紅・紫等種々あり。花環菊の俗稱は舌狀花に環狀の班紋あるによる。開花期は春夏の候とす。

栽培法 ハナシユンギクは、春秋二季に播種するも、秋播となしてフレームに入れ又は霜除の下にて越冬せしめ、翌春花壇に定植すること多し。鉢植として觀賞することも亦行はる。

第二十一章 ブラキコメ

性状 ブラキコメ (Brachycome) と稱して普通に栽培せらるゝものは、學名を *Brachycome iberidifolia*, Benth. と稱し、菊科に屬する濠州原産の一二年草にして七八寸の高さに伸長す。コスモスに似て矮性なるを以て、姫コスモスと呼ぶこ

第三十圖



ブラキコメ

セントランサス

ゴデチア

ロベリア

ブラキコメ

ホウセンクラ

ハナシユンギク
(花環菊)



クマノササ

クマノササ

クマノササ (花)

クマノササ

クマノササ

クマノササ

とあり。英名を Swan River Daisy と云ふ。花色には白・紫・藍・淡紅等あり。春夏の候に開花する可憐の花草にして、花壇植及び鉢植として觀賞するに可なり。

栽培法 プラキコメを栽培するには、通例秋播となし、フレーム内にて越冬せしめ、翌春花壇に定植し又は鉢植となして開花せしむ。

第二十二章 ゴデチア

性状 ゴデチア (*Godetia*) と稱して普通に栽培せらるゝものは、學名を *Godetia amoena*, Lehm. と稱し、柳葉菜科に屬する北米原産の一二年草にして二尺内外に伸長す。葉は披針狀をなし、葉面に毛茸あり。花は四筒の花筒を有し、通例紫紅色にして底部白く、花形稍々月見草に似たり。

第三十一圖



ゴデチア

開花期は春夏の候にして、花壇及び鉢植として觀賞する外、切花となすに可なり。
栽培法 ゴデチアは通例秋播となし、フレームなどに入れて越冬せしめ、翌春に至りて花壇に定植するか又は鉢植となして開花せしむ。

第二十三章 サルピグロッシス

性状

サルピグロッシス (*Salpiglossis*) と稱して普通に栽培せらるゝものは、茄科に屬する南米智利産の一二年草(又は宿根草)にして、其の學名を *Salpiglossis sinuata*, Ruiz. et Pav. と稱し、一二尺の高さに伸長す。莖は殆ど直立して數多分枝す。莖の下部にある葉は葉柄を有し、長橢圓形乃至披針形にして波狀の粗鋸齒を有するも、上方の葉は披針



スシツログヒルサ

圖二十三第

形乃至線形にして葉縁に鋸齒及び缺刻なく、且つ葉柄を缺く。葉莖花梗等に短毛あり。花は枝頭に數箇生するが、其の形漏斗狀にして上部五裂し、各裂片の頂は更に淺く二分す。花面には顯著なる脈數多あり。蕾の開き始むるや側方に傾斜するも開き終れば上向す。花色には黃、白、紅、藍等種々あり。開花期は宿根のものは六七月頃なるも、春播のものは稍々後れて開花す。

栽培法

サルピグロッシスを栽培するには三四月頃に播種するを常とす。種子は細微なるがゆゑに被土の厚きに失せざるやう注意すべし。發芽稍々遅くして當初の成長も亦稍々遅緩なり。土質は肥沃にして濕氣に乏しからざるを可とす。切花となすに宜しきのみならず、花壇植及び鉢植となすに可なり。

第二十四章 アロンソア

性状・類別

アロンソア (*Alonsoa*) は玄參科アロンソア屬の一二年草又は宿根草にして、次の二種は就中多く栽培せらる。

(一) アロンソア、インシフォリア (*Alonsoa incifolia*, Ruiz. et Pav.) は南米ペルー原産

の一二年草又は宿根草にして一二尺の高さに伸長し、莖の下部は灌木状となる。葉は卵形又は披針形にして葉縁に鋸齒あり。花は朱紅色の不齊なる唇形花冠を有し、長き花梗の上に生ず。

(二) アロンソア、リネアリス (*Alonsoa linearis*, Ruiz. et Pav.) も亦南米ペルー原産の一二年草にして一二尺の高さに伸長す。莖は分枝性に富みて叢生し、草立稍々圓錐形をなす。葉は線状にして先端尖り、花は前者に似て朱紅色を呈す。

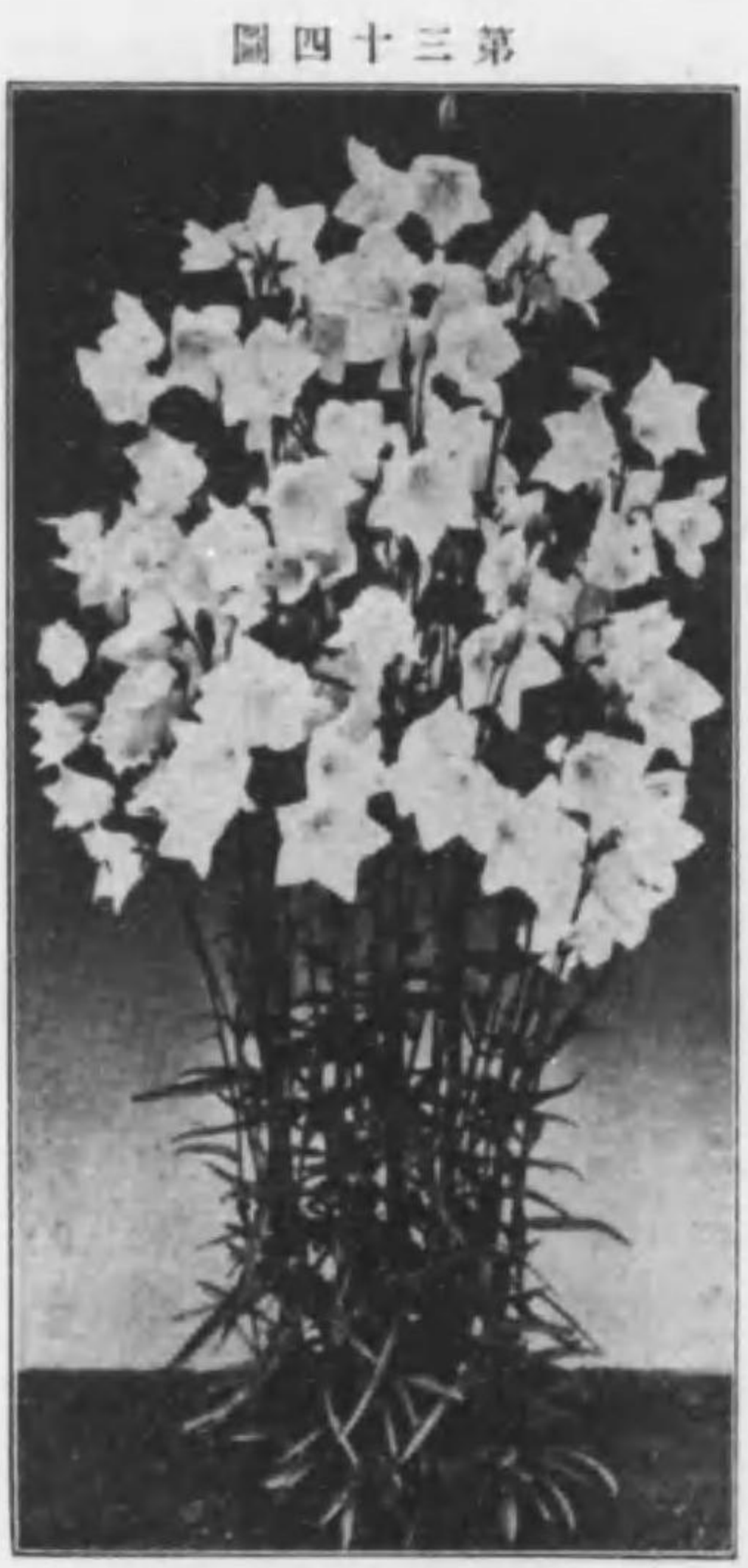
栽培法 アロンソアを栽培するには通例種子を秋播となし、フレーム内にて苗を越冬せしめ、翌春花壇に定植するか又は鉢仕立となすものにして、春夏の候に開花す。

第二十五章 カムバヌラ

性状 カムバヌラ (*Campanula*) は拉丁語にて小鐘の意義あり。蓋し花冠の鐘状をなすによる。英語にて Bell Flower (釣鐘花と云ふも亦同一の理による。此の花草は桔梗科カムバヌラ屬に屬する一二年草又は宿根草にして、根生葉は

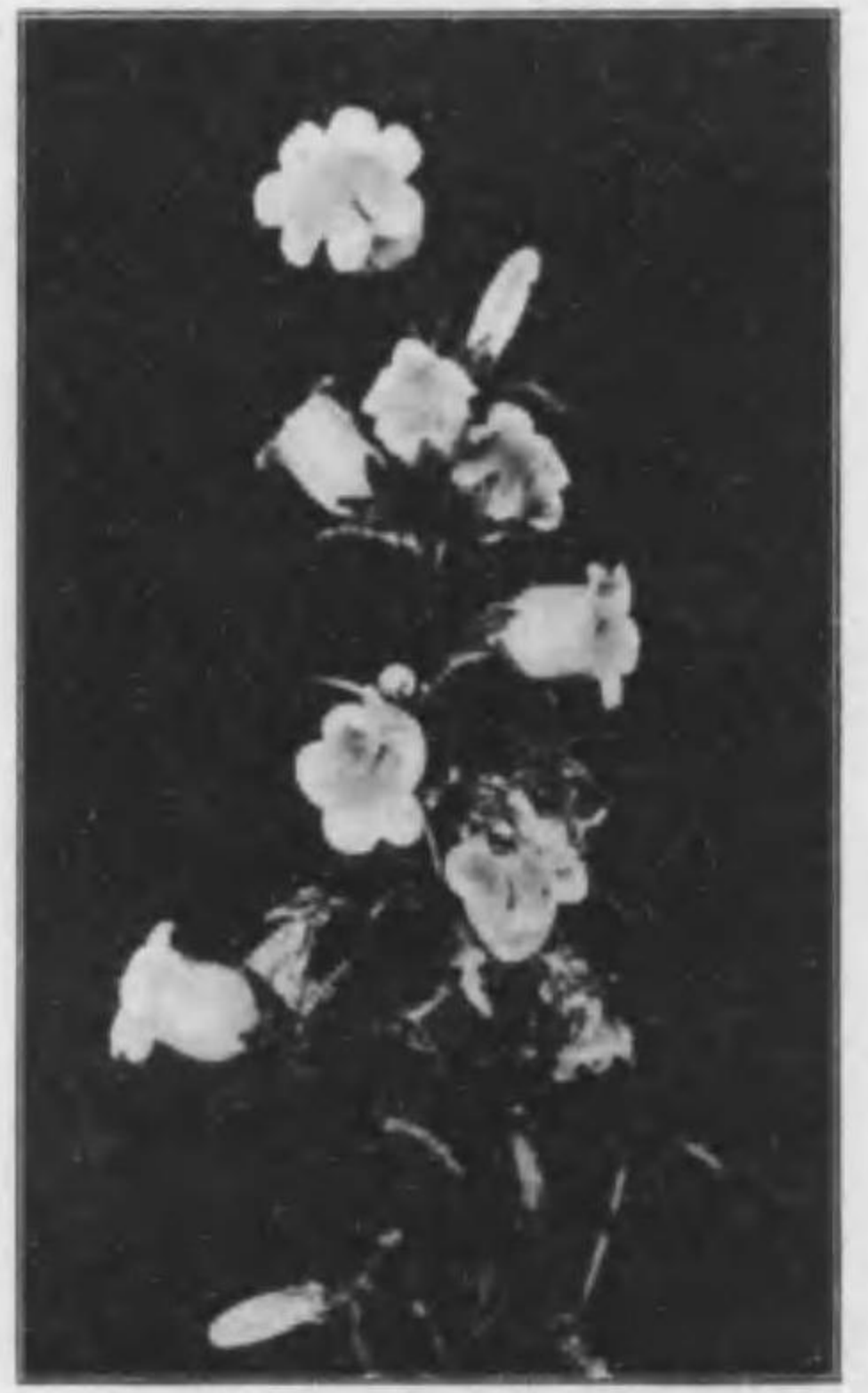
莖生葉よりも大なるを常とす。花色には碧、黄、白の外、時に黄色を帯びるものあり。萼及び花冠は五裂し雄蕊五箇あり。果實は蒴より成る。今本屬中の主要なるものを擧ぐれば次の如し。

(一) フウリンサウ (*Canterbury Bells*)



ウヤキギバモモ

は學名を *Campanula Medium*, L. と稱し、歐洲原産の一二年草にして、三四尺の高さに達す。莖は直立して分枝し、葉は卵状披針形又は披針形をなして葉柄を缺き、葉縁



ウサンリウフ

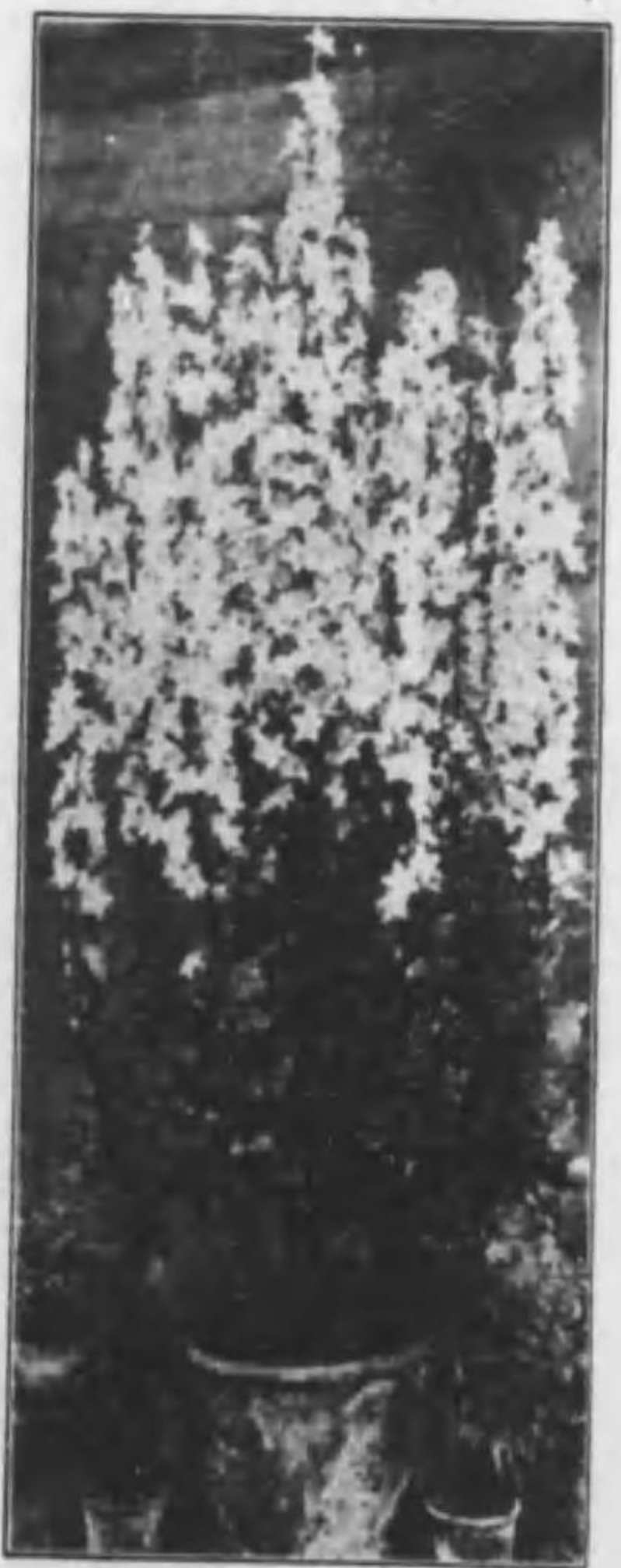
に鋸齒あり互生す。花はカムバヌラ中の大なるものにして枝頭に單生し、其の形鐘狀にして紫藍紅、白等の色彩を有す。萼片に附屬物あり。開花期は春夏の候にして、花壇植として觀賞する外、切花となすに用ひらる。

(二) モ、バギキヤウは學名を *Campanula persifolia*, L. と稱し、歐洲原産の宿根草にして二三尺の高さに伸長す。葉は互生にして、根生葉は廣披針形をなし、莖生葉は狹披針形にして縁邊に鋸齒あり。モ、バギキヤウの名は蓋し葉形の桃に似たるが爲とす。花は鐘狀にして淡紅色、白色等を呈し、春夏の候に開花す。花壇植となして觀賞する外、切花となすに用ひらる。

(三) カムバヌラ、ピラミ

ダリス (*Campanula pyramidalis*, L.) は歐洲原産の宿根草にして四五尺の高さに伸長す。根生葉は卵狀披針形にして葉柄

圖五十三第



ラヌバムカ
スリダミラヒ

を缺き、上部のものは卵狀廣披針形又は稍々心臟形をなして葉柄を有す。花は鐘狀をなすも裂片の切れ込稍々深く、圓錐狀をなして莖の上半部に密生し、藍色又は白色を呈す。

(四) オトメギキヤウは其の學名を *Campanula Portenschlagiana*, Roem. et Schult. と稱し、南歐原産の宿根草にして、草丈三四寸に過ぎず。桔梗に似たる藍色の花は葉叢の間に密生し、全梢花を以て被はるゝの觀あり。近年小鉢仕立となして觀賞すること多し。

圖六十三第



ウヤキギメトオ

栽培法

フウリンサウは春秋二季に播種しうるも、秋播となすこと多し。此の場合には苗を霜除の下にて越冬せしめ、翌春に至りて花壇に定植す。尚ほ此の花草は鉢植となして低溫の溫室に入れ、開花を促進せしむることあり。又モ、バギキヤウ及びオトメギキヤウは宿根草

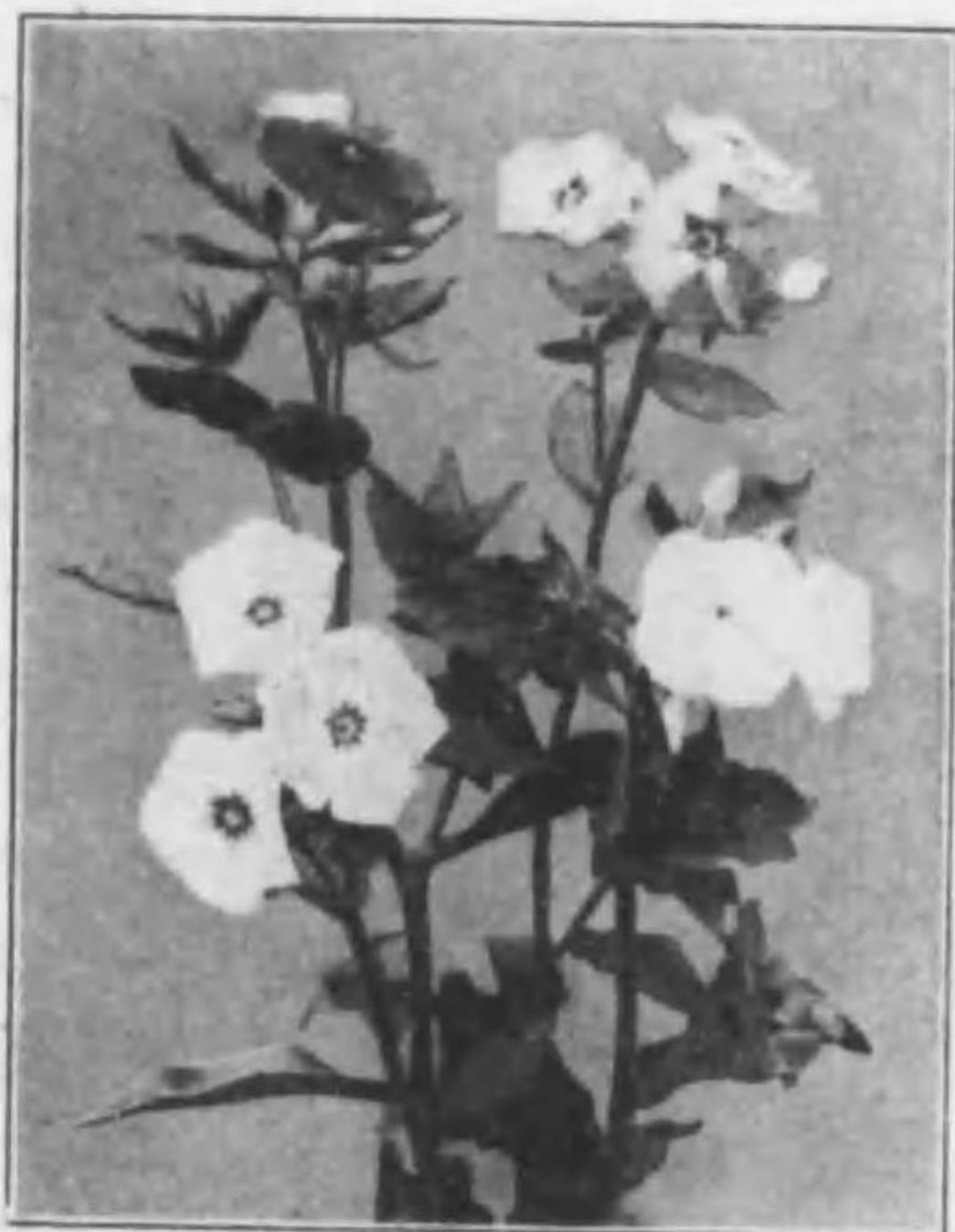
なるを以て、分株によりて繁殖するをうるも、往々播種して繁殖す。播種は鉢播又は床播とす。

第二十六章 フロックス

性状 フロックス (Phlox) と稱して普通に栽培せらるゝものはドラモンド、フロックス (Drummond's Phlox) なり。此の種は、其の學名を Phlox Drummondii, Hook.

と稱し、花苧科のフロックス屬の一年草にして、北米の原産なりとす。此の花草は一尺餘の高さに伸長し、莖の上部に於て分枝すること多し。葉は卵圓披針形にして互生し、葉莖共に毛あり。花は聚繖花序をなして枝頭に簇生し、其の形稍や櫻草に類し、紅、白、紫等種々の色彩を有す。此の變種にステ

圖七十三第



スクッコフ ドンモラド

ラタ (Var. Stellata) 即ち英名スター、フロックス (Star Phlox) と稱するものあり、花瓣の裂片尖銳にして、星形をなす。開花期は春夏の候又は夏秋の候にして、播種期によりて異なるも、秋播となして春夏の候に開花せしむること多し。

栽培法

ドラモンド、フロックスを春播とするには、三四月頃、苗床又は鉢に播種し、苗の二寸許に成長せる頃日當りよき花壇又は鉢に移植し、開花の頃まで一、二回稀薄の液肥を與ふべし。然るときは、夏より秋に亘りて開花す。又春夏の候に開花せしめんと欲せば、九十月頃、苗床又は鉢に播種し、一回假植を行ひ、冬は霜除を設けて越年せしめ、翌春花壇に定植すべし。施肥其の他の手入は春播に準ず。

圖八十三第



スクッコフ ータス

第二十七章 ツクバネアサガホ (ベチユニア)

性状 ツクバナエサガホは、其の學名を *Petunia violacea*, Lindl. と稱し、茄科に屬するアルゼンチン原産の一二年草なり。莖は其の高さ二尺内外なるも、時としては、大に繁茂し、蔓性となりて、數尺に伸長することあり。葉は、全邊にして長卵形をなし、葉莖共に軟毛を

圖九十三第



アニュチベ

有す。花は通例單瓣にして漏斗狀をなすも、現今栽培する改良種には花冠の縁邊に波狀の褶襞を有するものあり、又重瓣にして、恰も牽牛花の牡丹咲の如きものもあり。花形大

圖十四第



(咲重一)アニュチベ

圖一十四第



(咲重八)アニュチベ

にして頗る美觀あり。花色は紅、紫、白等にして、絞、覆輪などもあり。開花期は頗る長く、晩春より晩秋に至るまで續々開花し、鉢植としても又花壇植としても共に觀賞するに可なり。又重瓣種は、主として鉢植となして、觀賞せられ、温室にては冬にても開花す。

栽培法

ツクバナエサガホを繁殖するには、播種又は挿木の法を用ひ、重瓣種は、専ら後法に依りて繁殖す。(但し、ベレー (Bailey) 氏によれば、重瓣種に生ずる花粉を採りて、單瓣種に交配し、生ずる所の種子を播くときは、約二割五分の重瓣種を生ずるものにして、發芽當初、勢力の弱きものに、重瓣種多しと云ふ。) 播種は、春又は秋の彼岸頃、苗床又は鉢に播種すべく、種子細微なるを以て、播種前良く鎮壓して地面を均らすべく、播種後は極めて薄く土を篩ひかくべし。かくて、細目の如露にて灌水し、鉢播は、鉢底より吸水せしむ、發芽するまでは、直射光

線に當てざるやうにするときは、やがて發芽するを以て、二三葉發生する頃、他の苗床又は鉢に移植し、然る後、花壇に植付くるか、又は更に大なる鉢に移すべし。而して、秋播種せるものは、冬間霜除をなして保護するの要あり。又挿木によりて繁殖するには、九月頃、木框内に細砂を入れて挿し、適度に灌水したる後、框上に簾などを被ふて、日除となし置くときは、能く發根するを以て、之を一本づつ小鉢に移植し、冬間華氏四五度の溫室内に入れて越年せしむ。尙ほ、親木のみ、溫室内に入れて越年せしめ、翌春挿木繁殖をなすも可なり。莖伸長して倒伏の虞あるものには支柱を與ふ。

第二十八章 スウィート、ピー

性状

スウィート、ピー (Sweet Pea) は、其の學名を *Lathyrus odoratus*, L. と稱し、荳科に屬するシ、リー(及びセイロン島)原産の一二年草にして、歐米殊に英國にて盛に觀賞せられ、現英國皇帝即位の戴冠式に際しては公花として用ひられたり。本邦にても、近年之を栽培するもの頗る多く、品評會の開設を見るに至れり。此

スウィート、ピー

スター、フロックス

ドラモンド、フロックス

スチユニア

ノウゼンハレン(金蓮花)



クワ、マ

クワ、マ

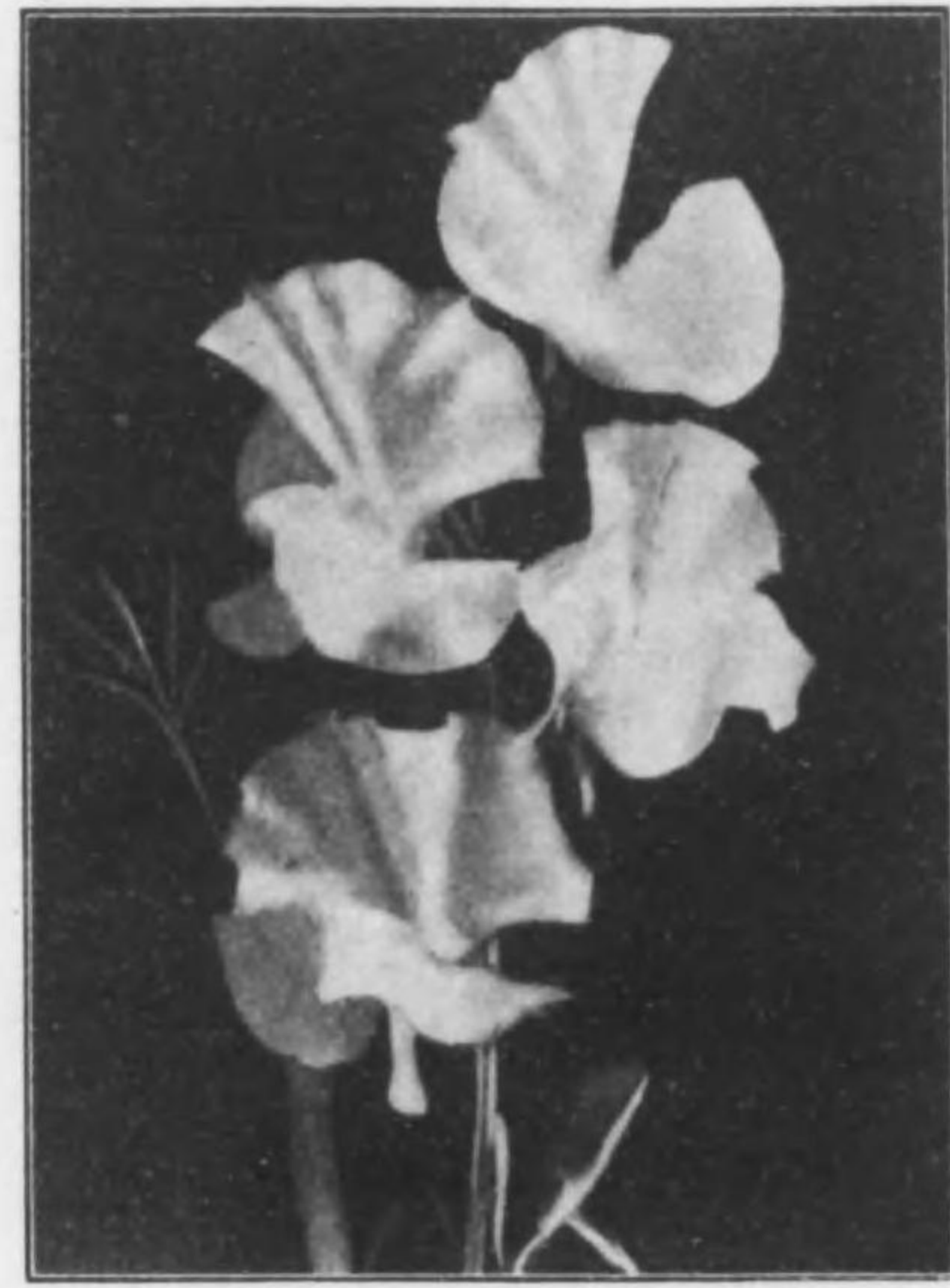
クワ、マ

クワ、マ

クワ、マ

の花草には、麝香豌豆又は花豌豆などの邦名あれども、スウィートピーの英名を用ふるもの多し。

スウィートピーは、卷鬚によりて攀登する莖を有し、葉は、羽状複葉なれども基部に一二對の卵圓形小葉ある



圖二十四第

—ピト—イウス

るも、温室に栽培するものは冬に開花し、切花として多く需要せらる。

來歴・類別

スウィートピーは、元來シ、リ島原産の紫花種、白花種並にセイ

ロン島原産の紅花種・白花種(セイロン種を Painted Lady と稱す)のみなりしが西暦千六百九十九年に Francisus Cupani と稱する伊太利の僧が、シ、リー島のバノルムスに於て始めて野生の紫色花を開くスウィート・ピーを栽培し、英國其の他の地方に其の種子を發送せり。爾後九十四年を経て、倫敦の種苗商より發行せる種苗目録中には、黒花種・紫花種・紅花種・白花種並に前記ペンテッド、レデーの五種のスウィート・ピーを擧ぐるに至れり。爾後千八百六十八年にはクラウン、プリンセス、オブ、ブルシア (Crown Princess of Prussia) と稱する淡肉色種、獨逸にて作成せられ、次てアドニス (Adonis)、プリンセス、バートルス (Princess Beatrice) などの薔薇色の品種も生ぜり。されど、スウィート・ピーの品種改良上著大の効果を奏したるは、英國シエロップシャー州のヘンリー、エックフォード (Henry Eckford) なり。同氏は、從來他の花草に於て得たる經驗を以て、千八百七十六年、始めてスウィート・ピーの改良に着手せしが、先づ普通の六七種を採りて、雜種法、淘汰法を行ひ、多年の間、非常なる努力を以て、花の大きさ、形狀、色彩等の改良に熱中し、遂に二十二年間に、七十五種を作成するを得たり。其の他、英國のラクストン (Laxton) 獨逸のシユ

ミッド (J. C. Schmidt) 等も、亦新種の育成に努め、以て作成せる品種の數頗る多し。又米國にてはカリフォルニア州は、スウィート・ピーの栽培甚だ盛にして、千八百九十三年に、キューピッド (Cupid) と稱する白色矮性のスウィート・ピーを作成し、次て、種々の色彩あるキューピッドをも生ずるに至れり。キューピッドは、其の丈甚だ低くして、普通種に於けるが如く支柱を與ふるの要なく、花形小ならずと雖ども、花軸短きものとす。斯くて、千九百一年に至り、スペンサー伯の花園に於て、旗瓣の波狀をなせる品種、突然現出し、カウンテス、スペンサー (Countess Spencer) と名づけられしが、爾後此の種の波狀旗瓣を有するもの多く續出し、其の色彩亦頗る多様なるに至れり。

之を要するに、スウィート・ピー改良の結果は、種々の品種を生ずるに至りしが、現今良種と稱せらるゝものは、花輪大にして、色彩艶麗なるのみならず、花軸長くして、之に着生する花の數多きものならざるべからず。

類別

スウィート・ピーには、品種甚だ多きも、草丈の長短によりて大別すると、きは次の二類となる。

(一) 蔓性種 (Tall or Climbing Sweet Pea) は普通に栽培せらるゝスイート・ピーにして、其の栽培には支條を立つるの要あり。

(二) 矮性種 (Dwarf or Cupid Sweet Pea) は草丈低くして支條を立つるの要なきも、前者の如く廣く栽培せられず。

蔓性種には又、露地栽培種 (Garden variety) と温室栽培種 (Winter-flowering variety) とあり。前者は數寸の高さに達するや、一時伸長を中止して側枝を發生するも、後者は三四尺に伸長し、開花し始めたる後、分枝するの性あり。又前者は九月頃に播けば翌春四五月頃に開花するも、後者は八月頃に播けば、十二月末頃より開花するものなり。尙ほ右兩者には、何れも旗瓣 (Standard) の形に、平瓣 (Open form)・抱へ瓣 (Hooded form)・波狀瓣 (Waved form) の三

圖三十四第



抱へ瓣 (左) 平瓣 (右)

種あるも、矮性種には平瓣と抱へ瓣との二種あるのみ。平瓣とは、旗瓣の形狀扁平なるものを云ひ、抱へ瓣とは、旗瓣の兩縁が反曲するもの、波狀瓣とは、旗瓣が波狀の皺縮をなすものを云ふ。波狀瓣をなすものには、スペンサー型 (Spencer form) と稱するものあり (第四十二圖)。スイート・ピー中の優秀なるものとす。

栽培法 スイート・ピーの栽培には、露地に於てするものと、温室内にて行ふものとあり。

露地栽培をなすには日當りよく、風通しも亦宜しき場所を選ぶべく、日蔭の地にては、伸び過ぎて、花を着くこと、亦少きものとす。土質は埴質壤土など稍々重き土壤を可とするも、排水不良ならざること肝要なり。而してスイート・ピーの根は、深く土中に入るの性あるがゆゑに、整地は深きを可とす。されば、豫め深耕して、堆肥骨粉、灰等を施し置くべく、又酸性の土壤にては、石灰を施して中和し置くべし。

スイート・ピーは、鉢植となして觀賞することあるも、花壇又は芝生などに種々の形の支條を設けて、之に巻き付かしむるに可なるものなり。此の花草を繁

殖するには播種法を用ふべく、種子は目的の場所又は鉢に直播となし、移植せざるを可とす。(苗の小なる間は根を傷つけざるやう注意して移植することあり、又花期に臨みて始めて花壇などへ植ゑ出さんとするには豫め鉢植となして培養し置くべし)播種期は秋又は春なるも成るべく秋播となすを可とし、寒氣のため、秋、目的の場所へ播種し能はざる場合には、鉢に播きて、冬の間防寒の手當をなし春に至りて移植するを可とす。是れ秋九月頃に播種せるものは翌春四五月頃より六七月頃まで開花するも、春三四月頃に播種せるものは六七月頃より開花し、八月に至れば暑氣の爲に枯死するがゆゑに、開花期間は秋播に比して短く、草勢も亦秋播に劣るを以てなり。鉢植に用ふる培養土は腐葉土・砂などを混じたる畑土にして、排水よく而かも膨軟に失せざるものを可とし、之に過磷酸石灰・油粕・灰などを少しく混ぜべし。發芽後の手入としては油粕の液肥などを適宜一二回施すべく、蔓性種には支條を與ふべし。尙ほスウィート・ピーをして、美大の花を續々開かしめんとするには、鉢植よりも寧ろ花壇・芝生等に栽培するを可とし、肥料を十分に與へ、且つ花は之に結實せしむることなく、觀賞後直に剪り去

ること肝要なり。又種子を採收するには、肥料を過用せざるやうにすべく、且つ地植よりも鉢植を可とするものゝ如し。

温室栽培をなすには、温室栽培種を用ふべく切花を主として栽培すること多し。播種は八月中旬頃より九月下旬頃まで順次に

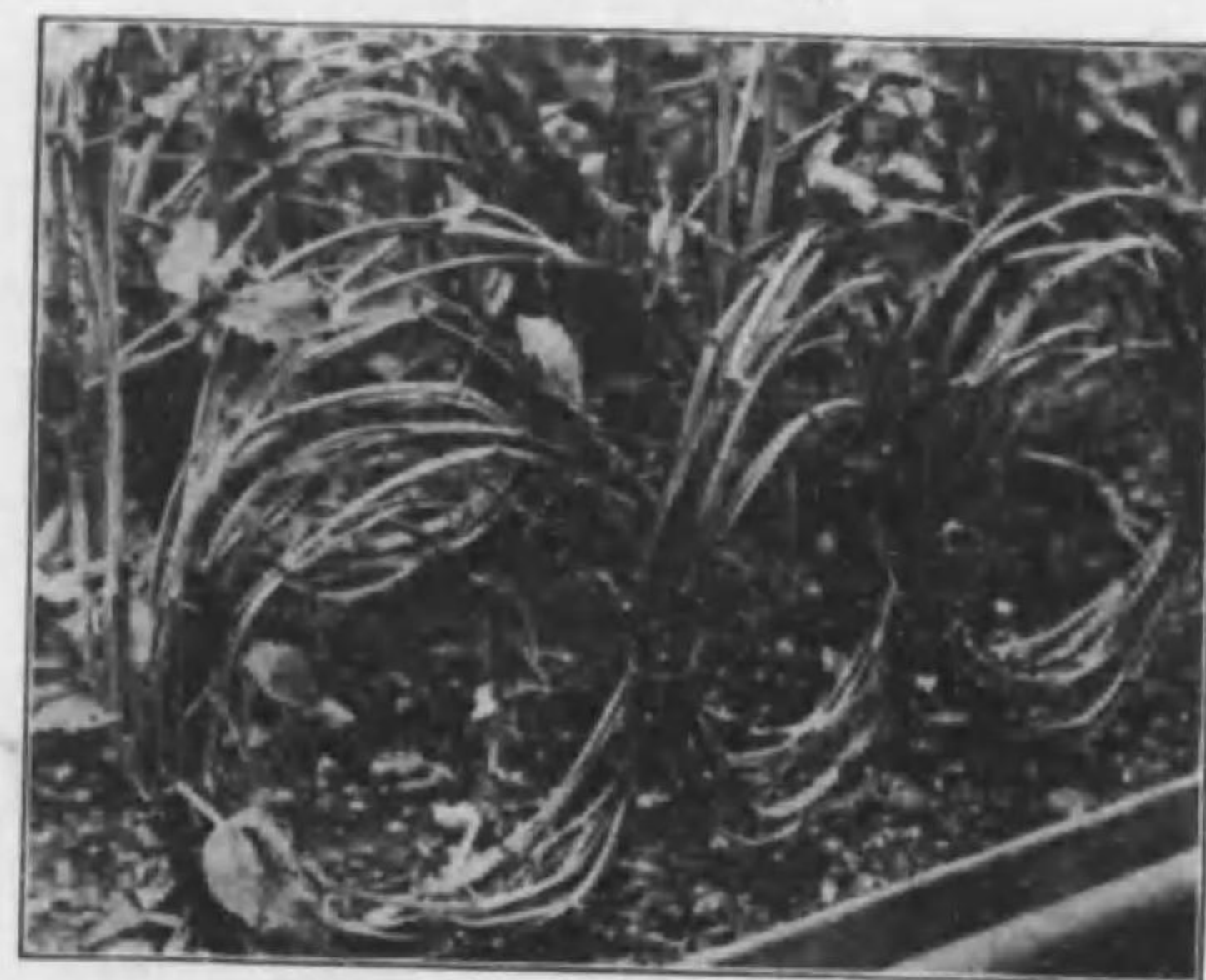
行ひ、以て切花期間を長くするを可とす。(十二月頃より咲き始め二三月頃が盛にして、四月頃まで切取るをうべし)温室は低くして日照の少きを忌み、屋根及び側面の換氣十分なるを要す。温室内には棚を設くることなく、室内の地面を二三尺に掘りて適當の土(埴質壤土など)を入れ堆肥・骨粉・灰等を施して點播す。株間は一尺内外にして一寸許の厚さに土を被ふ。尙ほ直播の代りに小鉢に三粒許づゝ播き苗の三四寸に伸長せる頃、右の土壤に定植するの法を用ふることあり

圖四十四第



-ヒトイウスの培栽室温

り。温室内の温度高きに過ぐれば、根の發育充分ならざる間に開花して、後の成育を阻害するの弊あり。されば當初は、夜間の温度を四十度乃至四十五度となし、やがて三四尺に伸長して、花蕾の生ずる頃となれば、徐々に温度を高めて五十度許となすべし。かくて開花し始むるに至れば、晝間は曇天に六十度晴天に六十八度内外を保たしむるを標準とす。但しスペンサー型のスイートピーは、開花期に入るや、夜間は五十五度となし、晝間は曇天に六十度乃至六十五度、晴天に七十度乃至七十二度を標準となすものとす。尙ほスイートピーの支條としては、麻糸などを張り之に莖を結付けるを常とするが、此の際基部の二小葉を残して葉の先端を切るを可とす。此く葉端を切るは日照通氣をよくするが爲にして、莖の伸び過ぎたるものは其の基部を輪狀



狀るたみ込管に狀輪を部基の莖

圖五十四第

に巻いて丈を低くするものとす。(第四十五圖)

第二十九章 金蓮花

性状

金蓮花(英名 Nasturtium or Indian Cress)は、學名を Tropaeolum majus, L. と稱し、

金蓮花科に屬する南米ペルー産の蔓性草本なり。葉は稍や圓く、缺刻淺くして、葉の下面中央より長き葉柄を出し、花は黄、橙、赤、紋等種々の色彩を有し、一箇の長



花蓮金

圖六十四第

き距を具ふ。此の花莖は、其の葉の形稍や楕に類し、花の形亦兜に似たる所あるより、希臘語の戰勝記念標に因みて、此の學名を得たるものなりと云ふ。又ナスターチウム或はインヂアングレックスの稱あるは、此の植物の葉に、ミヅタガラシ(ズナ)

turtium officinale) の如き辛味ありて、食用に供し得るによると云ふ。此の花草は、品種稍々多くして、蔓性種の外に矮性種あり、蔓性種は垣根などに纏絡せしむることあるも、花壇の地面を匍はしむるに可なり。而して、矮性種は鉢植又は花壇植となすに適す。

栽培法 金蓮花は、秋季苗床に下種し、冬間苗をフレームなどに入れ置くときは、早春より開花せしむることを得べく、又春季種子を蒔くときは、夏秋の候に花を開かしむることを得べし。種子は大粒なるを以て稍々厚く土を被はざれば乾燥するの虞あり。要するに、此の花草は耐寒性弱きも栽培し易く、而かも開花期間長くして、葉姿亦愛すべきがゆゑに、花壇植として頗る好適するものなり。

第三十章 クワクカウアザミ

性状 クワクカウアザミ(英名 Mexican Ageratum)は、其の學名を *Ageratum houstonianum*, Mill. と稱し、菊科に屬する熱帶亞米利加原産の花草にして、高さ二尺内外に達し、葉は卵圓形又は卵圓三角形にして、葉縁に粗鋸齒を有し、葉莖は共に毛を有

圖七十四第



ミザアウカクワク

共に毛を有す。花は筒狀花のみより成る頭狀花にして、枝頭に叢生し、上部より開花し始めて下方に及ぶ。此の花草は、初夏の頃より秋の末に亘りて續々開花し、花色には藍紫、白等あり。切花として用ひらるゝこと多く、又花壇などに植えて觀賞す。

栽培法 クワクカウアザミを栽培するには、春彼岸頃、鉢又は苗床に下種し、苗の二三寸に伸長するを待つて、花壇其の他に移植すべく、液肥を適宜施すときは、よく發育して開花盛なり。尙ほ夏の末又は秋に於て種子を播き、冬季温室に入れて開花せしむることあり。種子小なるがゆゑに、被土の厚きに失せざるを要す。又此の花草は砂などに挿して發根せしめ、苗となすことあり。

第三十一章 テンニンギク

性状

テンニンギクは、其の學名を *Gaillardia pulchella*, Foug. と稱し、菊科に屬する一二年草にして、米國温帶地方の原産なり。此の花草は、其の丈二尺内外にして、莖に短き毛を有す。葉は長橢圓形乃至披針形にして互生し、葉縁に往々缺刻を有す。花は頭狀花序をなし、周圍の花は舌狀花冠又は先端五裂せる大形の筒狀花冠にして、其の色には全部黄色のものもあれども、先端黄色にして其の他は暗紅色をなすもの多く、又全部暗紅色を呈するものあり。開花期間長くして、晩春より晩秋に及ぶ。花壇植として觀賞せらるゝ外、切花となすに可なり。



圖八十四第

クギンニンテ

するものあり。開花期間長くして、晩春より晩秋に及ぶ。花壇植として觀賞せらるゝ外、切花となすに可なり。

栽培法

天人菊を栽培するには、秋又は春種子を苗床に播き下し、苗の稍や長ずるを待つて花壇に移植するものにして、秋蒔のものは冬間霜除をなすを可とす。肥料としては、油粕などの液肥を稀釋して、適宜用ふるときは、良く繁茂して續々美大の花を開くものとす。栽培容易にして開花期間長く、花亦美なるを以て、貴重せらる。

尚ほテンニンギクには宿根性のものあり、其の學名を *Gaillardia aristata*, Parsh. と稱し、花葉共に前者に類するも、春季分株によりて繁殖するを常とし、夏秋の候に挿木を行ふこともありとす。開花期間の長さことも亦前者に似たり。

第三十二章 トレニア

性状

トレニア (*Torenia*) 中、最も普通に栽培せらるゝものは、其の學名を *Torenia Fournieri*, Linden と稱し、玄參科に屬する交趾支那原産の一年草なり。此の花草は、其の丈僅かに七八寸にして、下部より多く分枝す。葉は對生し、卵圓形又は心臟形にして、葉縁に鋸齒あり。花は總狀花序に排列し、花形略ぼ管狀をなして帶

青紫色なるも、下唇の中央に黄色の斑點あり。又白色の花を開くものもあり。萼に五箇の著しき翼狀突起あり。草姿花容共に優婉にして、花壇の縁植などとなして栽培するに宜しく又鉢植となすに可なり。初夏より晩秋に亘りて開花するも晩秋の觀賞には頗る好適す。

栽培法

トレニア、フオールニリーを栽培するには、春三四月頃種子を苗床に蒔き苗の二寸許に成長したる頃、花壇に移植す。此の際注意すべきは、此の植物

圖九十四第



ア ニ レ ト

の種子は極めて細微なるものなれば、之を播下すべき苗床は、町寧に耕やし、且つ表面を鎮壓して、良く平坦となしたる後に播種し種子の上には土を被ふことなく、乾燥を防ぐためには切藁などを掩ふなり。是れ被土の厚きときは往々にして發

芽を誤るものなればなり。尙ほ、種子は鉢播となして、土を被ふことなく鉢底より吸水せしめ、鉢の表面に新聞紙などを被ふて、雨のかゝらぬ處に置くときは、發芽良好にして、床蒔よりも安全なりとす。苗移植の際には、植穴の底に、腐熟せる堆肥に油粕、灰などを混和したるもの少許を施し、薄く土を被ふて、苗を植付け、爾後草勢に顧みて、適宜液肥を施すときは、久しきに亘り、續々として開花す。特に秋の深くなるにつれて、莖葉稍や紫赤色を帯び、更に一層の美觀ありとす。

トレニア、フオールニリーの外、トレニアには、尙ほ次の如き種類あり。
(イ) トレニア、アジアチカ (*Torenia asiatica*, L.) は其の葉、心臟形又は卵圓披針形にして、青色花を開く。トレニア、フオールニリーの如く、萼に著しき翼狀突起なし。支那の原産とす。

(ロ) トレニア、フラバ (*Torenia flava*, Ham.) は其の葉、卵圓形又は橢圓狀卵形をなし、花は黄色にして、中心紫褐色を呈す。東印度の原産とす。
此の二種の栽培法は、トレニア、フオールニリーに準ず。

第三十三章 百日草

性状

百日草は、其の學名を *Zinnia elegans*, L. と稱し、菊科に屬するメキシコ原産の一年草なり。草丈は二三尺に達し、莖に毛あるがため稍や粗剛の感あり。葉は卵狀心臟形にして對生し、夏の初より秋の末に至るまで紅・黄・白・紫等種々の色彩ある花を開き、其の花には單瓣と重瓣とあり（同一株に單瓣花と重瓣花とを生ずることあり）。又花輪に大小あり。尙ほ、此の花草は花壇植となして觀賞するに可なるのみならず、切花となすに適するものとす。

栽培法

百日草を栽培するには、早春種子を苗床に播き、苗の稍や長ずるを待

第五十圖



百日草

クジャクサウ

キンケイギク

テンニンギク

センジュギク(萬壽菊)

ハルシヤギク

ヒヤクニチサウ



花のつぼみ

花のつぼみ(花蕾)

花のつぼみ

花のつぼみ

花のつぼみ

花のつぼみ

つて、花壇又は鉢に移植すべし。但し其の播種期早きときは、花の咲き始むることも早く、播種期後るゝときは、開花期も亦後るゝものとす。而して特に早く開花せしめんとするには、フリューム内に播種す。肥料としては、油粕などを液肥となして、數回施すべく、尙ほ植付の際、植穴の底に腐熟したる堆肥に油粕灰などを混じたるものを施すときは、發育旺盛にして、續々美大の花を開くものとす。元來、此の花草は葉腋より發生する枝の頂に一箇の頭狀花を着くるの性あるが故に、花の開き終れるものは、其の枝をば、基部に近く切り去り、切口の葉腋より新枝を發生せしめて、之れに開花せしむるときは、草丈の高きに失するを 방지、且つ美大なる花を續々開かしむるを得るものとす。尙ほ、大輪種は腋芽を適宜摘除して、少數の枝に一輪づつ開かしむるを可とし、小輪種は摘心して腋芽を多く發生せしめて、數多開花せしむるを可とす。

第三十四章 マリゴールド

類別

マリゴールド (Marigold) は、菊科タゲテス (Tagetes) 屬の花草にして、メキシ

コに自生し、其の種類多きも、就中主要なるものは、次の二種とす。

(一) 萬壽菊(英名 African Marigold) 此の種は一名、センジュギクにして、其の學名を *Tagetes erecta*, L. と稱し、草丈三尺許に達す。葉は羽狀複葉にして、鋸齒ある披針



圖一十五第

ケギユジンマ

状の小葉より成る。花は黄色又は橙色にして、單瓣・重瓣の二種あり。枝は葉腋に發生し、其の頂に一箇の頭狀花を着く。此の花草は栽培容易にして、花期頗る長く、初夏より晩秋に及び、花形亦大にして美なるも、枝葉に惡臭ありと稱して、花壇などに栽培せらるゝものは、即ち此の種なりとす。

(二) 紅黃草(French Marigold) 此の種は、一名クジヤクサウにして、其の學名を *Tagetes*

patula, L. と稱し、草姿花容頗るよく、前種に類すれども、草丈稍や低く、莖の基部より多く分枝す。花も亦小形にして、前種と色彩を異にす。即ち此の種の花は、通例、外面黄色にして、内面暗紅色を呈し、中には内面にも、黄色の部分多きを占むるもの等あり(葉縁の鋸齒亦前種よりも著し)。花に單瓣・重瓣の二種あること前種に等し。此の花草は、晩春より秋に亘りて開花し、其の花期甚長きのみならず、栽培亦容易なるものにして、花壇に栽培せらるゝこと前種よりも多く、丈低きを以て鉢植として觀賞せらるゝことも少からず。此の種の變種に、ナナ(var. *nana*)と稱するものあり。矮性にして、草丈は一尺以下とす。

圖二十五第



草 黃 紅

栽培法 マリゴールドを栽培するには、早春苗床を設けて、之に種子を播下し、苗の稍や長するを待つて、花壇又は鉢に移植すべく、植付の際には、基肥として、良

く腐熟せる堆肥に油粕灰等を混和したるものを用ふるを可とす。尙ほ植付後、草勢に注意して適宜油粕などの液肥を一二回用ふるも、適用するときは枝葉の徒長を來たす虞あれば注意すべし。萬壽菊の重瓣種に美大の花を開かしめんとするには、比較的多量の肥料を用ふべく、且つ花蕾の多く發生するを見れば、成べく早く其の多數を摘除して、残る少數の花蕾に多くの養分を集中せしむべく、且つ開き終れる花は、速に摘除して、結實せしめざるを要す。尙ほマリゴールドは、切花として販賣せんがため、畑に栽培することあり。

第三十五章 スカビオザ

性状 スカビオザ (*Scabiosa*) は、山蘿蔔科スカビオザ屬の一二年草又は宿根草にして、莖の基部は往々木質状をなし、葉縁に鋸齒又は缺刻を有し、往々羽狀に細裂せるもあり。此の屬には多數の種ありて、歐亞並に阿弗利加に自生す。就中、普通に栽培せらるるものは、歐洲産のスカビオザ、アトロプルブレア (*S. atropurpurea*, Desf.)、ローカサス産のスカビオザ、コーカシカ (*S. caucasica*, M. B.)、本邦産のマツ

ムシサウ (*S. japonica*, Miq.) 等なり。

花色は白・紅・淡紅・紫黒等にして、花壇植となすに宜しく、又切花として多く需要せらる。開花期は播種期によりて一ならず。

栽培法

スカビオザは、其栽培甚容易にして、之を繁殖するには、通例、播種法を用ふ。播種期は秋又は春にして、床蒔鉢蒔何れにても可なり。又園地に直播となし、發芽後適宜間引を行ふも不可なし。秋蒔となせるものは、翌年五月頃より開花す。肥料は、適宜液肥を用ひて可なるも、特に注意して多く施肥するの要なし。落花後は、直に花梗のまゝ剪除するの法を用ふるときは、葉腋より續々新梢を發生して、之に開花す。又宿根性のものは、往々分株によりて繁殖す。

圖三十五第



ザオビカス

第三十六章 ネメジア

性状

ネメジア (Nemesia) は、玄參科ネメジア属の一二年草又は宿根草にして、多数の種を包含し、すべて南阿弗利加の原産なり。此の属の植物は其の葉對生にして、花は總狀花序をなし、莖又は枝の頂に生ずるも、稀に單生するものあり。



圖四十五第

アジメネ

本属中、最も普通に栽培せらるゝは、ネメジア、ストルモザ (N. strumosa, Benth.) にして七八寸乃至一尺餘の高さに伸長し基部より分枝して叢生す。莖生葉は披針狀又は線狀をなして莖を包擁し、根生葉は長橢圓狀筵形をなす。花の上唇は四箇の同大片に分裂し下唇は上唇よりも大にして、花心を距ること最も遠き部分に於て、淺裂す。花

の咽喉部に鬚あり。花色は黄、白、紅、樺紫等、其の種類甚だ多し。

栽培法

ネメジアを栽培するには、春秋二季に播種す。即ち三月頃種子を床蒔又は鉢蒔となし、五月頃花壇に植出すときは、六七月頃より八九月頃まで開花するも、秋播となし、冬間フレーム内にて保護するときは、春夏の候に開花するのみならず、温室にては冬より開花す。鉢植並に花壇植となすに可なり。此の花草は色彩豊富なるを以て種々色彩を異にするものを配合して植付くるときは、大に花壇の美觀を發揮するものなり。

第三十七章 マトリカリア

性状

マトリカリア (Matricaria) と稱して普通に栽培せらるゝものは、Matricaria eximia plena と稱し、菊科に屬する一二年草にして、葉姿、花容頗るよく小菊に類し、一二尺の高さに伸長す。花は小なるも

圖五十五第



アリカリトマ

梢頭に數多着生し、五六月頃より開花す。品種には黄色八重のゴールデン、ボール (Golden Ball)、白色八重のシルバー、ボール Silver Ball などあり。

栽培法 マトリカリアを栽培するには、春秋の二季に播種しうるも、秋播となし冷床にて越冬せしめ、春に至りて花壇に植ゑ出すを可とす。性强健にして栽培容易なりとす。

第三十八章 リナリア

性状 リナリア (Linaria) と稱して普通に栽培せらるゝものは、其の學名を *Linaria maroccana*, Hook. f. と稱し、玄參科に屬する亞弗利加原産の一年草なり。草丈は一二尺にして、葉は殆ど線状をなして尖り、互生又は輪生す。花は假面狀の唇形花冠

圖六十五第



ア リ ナ リ

にして長き尖れる距を有し、穂狀の總狀花序に排列す。花は青紫色(中心白色を帶ぶ)を普通とするも、紅、黄、白等もありとす。花形キンギョサウに似たる所あり。且つ矮性なるを以て姫金魚草と稱し、又ヤナギウンランの名あり。

栽培法 リナリアを栽培するには、春秋二季に播種す。秋播となせるものは五六月頃に開花し、春播は夏に開花す。種子は床蒔又は鉢蒔となし、苗の二三寸に成長せる頃花壇又は鉢に移植す。秋播のものは冬間霜除をなし、春に至りて花壇に定植するを可とす。

第三十九章 ハリフウテウサウ

(クレオメサウ)

性状 ハリフウテウサウ (クレオメサウ) は又ノボリバナとも云ひ、學名を *Cleome pinnatis, Willd.* と稱し、白花菜科に屬する南米原産の一年草にして、三四尺の高さに伸

圖七十五第



ウサウテウフリハ

長す。葉は三箇五箇又は七箇の小葉より成る掌狀複葉にして互生し、葉柄長く、托葉は刺狀をなす。花は總狀花序をなして莖頭に生じ、花瓣は四箇ありて淡紅色を呈す。此の花の子房は長き柄を有し、六本の長き雄蕊と共に長く抽出するがため奇觀を呈す。開花期は七月頃とす。

栽培法

ハリフウテウサウは春播種して繁殖するも一度栽培するときは、種子落下して自然に發芽すること少からず。栽培甚だ容易なり。

第四十章 キンケイギク及びハルシヤギク

第一節 キンケイギク

性状

キンケイギクは、其の學名を *Coreopsis Drummondii*, Torr et Gr. と稱し、菊科に屬する一二年草にして、北米の原産なり。此の花草は、その莖一二尺の高さに伸長し、葉は羽狀複葉にして、三箇乃至七箇の卵形小葉より成る。初夏より秋に亘りて、長柄を有する頭狀花序を生ず。其の中央なる筒狀花冠は紫褐色を呈し、周圍の舌狀花冠は黄色を呈す。

栽培法

キンケイギクを栽培するには、春三四月頃又は秋九十月頃に於て、苗床に下種し、苗の凡そ二三寸に達したる頃に、花壇に移植すべし。但し秋播となせるものは他の苗床に移植して冬間霜除をなす可とす。肥料としては植付の際、堆肥、灰等を用ふるのみにて足れりと雖ども、草勢不良なる場合には、更に油粕、魚肥などの液肥を一二回補肥として用ふる可とす。

第五十八圖



キンケイギク

第二節 ハルシヤギク

性状

ハルシヤギクは、其の學名を *Coreopsis tinctoria*, Nutt. と稱し、前種と等しく菊科に屬する一二年草にして、北米の原産なり。花は蛇の目傘の如き觀あるを

以てジャノメギクとも稱せらる。蓋し周囲の舌状花冠は通例上部黄色にして下部紅褐色を呈するによる。但し舌状花冠は時に全部紅褐色をなすことあり。又中央の筒状花冠は紅褐色を呈す。葉はキンケイギクよりも遙かに細く分裂し、絲狀を呈して對生し、草丈も亦キンケイギクよりも高くして、三尺位に達す。

圖九十五第



クギヤシルハ

栽培法 ハルシヤギクは一度栽培すれば、種子は落下して自然に發芽するを見る。斯くの如く、強健なる花草なれば、栽培は極めて容易にして、播種は春三四月頃或は秋九十月頃に行ふ。苗の稍々成長するに及んで、花壇に移植することキンケイギクに等しく、施肥其他の手入も亦之に準じて可なり。開花期は晩春より秋に及ぶ。

第四十一章 ムギワラギク其の他の堪久花

第一節 ムギワラギク

性状

ムギワラギクは、其の學名を *Helichrysum bracteatum*, Willd. と稱し、菊科に屬



クギラワギム

する濠洲原産の一二年草にして、二三尺に伸長す。葉は橢圓狀披針形をなして基部狹窄す。頭狀花は枝頭に生じ、舌狀花冠を缺き、總苞は乾きたる鱗片より成り、稍々貝殼の如き觸感あるを以て、俗に貝細工と稱することあり。總苞の色には黄、樺、紅、白等あり。開花期は初夏より秋に亘り、日光のよく照すときのみ十分に開花す。此の花草は切花として多く需要せらるゝのみならず、花壇植として觀賞するに可なり。尙

圖十六第

ほ此の花は堪久花 (Everlasting Flower) に屬し、蔭乾して貯へ置くに適するものとす。
栽培法 ムギワラギクを栽培するには、春又は秋の彼岸頃苗床に下種し、苗の二三寸に成長せる頃花壇などに定植す。秋播のものは冬間防寒に注意すべく、肥料としては適宜油粕の液肥などを施すを可とす。

第二節 カヒザイク

性状 カヒザイク (貝細工) は其の學名を *Ammobium alatum*, R. Br. と稱し、菊科に屬する濠洲原産の一二年草にして綿毛を有し、二三尺の高さに伸長す。莖は枝を分ち白色の綿毛を被ひ、枝には廣き翼狀物あり。莖生葉は線狀又は線狀披針形をなす。頭狀花は枝頭に生じ、黄色の筒狀花冠より成り、其の周圍にある總苞は銀白色の光澤ある苞片より成る。苞片は前種と等しく乾燥



圖一十六第

カヒザイク

を分ち白色の綿毛を被ひ、枝には廣き翼狀物あり。莖生葉は線狀又は線狀披針形をなす。頭狀花は枝頭に生じ、黄色の筒狀花冠より成り、其の周圍にある總苞は銀白色の光澤ある苞片より成る。苞片は前種と等しく乾燥

せる鱗片にして堪久性に富み、貝細工の如き感あり。此の花草の英名を *Winged Everlasting Flower* (翼のある堪久花) と稱するは、よく其の性状を現はすものなり。

栽培法 カヒザイクの栽培法はムギワラギクに準じ、栽培容易なりとす。

第三節 ロダンテ

性状 ロダンテ (*Rodanthe*) は其の學名を *Helipterum Manglesii*, Muell. と稱し、菊科に屬する濠洲原産の一二年草にして、莖は一二尺の高さに伸長す。葉は卵圓形又は橢圓形にして帶白綠色を呈し、莖を抱擁す。頭狀花は長き纖弱なる枝の頂に生じて稍々垂下す。總苞は銀白色にして、膜質を帯び、舌狀花冠は乾燥し、其の色淡紅を常とするも、白色を呈する變種 (*var. alba*)、暗紅色を呈する變種 (*var. atrosanguinea*) 等あり。鉢植又

圖二十六第



ロダンテ

は花壇植となして觀賞するのみならず、切花としても亦需要せらるゝこと多く、堪久花に屬す。開花期は春なるも、春播は夏に開花す。

栽培法 ロダンテは春秋二季に播種するも、春早く開花せしむるには秋播となして低溫の溫室又はフレームなどに入るゝを可とす。栽培法は概してムギワラギクに準ず。

第四節 アクロクリナム

性狀 アクロクリナム (Acrocrinum)

は、其の學名を *Acrocrinum roseum*, Hoer. (*Helipterum roseum*, Benth.) と稱し、菊科に屬する濠洲原産の一二年草にして、一二尺の高さを有す。葉は小にして線狀をなし互生す。頭狀花は前者よりも小にして、直立する細き枝の頂に一

圖三十六第



ムナリクロクア

筒づつ生じ舌狀花は淡紅色を常とするも、白色のものあり。開花期は通例夏にして、前者と等しく堪久花に屬し、俗に姫貝細工と稱し、切花となすに適す。

栽培法 アクロクリナムの栽培法はロダンテに準ず。

第五節 センニチサウ

性狀 センニチサウ、一名千日紅 (英名 *Globe Amaranth*) は、其の學名を *Gomphrena*



ウサチニンセ

globosa, L. と稱し、苋科に屬する印度産の一年草なり。莖は一尺餘の高さに伸長して莖節太く、葉は長橢圓形をなして對生す。花は紅色又は白色にして、球形の頭狀花序をなし、夏より秋に亘りて開花す。此の花は堪久花に屬し、切花となして蔭所にて乾かすとき

圖四十六第

は、冬の觀賞に用ひることを得るものとす。

栽培法

センニチサウを栽培するには、春彼岸の頃、苗床に種子を下し、苗の二三寸に成長するを待つて花壇其の他に定植す。此の花草は栽培容易なるも、種子は綿毛を被むり、風の爲に飛散し易きを以て、播種後土を被ふて、よく鎮壓すること肝要なり。花壇に栽培して觀賞する外、切花として用ひらる。

第四十二章 紅花サルヴィア

性状

紅花サルヴィアは、學名を *Salvia splendens*, Ker-Gawl. と稱し、唇形科に屬す。英國にてスカレット、セーチ (*S. arlet Sage*) と稱するものは、即ち是なり。元來ブラジル原産の宿根草なるも、本邦にては一年草として栽培すること多し。此の花草は、其の丈二三尺に伸長し、莖の基部は木質を帶

第五十六圖



紅花サルヴィア

ぶ。葉は卵圓心臟形又は廣披針形にして、葉縁に鋸齒あり。花は唇形花にして、紅色を呈し、梢頭に穂の如き總狀花序を形成す。開花期間は長くして、夏より秋の末に及ぶ。花は脱落し易きがため、切花に適せざるも、花壇植となして觀賞するに可なり。

栽培法

紅花サルヴィアを栽培するには、三四月頃種子を床蒔となし、苗の二三寸に成長せる頃、花壇に定植し又は鉢植となす。肥料としては、油粕の液肥を適宜に用ふれば、よく發育して續々開花す。此の花草の種子は脱落し易くして採收に困難なるを以て、秋新梢を二三節に切り、砂などに挿して發根せしめ、冬季温室又はフレーム内に保ちて、越年せしむることあり。

第四十三章 オランダセンニチ

性状

オランダセンニチは、其の學名を *Splianthes oleracea*, Jacq. と稱し、菊科に屬する印度原産の一年草にして、一名センニチギクと稱す。此の花草は、草姿花容共に稍々センニチサウに類する所あり。莖は一二尺に伸長し、葉は卵形にして

圖六十六第



チニンセダンラオ

第四十四章 ロベリア

性状 ロベリア (*Lobelia*) 中、最も普通に栽培せらるゝ花草は、其の學名を *Lobelia erinus*, L. と稱し、桔梗科に屬する喜望峯原産の一年草にして、丈低く、長ずるも一尺位を出でず。基部の葉は通例倒卵形にして、鋸齒を有するも、上方の葉は披針形乃至線形をなして、尖端を有す。花は總狀花序に排列し、小形にして、萼、花瓣共

對生す。花は黄色、黄褐色等にして、長卵形の頭狀花序をなす。開花期長くして、初夏より晩秋に及ぶ。

栽培法 オランダセンニチを栽培するには、春彼岸頃に種子を苗床に播下し、苗の稍々長ずるを待つて、花壇に定植するを常とす。栽培容易なりとす。

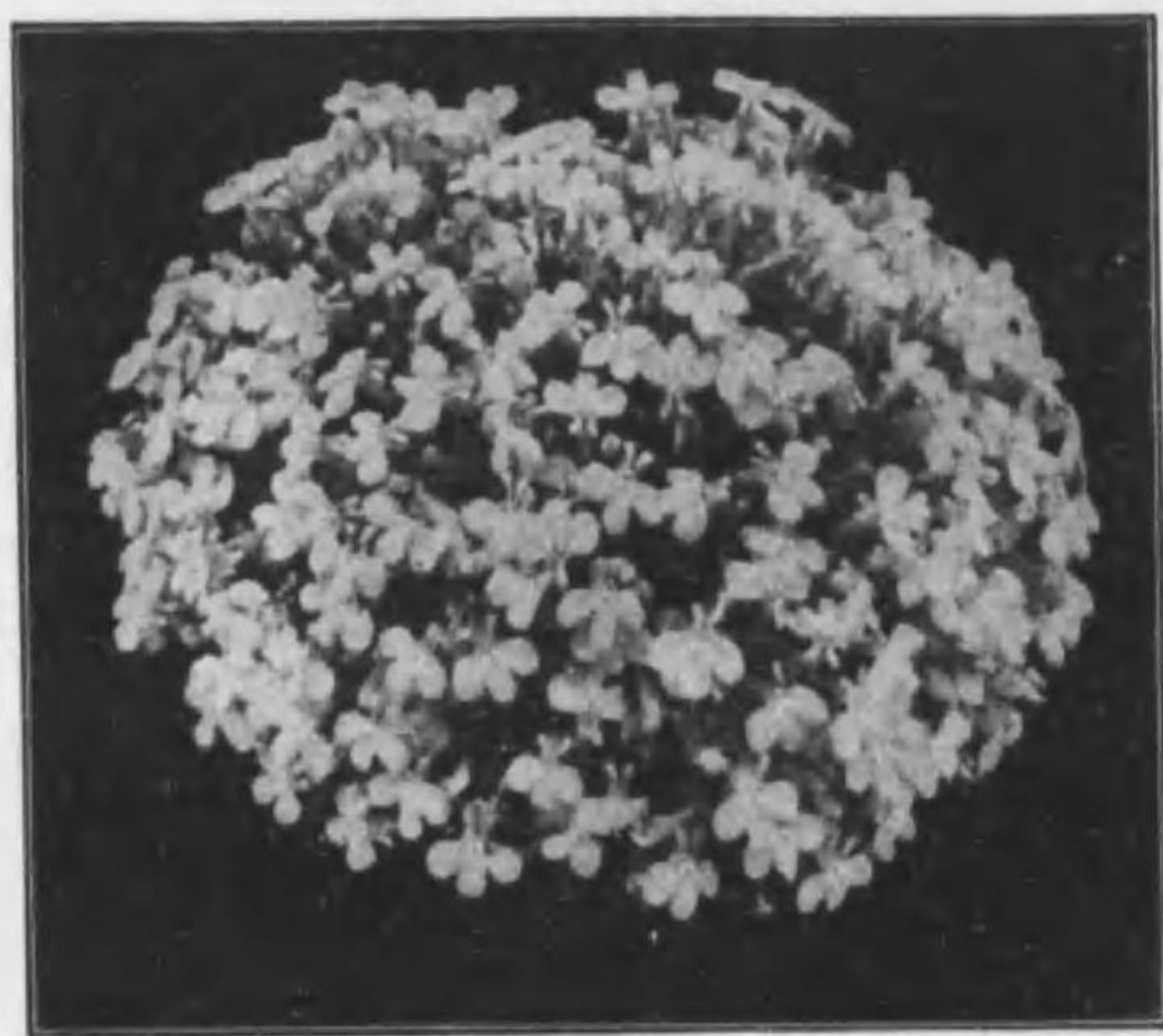
02

に五片より成り、花瓣には上下二唇あり。即ち下唇は三片より成りて大に、上唇は二片より成りて小なり。花瓣の色は藍色を常とすれども、白色のものあり、又紫色、紅色のものもあり。花は梢頭に數箇を生ずるに過ぎざるも、枝數多きがため、満開の時には一面花を以て被はれ、頗る美觀あり。

栽培法

ロベリアを栽培するには、春彼岸頃、平鉢などに播種し、苗の稍々長ずるを待つて、鉢又は花壇に移植して可なるも、秋蒔となして、温室又はフレーム内にて越年せしむること行はる。此の種子は極めて小なるを以て、種子の上には殆ど土を被はざるを常とす。此の花草は春夏の候に開花するも、落花後刈込みて施肥するときは更に開花するものなり。草姿、花容共に優婉にして、頗る觀賞に適し、且つ其の丈低きを以て、花壇の縁植とな

圖七十六第



アリベロ

01

し、又毛氈花壇などに用ふるに適す。尙ほ此の花草は、晩秋の頃温室内に移し、挿木法によりて苗を養成することあり。

第四十五章 鳳仙花

性状 鳳仙花(Balsam)は、其の學名を *Impatiens balsamina*, L. と稱し、鳳仙花科に屬する印度原産の一年草にして、高さ二尺餘に達す。葉は、長橢圓形にして互生し、葉腋に不整齊の花を開く。開花期は夏秋の候にして通例單瓣なるも、重瓣の花を開くものあり。又花の色には赤・白・紫・絞等あり。

栽培法 鳳仙花は三四月頃苗床に播種し、苗の二三寸に成長せる頃花壇又は鉢に移植す。性強健にして栽培し易く、美大の花を得んとす

圖八十六第



花 仙 鳳

カカリア

クワクカウアザミ

紅花サルワイア

コスモス

アヒレト

マツバボタン

ルカウサウ



イロコ

イロコ

イロコ

イロコ

イロコ

イロコ

イロコ

るには二三回稀薄の液肥を施すをよしとす。種子の熟するや、少しく果實に觸るゝも、直ちに裂開して種子を撒布するの性あるが故に、英語にてタッチ、ミーナット (Touch me not) 即ち不可觸の稱あり。

第四十六章 蔦蘿

性狀 ムカウサウ 蔦蘿は、其の學名を *Quamoclit vulgaris*, Chois. と稱し、旋花科に屬するメキシコ原産の一年生蔓草なり。葉は互生し、羽狀に細裂して絲狀をなす。花は葉腋に生ぜる花軸の上、に二三筒づゝ生じ、其の形漏斗狀をなして縁邊五裂す。開花期間は夏より晩秋に及び、花形小なるも、紅色燃ゆるが如くにして、頗る美なり。

栽培法

蔦蘿を栽培するには、春彼岸の頃

第九十六圖



ウサウカル

苗床に下種し、苗の二三寸に成長するを待つて、花園に移植すべく、塙籬などに纏絡せしむるに可なり。栽培容易にして、多く施肥するの要なし。

第四十七章 マツバボタン

性状 マツバボタン (Sun Plant or purslane) は、

其の學名を *Portulaca grandiflora*, Hook. と稱し。馬齒莧科に屬する南米原産の一年草にして、花壇植となす外、玄關前の砂利などの間に點植するに適す。葉莖共に多肉にして、草丈僅かに四五寸に過ぎず。葉は針狀にして互生し、其の基部に毛あり。花は多く單瓣なれども、又重瓣のものあり。花色は紅紫、黃、白、絞等にして、夏より秋に亘りて開花す。

栽培法 マツバボタンを栽培するには、四



マツバボタン

月頃、花壇其の他に種子を直播となし、發芽後に間引くを便とするも、亦往々苗床に播種し、苗の稍々成長するを待つて移植することあり。此の花草は其の丈甚だ低くして、花色種々なるがゆゑに、適宜花色の異なるものを配合して、花壇に密植するに宜しく、又花壇の縁植となすに可なり。尙ほ此の花草は種子落下し易くして、採種に困難なるが故に、栽培せる花壇の土を掃き集めて保存し置き、翌春之を播下することあり。

第四十八章 牽牛花

第一節 牽牛花の來歴

牽牛花は其の學名を *Pharbitis Nil, Choisy.* と稱し、旋花科に屬する蔓性の一年草なり。現今其の野生品を發見すること能はざるを以て、其の原産地は明かならざるも、蓋し熱帶亞細亞地方なるべし。此の花草の本邦に傳來したる年代は詳かならざれども、奈良朝の末頃に支那を経て藥草として輸入せられたるものゝ如く、延喜式に藥品として記載せらるゝ牽牛子は即ち此の花草の種子を指すも

のとす。

本邦に傳來したる當初の牽牛花は淡青色の平凡なる漏斗狀花を開き、三尖葉即ち並葉と稱し、三方に尖れる普通の葉形を有する蔓草にして、爾後永き年月の間専ら其の種子を採收せんが爲に栽培せられたるを以て、花葉の上に殆ど變異の見るべきものなかりしことは、今を去ること二百二十餘年前に發行せられたる和漢三才圖繪に於ける牽牛花の記事に淺碧(淡青色)の外、深碧、純白、淺紅、紅の花色を有するもの及び莖長三四寸にして開花する矮性種(二葉牽牛花)あるに過ぎざるを見て其の一斑を知るべし。然るに徳川幕府の基礎固まり平和長く續きて、世人園藝を樂しむの閑日月を有するに至りしかば、文化文政の頃より牽牛花は觀賞用として重要視せられ、花葉の珍奇なる變異に注意し、之が選出繁殖を圖るもの續出せしかば、俄然牽牛花に變り物の多く現出したることは、當時發行せられたる朝顔品類圖考、花壇朝顔通、牽牛花水鏡等の古書を見ても知ることゝうべし。降て嘉永安政の頃に至りては、牽牛花の改良著しく進歩し、之が栽培の流行も殆ど極度に達せり。三都一朝朝顔三十六花撰、兩地秋、都鄙秋興等の著書は

何れも此の時代の出版にして、之等によりて見るときは、現今栽培せらるゝ珍奇の變り物は、大抵當時既に作出せられたるが如き觀あり。又文化文政の頃は江戸(東京)と浪華(大阪)とは東西に於ける牽牛花の栽培中心なりしが、嘉永安政の頃に於ては、江戸は斯界の中心を獨占し、浪華の名花も江戸の花合會に出品せられて覇を争ふが如き狀況を呈せり。尙ほ下總の行徳、野州の宇都宮なども牽牛花の栽培盛にして、江戸の花合會に出品せるもの少からざりき。

此の如く都鄙盛に牽牛花を栽培し、珍奇の品種續出せる際、明治維新に遭遇し、國家甚だ多事なりしかば、斯花の栽培殆ど絶滅に歸せんとし、僅に少數の特志家によりて辛ふじて命脈を維持せしが、明治の中葉以後に至り漸く再興の機運に向へり。即ち明治二十六年東京に積久會(ジヨウキウカイ)と稱する牽牛花栽培家の團體現れ、年々夏季に品評會を開催せるのみならず、機關雜誌の發行をさへ見るに至りしより、種々の團體相次いで現れ、牽牛花の栽培大に流行し、東京は再び斯界の中心をなすに至れり。此の他、大阪を始め本邦諸處にも牽牛花同好者の團體現れて品評會なども盛に行はれしかば、明治の末葉より大正、昭和にかけて牽牛花の栽培

は實に全盛を極め、嘉永・安政の盛時を凌駕するに至りしのみならず、遺傳學の應用によりて品種の改良に著しき進歩を見るに至れり。尙ほ東京の牽牛花界にては從來獅子咲、采咲、臺咲等の變り物を主とせしが、近年大輪咲を觀賞するもの漸く増加せる傾向あり。又大阪方面は大輪咲と臺咲とを以て有名なりしが、大輪咲の改良は輓近特に著しく發達し、花輪の直徑七寸を超ゆるに至れり。

第二節 牽牛花の性状

牽牛花は纏絡莖を有する一年草にして葉は互生し、花は葉腋に生ず。而して葉は元來三裂し、花冠は漏斗狀を呈するを常とするも、現今栽培せらるゝものは葉形花態に於て極めて多くの變化を見るに至れり。今項を分つて其の一斑を述べれば次の如し。

第一項 牽牛花の莖

牽牛花の莖は蔓性を常とするも、木立即ち俗にチヤボと稱して蔓性を帯びざ

る極めて矮性のものあり。又石化即ち帶化と稱し莖の扁平となれるものあり。尙ほ蔓性の中にも並性と渦性によりて莖の長短、細太を異にするものとす。即ち並性の牽牛花にありては蔓細くしてよく伸長するも、渦性のものは之に反して蔓太く伸長の度は遙かに並性に劣るものとす。チヤボは古くより存在せるものにして、和漢三才圖繪に記載せられたる矮性種(二葉牽牛花)は即ち是なり。又石化には孔雀葉と稱する丸葉を着生し、其の形小なるを通常とす。今牽牛花水鏡と稱する文政年間に著はされたる書中に記する石化牽牛花の圖を示せば第七十一圖の如し。

第七十一圖



石化アガサガホ

第二項 牽牛花の葉

葉形 牽牛花の葉形に種々あり。今其の主要なるものを擧ぐれば次の如し。

一、三尖葉 は並葉又は常葉と稱せられ、牽牛花に最も普通の葉形にして、中央及び左右兩翼の三部に分裂し、各部の先端尖鋭なるものを云ふ。尾長葉は三尖葉の中央部が特に稍や長きものを云ひ、雀葉とは之に反して三尖葉の中央部短きものを云ふ。

二、鋏形葉 は三尖葉の兩翼小となり、中央部特に伸長して慈姑の葉に似たるものを云ふ。旋花葉と稱するは、其の一種にして旋花の葉に似たるものとす。又蜻蛉葉として左右の兩翼各々二部し、中央部の長く伸びたるものあり。

三、洲濱葉 は三尖葉の如く中央及び左右兩翼の三部に分るれども、葉の先端何れも丸味を帯びるを以て其の特徴となす。千鳥葉は洲濱の性を帯べる鋏形葉と見なすべし。蟬葉は通例蜻蛉葉の如く左右兩翼各々二分するも、亦往々分裂せざるこ

とあり。

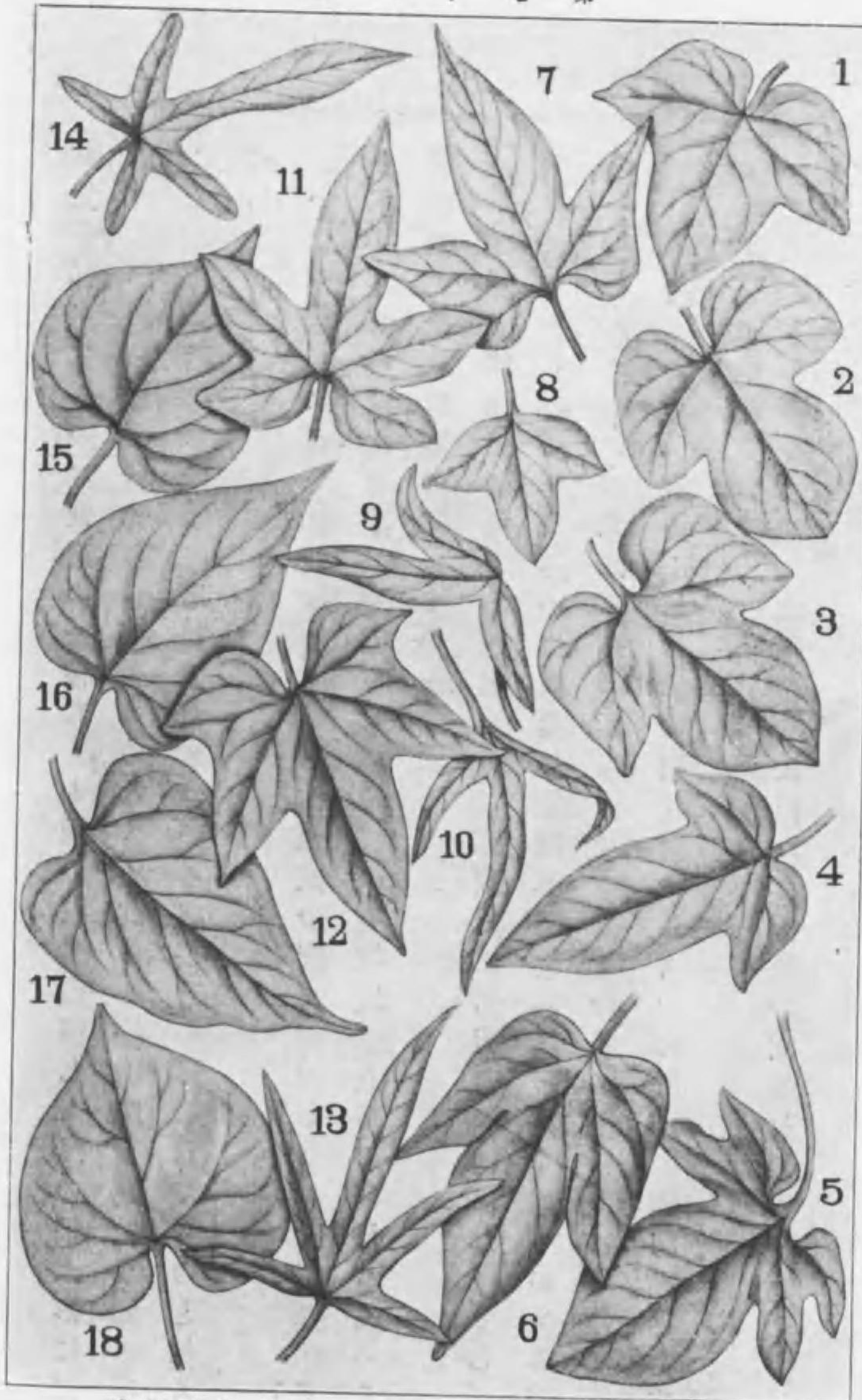
四、笹葉 は一種の三尖葉なるも、兩翼張らずして笹の葉形をなしたるものを云ひ、楓葉は其の一種にして中央部の丈短く楓の葉に似たるものを云ふ。又飛

鳥葉と稱するものは、笹葉の一種なるも、葉の兩翼擴張して、鳥の飛ぶ形に似たる所あるがために命名せられたるものなり。其の他笹龍膽葉、鷄足葉(細く深く切れたる三尖葉にして鷄の足に似たるもの)も亦、笹葉の變形したものと見るを得べし。

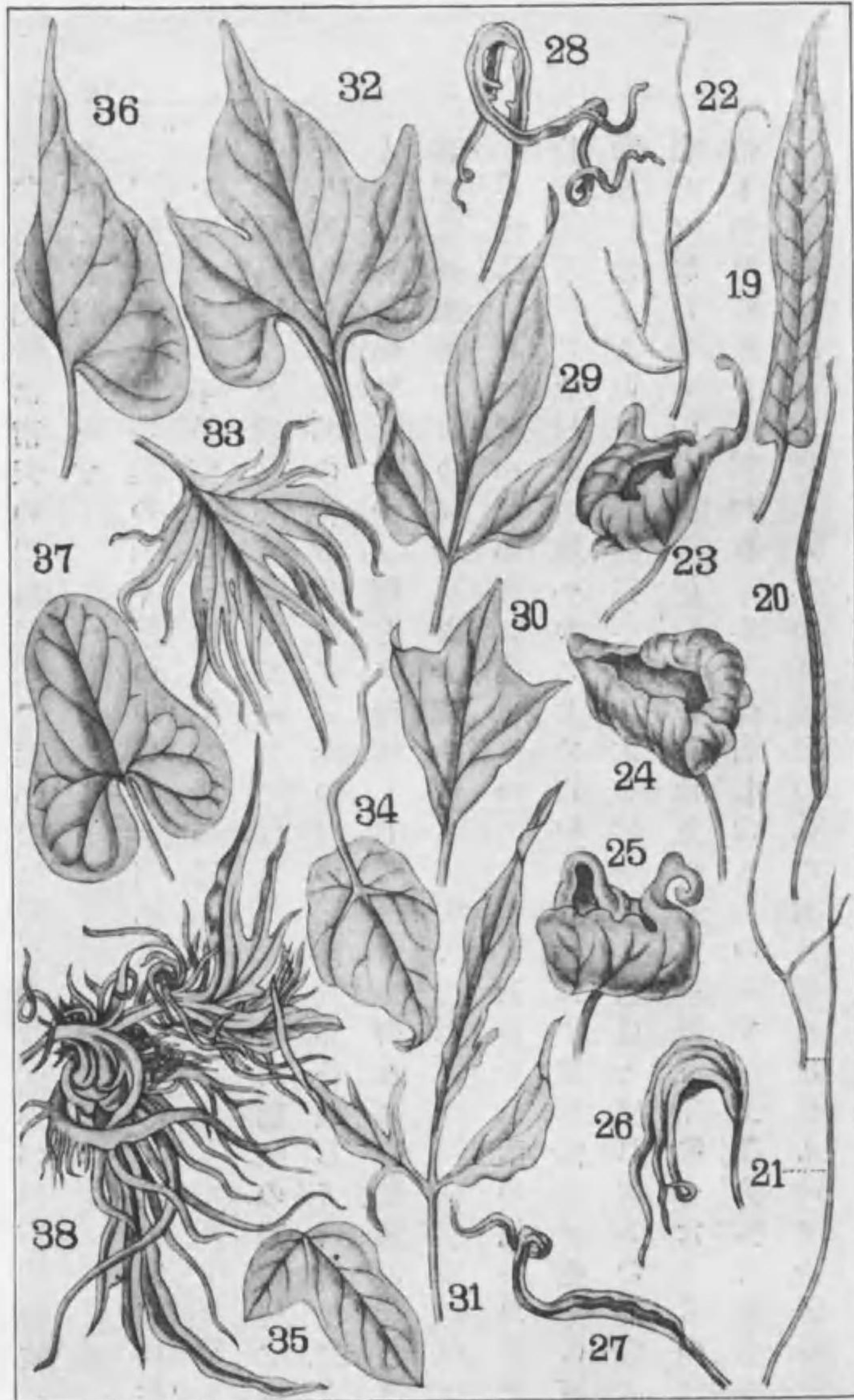
五、立田葉 は五つに裂けて、其の形稍や槭の葉に似たるものを云ふ。八手葉と稱するものは、立田葉の一種にして、葉形較や幅廣く、且つ缺刻淺きものなり。又槭葉とは、立田葉の細きものを云ふ。

六、丸葉 は葉形の丸きものを云ふ。孔雀葉は丸葉の一種にして、少しく長味を帯びたるものなり。其の他梅葉、梨葉、葵葉、薯蕷葉など稱するものも、亦皆丸葉の一種にして、梅、梨、葵又は薯蕷の葉に似たるより命名せられたるものなり。

七、柳葉 は葉形細長くして、柳の葉に似たるものを云ふ。絲柳葉と稱するものは、柳葉の一種にして、葉形甚だ細きものを云ひ、海松柳葉及び蒼葉柳(淺澤柳)葉と稱するものは、海松藻又は蒼の葉に似たる柳葉の意味を以て命名せられたるものとす。



- 18 葵葉
17 梅葉
16 孔雀葉
15 丸葉
14 蜻蛉葉
13 城葉
12 八ッ手葉
11 立田葉
10 鶴足葉
9 符龍膽葉
8 楓葉
7 飛鳥葉
6 笹葉
5 蟬葉
4 鐵形葉
3 千鳥葉
2 洲濱葉
1 雀葉



- 38 寶篋葉
37 多福葉
36 牛片葉
35 角葉
34 蓮葉
33 林風袋葉
32 林風葉
31 枝打南天葉
30 蝠蝠南天葉
29 南天葉
28 唐草雨龍葉
27 糸雨龍葉
26 雨龍葉
25 象鼻葉
24 物水葉
23 物水雨龍葉
22 海松糸柳葉
21 細糸柳葉
20 糸柳葉
19 芥葉柳葉

八、南天葉 は南天の葉に似たる葉形をなすものを云ひ、蝙蝠南天葉、枝打南天葉など數種ありとす。

九、蓮葉 は蓮の葉の如く、葉の中央に葉柄あるものにして、其の葉柄は甚だ長きを常とす。手長筋などに多く見る所の葉形なり。

一〇、林風葉 は葉形種々にして一定せざるも、要するに、葉柄の葉に接する所擴大し居るを以て、其の特徴となす。此の種の葉が數多分裂して、所謂數裂となるときは、林風葉を生ず。而して葉形として最も珍奇なる寶葉の如きは、蓋し林風葉の數裂となりて變化せる極生ずるものゝ如し。

一一、抱葉 とは、葉の縁が表に巻上りたるものを云ひ、千鳥葉の抱へたるを千鳥抱葉と名づけ、立田葉の抱へたるを立田抱葉と云ふ。掬水葉とは抱葉の更に強く抱へたるものにして、其抱へ方は、水を容るゝも猶ほこぼれざるの形容より命名せられたるものなり。握葉とは、掬水葉の更に一層強く抱へたるものにして、恰も手を握りたるが如き葉形を命名したるものとす。又象鼻葉と稱するものは、掬水葉又は握葉に似て、其の先端、象の鼻の如き形をなすものを云ふ。

掬水葉、握葉、象鼻葉は、其の抱へ方の強くして、本來の葉形爲めに没却せらるゝがゆゑに、抱葉の如く、本來の葉形と併稱して命名することなく、單に掬水葉、握葉又は象鼻葉と呼ぶを常とす。此等の葉は、一般に獅子系に現はるゝこと多きものなり。

一二、雨龍葉 とは、葉が細く巻きて、其の先端よれ、恰も蛟龍の如き形をなすものを云ふ。絲雨龍葉とは、雨龍葉の細くして、絲の如きものを云ひ、其の枝あるを枝打絲雨龍葉と名づく。唐草雨龍葉も、亦雨龍葉の一種にして、唐草模様の如き形をなすによりて、名づけられたるものとす。此等の雨龍葉は、笹系、立田系などに出づること多く、獅子系にも見ることあり。

一三、龍葉 とは、抱へ方強く、葉端よれて龍の形をなすによりて、命名せられたるものなり。其の本來の葉形に種々あるがため、笹龍葉、立田龍葉、其の他何々龍葉と稱し、種々の龍葉あるものとす。前記の雨龍葉は、龍葉の更に一層細くよれたるものと見るを得べし。

以上の外、葉の中央脈の一方缺けたる半片葉、芙蓉の葉に似たる芙蓉葉、薊の葉

に似たる薊葉、細長く船形に抱へたる芝船葉、抱葉の反對に、葉裏に反轉する摺葉等ありとす。

葉の地合

葉形は右の如く多種多様なるのみならず、葉の地合にも、亦種々の別あり。今其の主なるものを擧ぐれば次の如し。

- 一、並 とは、普通の地合を云ふ。
- 二、石目 とは、並に似て、稍や粗雑なる地合を云ふ。
- 三、縮緬 とは、葉面に幾多の小凹凸ありて縮み、恰も縮緬の如く見ゆる地合を云ふ。車咲は立田の縮緬葉に現るゝものとす。
- 四、蛇腹 とは、葉脈波状をなして、蛇の腹の如き地合をなすものを云ひ、柳葉などに多し。
- 五、砂摺 とは、葉面に細かき砂を摺り込めるが如き地合を云ふ。臺咲は砂摺葉に現るゝものとす。
- 六、打込 とは、葉面處々に小さき凹みのあるものを云ひ、恰も指頭にて點々打込めるが如く見ゆるを以て、命名せられたるものにして、一名石打と稱し、桐系渦

性などに多しとす。

葉の色

牽牛花の葉色中、最も普通なるものは綠色にして、之を青葉と稱し、黃色を呈するを黄葉と云ひ、青葉と黄葉との中間の色合を間黄と云ふ。又生色とて、白色の少しく鈍色を帯びたるが如き色合もありとす。以上の中、青葉は葉綠素を含むこと最も多きが爲、同化作用盛にして發育最も旺盛なるも、之に反して生色葉は葉綠素の含量最も少きが爲、發育甚だ不良にして枯死するもの多し。而して黄葉は青葉に比して葉綠素を含むこと少きが爲、發育稍々劣るが如きも、生色葉の如く幼時に枯死することなし。名古屋の大輪咲、摘心して矮性に仕立つは、青葉にては徒長の弊あるを以て黄葉を主とす。尙ほ之等葉色の差別は子葉時代より現出するものとす。

以上は、一枚の葉が全部同一の色にて彩られたる場合なるも、實際に於ては、二種以上の色を以て、一枚の葉を彩れるものあり。即ち陰陽と稱し、葉の表面と裏面とによりて色彩の異なるもの、三色と稱し、綠・黄・白の三色にて、一葉面を彩れるもの、松島と稱し、綠・黄の二色にて一葉面を彩れるもの、白覆輪と稱し、葉縁白色な

るもの、黄覆輪と稱し、葉縁黄色を呈するもの、黒覆輪と稱し、葉縁黒色を呈するものなどありとす。

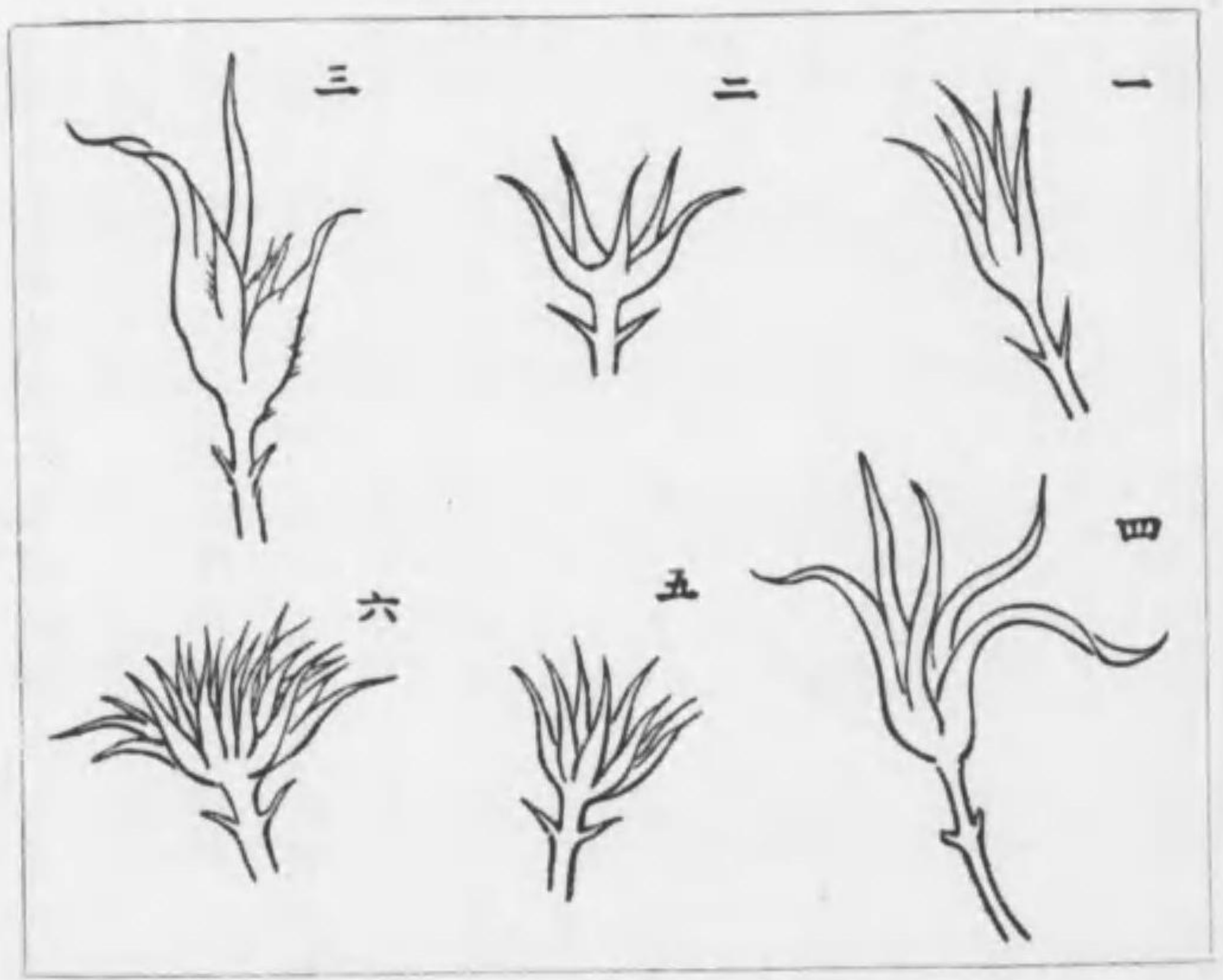
又葉面には、其の葉の地色と異なる色が斑點をなして存在することあり。之を斑と稱す。其の斑には白斑(白色の斑にして、單に斑とも云ふ)、水晶斑(白斑の純白なるもの)、黄斑(青葉に黄色の斑點あるもの)、松島斑(黄葉に綠色の斑點あるもの)、淡雪(黄葉に白き斑點あるもの)、霞斑(斑が、霞の如く、點々現はるゝもの)、虎斑(青葉に黄色、又は黄葉に綠色の斑あるものにして、其の斑紋は、恰も虎の毛皮の斑紋の如きもの)、三色斑(三色葉の如く、綠、黄、白の三色あれども、斑點となりて現はるゝもの、即ち松島斑に白斑の入れるが如きもの)、二重斑(斑の重なれるものにして、一名晝夜斑と云ひ、葉の表より見れば、單純なる斑の如きも、葉裏より見れば、明かに重なり居るもの)、蔭斑(青葉に淡綠色の斑あるもの)などの別あり。

第三項 牽牛花の花

【萼】 牽牛花の萼は、通例五個の萼片より成るも、中には萼片の五個以上に及ぶ

ものあり。數萼とは五個以上の萼片あるものを云ひ、萼片の數更に一層多きを唐松萼と稱す。又五個の萼片より成る普通の萼も、萼片の大小、長短等均しからざるがため、並萼(普通の萼にして、並性、獅子系に多し)、淺萼(蓋形をなす萼にして、渦性に多し)、桐萼(桐系に屬する萼)、大萼(並萼よりも萼片の更に一層長大なるもの)等の數種に分たる。又唐松萼に似て青花と稱するものあり。青花は花瓣なくして、萼のみ重なれるが如く見ゆるも、其の實、外部にありて凋落

第七十四圖



一並萼 二淺萼 三桐萼 四大萼 五數萼 六唐松萼

するものは眞の夢にして、内方にありて成長するものは、花冠に相等するものなり。即ち綠色の花冠を有する花なるを以て青花と稱するものにして、他の花卉にも見ることもある所のグイレッセンス(Virescence)に外ならざるが如し。

花形

牽牛花の花形には種々あるも、其の主要なるものを擧ぐれば、次の如し。

一、丸咲 とは、花瓣相合して漏斗状をなすものを云ひ、最も普通の咲方なりとす。通例丸咲は曜の數五箇なるも、大輪咲にありては七八曜ありとす。

二、梅咲 は前者と等しく、漏斗状花冠を有するも、花冠の先端僅に切れて淺く五瓣となり、各瓣の周縁丸味を帯びて、梅花に似たるものを云ふ。又櫻咲は梅咲に似たるも、各瓣の周縁圓からず、其の中央僅に凹みて、櫻の花に似たるものを云ふ。

三、桔梗咲 とは漏斗状花冠の先端淺く切れて五瓣となり、各瓣の中央稍々尖りて、桔梗

圖五十七第



ハ 花 口 曜 イ

に似たる咲方をなすを云ひ、桔梗咲に似て、花瓣の抱へたるものを空穗咲と云ふ。又桔梗咲に似たるも、筒の部分長くして、龍膽に似たる咲方をなすものを龍膽咲と云ひ、桔梗咲の切込一層深くして、瓣端の尖り方も、亦較や強きものを鯉咲と云ふ。

四、切咲 とは、丸咲と異なりて花冠の數片に切れたるものを云ふ。立田笹、柳等の諸系にありては、何れも切咲の花を開くも、其の切れ方の程度は一ならず。立田は通例花冠五瓣に切れて咲くも、其の瓣の幅廣くして、之を接合するときは丸咲の如くなるも、笹にありては瓣の幅稍々狭く、糸柳葉の如きは瓣の幅極めて狭きを常とす。石疊咲と稱するは花冠切れて五瓣となり、各瓣石疊の如き形に組合ふて垂れたるものを云ひ、數切咲とは花冠の五枚以上に切れたるものを云ふ。

五、采咲 とは、花冠數切となり、采配の如き形をなすものを云ふ。而して花瓣の周縁鋸齒状をなし、撫子の花に似たるものを撫子咲と稱し、撫子咲の一種にして、瓣縁の切れ方更に一層尖銳なるものを英吉利咲と云ふ。又菊咲とは細く數



1 梅 咲
 2 櫻 咲
 3 桔梗 咲
 4 龍膽 咲
 5 石曼 咲
 6 卷絹 咲
 7 臺 咲
 8 車 咲
 9 鳥車噴上車 咲牡丹
 10 采咲牡丹
 11 撫子咲牡丹
 12 風鈴 咲
 13 毛 咲(管瓣を混す)
 14 管瓣 咲

切れとなれるものにして、花瓣の縁が多少抱へ且つ稍々受け咲となれるものを云ふ。

六、臺咲 とは、丸咲なるも、花筒が花の中央に折れ込みて、茶臺の如くなれるものを云ふ。又車咲とは臺咲にして、五瓣に切れたるものなるも、通例立田の臺咲を車咲と云ひ、笹の臺咲を雀咲と云ふ。

七、管瓣咲 とは、花冠細裂して管状をなすものを云ふ。

八、風鈴咲 とは、花冠細裂して糸の如く垂下せる先端に袋の如き形をなせる花瓣が附着せるものを云ひ、管瓣の先端が裏返りて袋状をなせるものと見るとをうべし。鳥甲咲とは風鈴咲の如く袋状の花弁が垂下せずして直立するものを云ふ。

九、毛咲 とは、花瓣細裂して毛の如く細くなれるものを云ひ、其の狂へるを鬚咲と稱して區別することあり。

此の他、噴水咲とて、細切の采咲にして噴水の如き形状をなすものあり。茶筌咲とて、花冠細裂して數多の瓣となり、茶筌の如くに瓣端の抱へたるものあり。

球咲として、狂咲にして丸くなれるものもあり。又巻絹マキヌとして、數切咲の瓣端卷けるもの、吹詰フキジメとして、内瓣多く生じて花心を填充せるもの、鏑イカリ咲として、花冠切れて狂ひ鏑の形に似たるもの等あり。

花質 前述の如く、牽牛花の花形には、其の種類甚だ多しと雖ども、花瓣の單複によりて、大別するときは、單瓣・複瓣の二種となり、複瓣は、更に蓋の有無によりて、八重と牡丹とに分たるゝものとす。

一、單瓣 とは花瓣一重にして、雌雄蓋共に完備するものゝ總稱なり。花形の上より區別すれば、丸咲・梅咲・撫子咲・桔梗咲・臺咲・車咲等種々の名稱あるも、苟も花瓣一重にして、雌雄蓋共に完備するときは、すべて單瓣と稱す。而して奈何なる種類の牽牛花と雖も、單瓣花を有せざるものなく、單瓣は、牽牛花の本元と見るべきものにして、常に能く結實するものなり。

二、八重 とは單瓣と異なりて、花瓣の重なれるものを云ひ、通例雄蓋の花瓣に變じたるもの (Petalody) なれども、獅子八重咲に見るが如く、花冠の裂けて生ぜるものもあり。雄蓋の花弁化には種々の程度ありて、其の程度の高さものは全く

花粉を生ずることなきも、雌蓋完全なるがため、他花の花粉によりて受精することあり。又獅子八重咲は雌雄蓋共に存在するも、生理的機能を欠きて結實せざるを常とす。

三、牡丹 とは、八重と等しく複瓣なるも、雌雄蓋悉く花瓣に變化し居るを以て、八重より區別せらる。即ち、八重は有蓋複瓣花にして、牡丹は無蓋複瓣花なりとす。且つ、牡丹は、通例八重よりも花瓣の重なり方一層複雑なり。牡丹咲には、雌雄蓋共に存在せざるがゆゑに、牡丹咲には結實することなきものとす。

牡丹咲は又度咲とも云ふ。是れ牡丹咲は其の花心に、更に花蕾を有するものにして、其の花蕾は外部の花の咲きつゝある間は中心に潛伏し居るものなれども、外部の花の凋落せる翌日又は數日の後に至りて、時として咲き出づることあるがゆゑに、二度に開花するの意味を以て、度咲又は二度咲と稱せらるゝものなり。又二重咲と稱する牡丹咲は、度咲の如く、花の中に更に花を開くも、内外の花が同時に開くこと第七十七圖の如くなるを以て區別し得べし。要するに牡丹咲は花心に花蕾を有し、其の花蕾の中には更に反復花蕾を藏するものにして、此

の點より考ふるときは、牽牛花の牡丹咲は一種の貫生 (Prolifcation) によりて成れるものなることを知るべし。

花色

牽牛花の花色は、種々雑多にして、一々に擧ぐることはざるも、其の最も普通なるは、白の外、紅、紫、紺、青、柿等なり。而して紅色の極濃くして黒味を帯ぶるを黒鳩と云ひ、之に比して、稍々赤味あるを紅鳩と云ひ、紅色の極薄きを鴉色と名づく。又紫の赤味を帯ぶるを董色と云ひ、紫の青味を帯びて薄きを藤色と云ふ。尙ほ紺の一種に紫紺とて、紺に比して紫色を多く含むものあり、紺青とて紺に比して青色を多く含むものあり。其の他群、青色、空色、缥色等は、何れも多く青色を含む所の色彩にして、唐桑色は茶褐色の一種と見て可なるべく、桑色の濃厚なるものとす。又柿色とは柿澁にて染めたるが如き一種の赤茶色を云ふ。

又牽牛花の花には、全花同一の色を以て彩らるゝことなく、種々の模様を顯は

圖七十七第



咲重二

すものあり。今其の模様の主なるものを擧ぐれば、次の如し。

覆輪 とは、花の周縁が地色と異なる他の色を以て輪どられたるものにして、其の輪の深きを深覆輪と云ひ、淺きを爪覆輪と云ふ。覆輪の色白き場合には、特に覆輪の色を擧ぐることもなく、單に地色を顯はし、其の下に覆輪と記するに過ぎず。例へば、紅覆輪と云へば、紅の地色に白の覆輪あるを意味するが如し。然るに白の地色に紅の覆輪あるときは、之を白紅覆輪と呼び、覆輪の色を顯はすが如く、白以外の覆輪は、覆輪の色を地色の下に記するを常とす。

底紅 とは、花の筒のみ淡紅色を呈し、他は白色を呈するものを云ふ。若し筒の淡紅色が花瓣の方へ、ぼかしたるときは、特に之を移白と名づく。

底白 とは、筒白又は底抜とも云ひ、花の筒だけ白くして、他は種々の色にて彩られたるものを云ふ。大輪咲を栽培する人は底白を貴ぶ。是れ筒白ければ花の色彩を一層鮮美ならしむるによる。

花笠 とは、瓣端に至るに隨ひ漸く色の薄くなるものを云ふ。

十所紋 とは、一名車紋とも云ひ、花の曬及び縫合線(合計十ヶ所)が、地色よりも

濃厚なる色又は他の色にて、花心より射出状に彩られたるものを云ふ。
吹掛絞 とは、白地に或る一種の色を吹掛けたるが如き觀を呈するものを云ふ。

鳴海絞 とは、吹掛絞に似たるも、其の異なる所は、吹掛絞の如く、花一圓に同様の絞を有することなく、漸次瓣端に向ふに従つて、絞の減ずるを常とす。

村雲絞 とは、地色より濃き色又は地色と異なる色を以て、曬と曬との間に大なる斑紋を顯はすものを云ふ。

抜絞 とは、村雲絞の反對にして、濃き地色に薄き色の斑紋を顯はすものを云ふ。

刷毛目絞 とは、恰も刷毛にて掃きたるが如き模様あるものを云ふ。

友禪絞 とは、刷毛目に似たるも、友禪絞の刷毛目は、濃淡混交し、且つ往々白點を撒布す。

立浪絞 とは、通例地色よりも濃厚の色を以て、刷毛目よりも粗に縦縞を顯はすものにして、其の縦縞は中斷し居るもの多し。

半月絞 とは、花の一半は殆ど無地又は無地に近き縞にして、他の一半は立浪絞に似たる模様を顯はすものを云ふ。

第三節 牽牛花の分類

第二項 性系上の分類

牽牛花は大別して並性、渦性の二種となす。

並性 之に屬するものは莖細くして伸長し、葉は並葉にして葉肉薄さを常とするも、葉形は種々に變化するものとす。又並性の花は五曬（曬とは花瓣の中央にある細き縦の二線内を云ひ、一花

圖八十七第



葉 並

圖九十七第

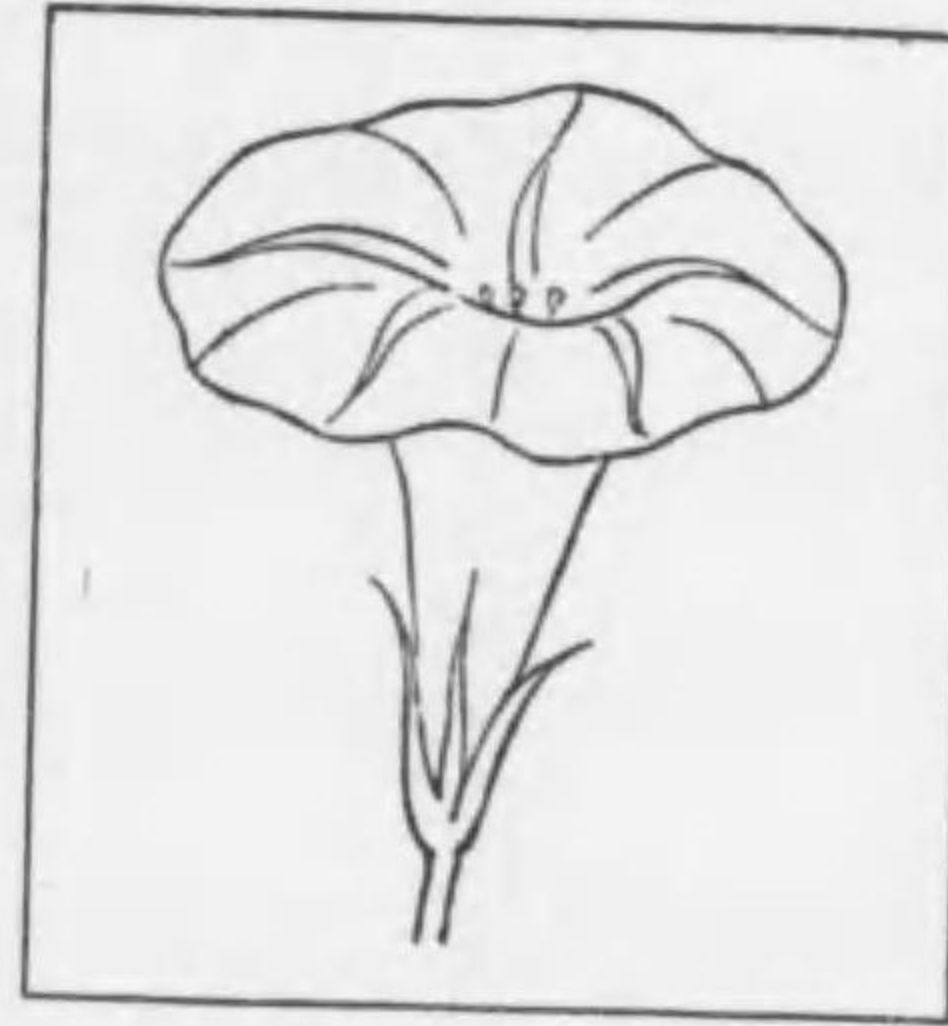


葉 渦

瓣に一箇づゝあるがゆゑに、五曜の花は五花瓣を有すの丸咲即ち漏斗状合瓣花冠にして筒状部長きを常とし、此の特質を受けて花形は種々に變化し、八重咲・牡丹咲もあり。

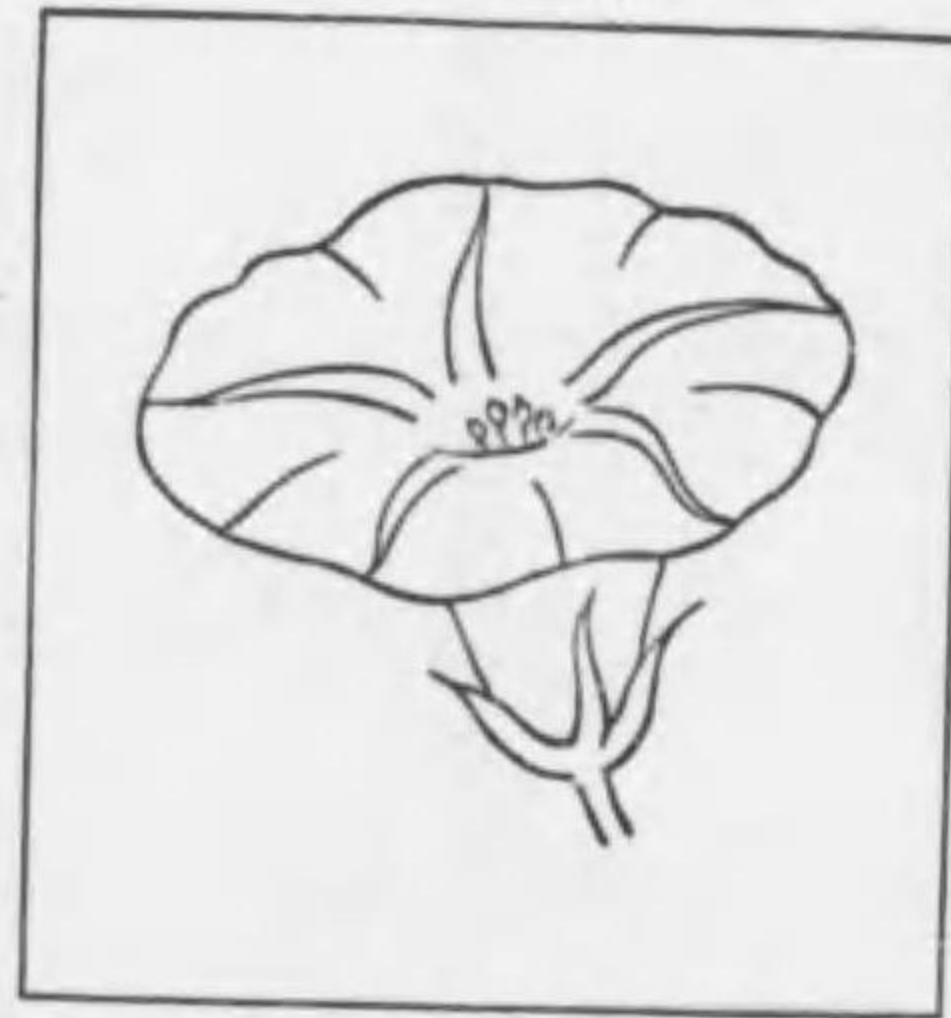
渦性 之に屬するものは莖の伸長遲緩にして節間短く、葉は渦葉と稱し葉柄短く、且つ葉の兩翼は葉柄の着生部に於て渦の如く卷重なり、葉肉厚きを常とするも、葉形は種々に變化するものとす。又渦性の花は筒状部短くしてよく展開し、爲に蓋形サカツキを呈する所の五曜丸咲を常とするも、此の特質を受けて花形は種々に變化し、八重咲・牡丹咲もあること並性に等し。要するに並性は牽牛花の本體にして、莖葉花などの各部が詰りて厚味を帯び

圖十八第



花の性並

圖一十八第



花の性渦

稍々矮性に變じたるものを渦性と稱す。尙ほ、此の特徵は子葉の上にも現れるものにして、並性と渦性との子葉を比較するときは容易に兩者の相違を認むるをうべし。並性・渦性の兩者は既に述べたるが如く、葉形及び花形の上に種々の變化あるを以て、此の兩性は更に細別して、獅子桐・亂菊・立田笹・柳南天・洲濱等の諸系となす。

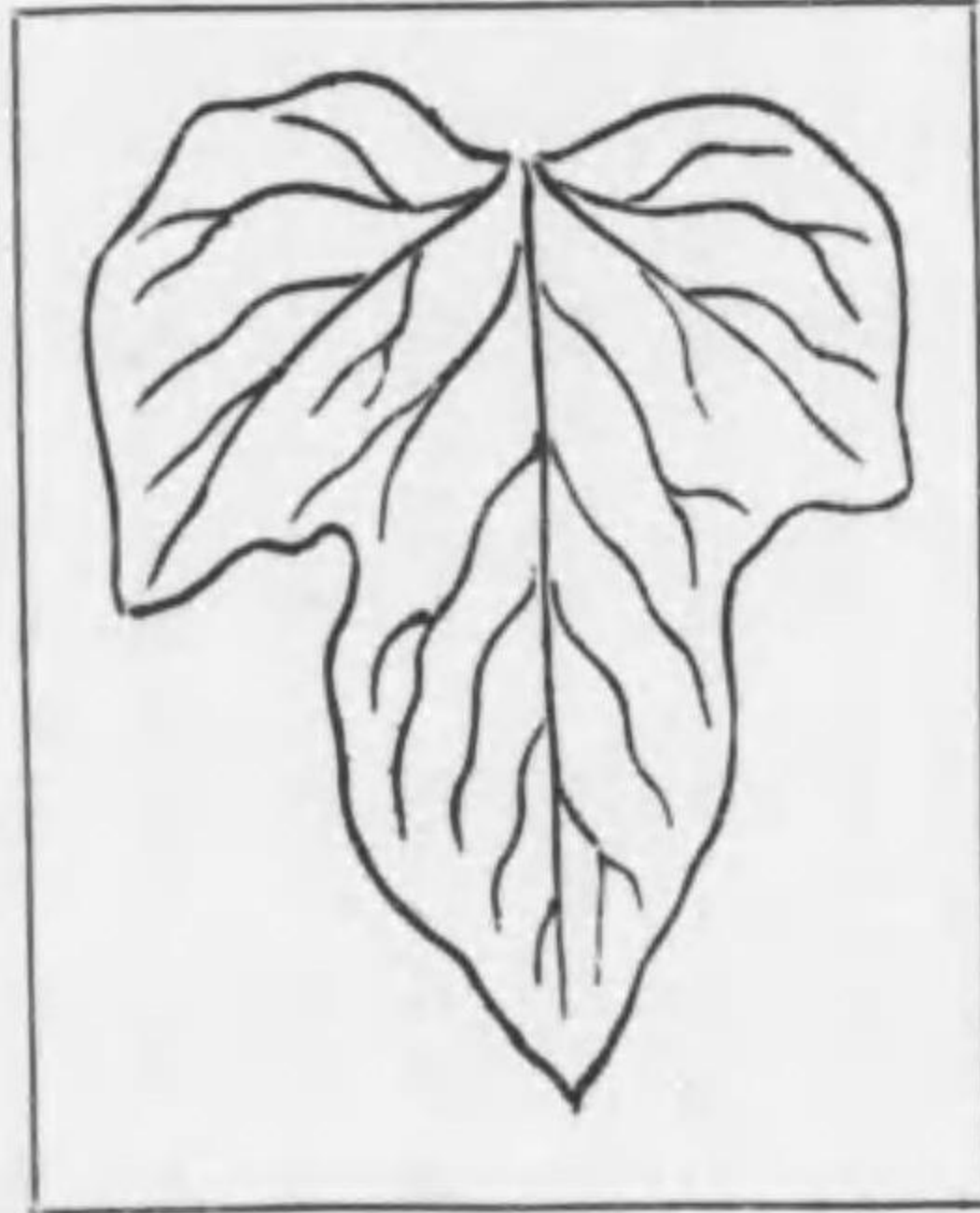
獅子 之に屬するものは莖一般に細くして伸長する性あり。葉には第八十

圖二十八第



葉子獅

圖三十八第



葉桐

二圖に示す所の獅子葉の外種々の葉形あるも、一般に抱^{かか}と稱して葉の周邊が上方に反轉し中央に向つて捲込むの性あり。又花は獅子丸咲と稱し、五曜の丸咲にして花の筒に小さき花瓣の附着し居るものを通例とするも、瓣端數片に切れ花瓣の表裏にも小花瓣の附着し居るものなどあり。而して其の甚しく變化せるものにありては、花瓣悉く裂けて風鈴咲、管瓣咲又は毛咲となる。尙ほ獅子には八重咲、牡丹咲もありて前者を獅子八重、後者を獅子牡丹と稱す。要するに花態の奇なるは此の系統の右に出づるものなきも、花は概して大ならざるを缺點とす。一般に此の系統に屬するものは、子葉も亦種々の程度に抱へるを常とす。

桐 之に屬するものは莖一般に太

圖四十八第



咲丸子獅

圖五十八第



花唐曜六

くして時には棒状をなし、纏絡せしむるに困難なるものあり。葉は桐葉と稱し、第八十三圖に示すが如く桐に似て肥大にして、往々葉面に凹凸あるものを通例とするも、種々に變形す。花には丸咲の外、花瓣深く切れ込みて六瓣となれるものあり、之を六曜唐花と云ふ。又此の系統の花には花瓣に毛の如き小花瓣の附着するものあり、又瓣片の兩側に小なる切れ込を有するものあり、花形一般に大なるものとす。尙ほ此の系統に獅子の系統の混じたるものには風鈴、管瓣などが生ずること多く、美大の花を開くものとす。されど此の系統は現今一般に栽培せらるゝこと少し。

亂菊 之に屬するものは其の莖稍々並性のものに類するも、葉は亂菊葉又は七福葉と稱し、葉柄長くして兩翼相等しからず、且つ兩翼の外

圖六十八第



葉菊亂

圖七十八第



花の系菊亂

に小形の副翼などありて葉形頗る不規則にして、容易に他種と區別しうるものなり。又花は第八十七圖に示すが如く皺襞多くして波状を呈するがため、花冠に切れ込あるが如くに見ゆるものにして、曜数は五箇以上ありて其の數多きがため花輪亦隨て大なるものとす。此の系統のものは、子葉丸味を帯びて菜菔ダイコンのものに類し、且つ往々數箇に分裂す。尙ほ此の系統には八重咲牡丹咲などもあれども、現今栽培せらるゝこと少きものとす。

洲濱 之に屬するものは、葉の裂片の先端が丸味を有す。洲濱葉は即ち本系の代表的葉形にして、千鳥葉多福葉蟬葉等大輪の漏斗狀花を開くものは何れも本系に屬す。子葉は一般に丸味を帯び、菜菔などの子葉に似たるものにして、此の點稍々亂菊に類するが如きも、亂菊の如く裂けることなきを以て異なりとす。現今栽培せらるゝ大輪咲種は大抵本系に屬するものとす。

立田 之に屬するものは立田葉と稱し、械の葉

の如く五裂せる葉を有し、花も亦五裂するを常とす。立田葉の極細く抱へたるものは雨龍葉となるが、之は立田雨龍葉と名つけて笹系及び獅子系の雨龍葉と區別するを可とす。本系の臺咲は車咲と稱せられ、其の牡丹咲とされるものは車咲牡丹にして、烏甲などを多く噴出し、頗る美觀あるものとす。車咲の子葉は、其の形一般に細長くして、左右兩耳間の陷凹狭くして深く、且つ葉面には細脈多數にして鮮明なるを常とす。

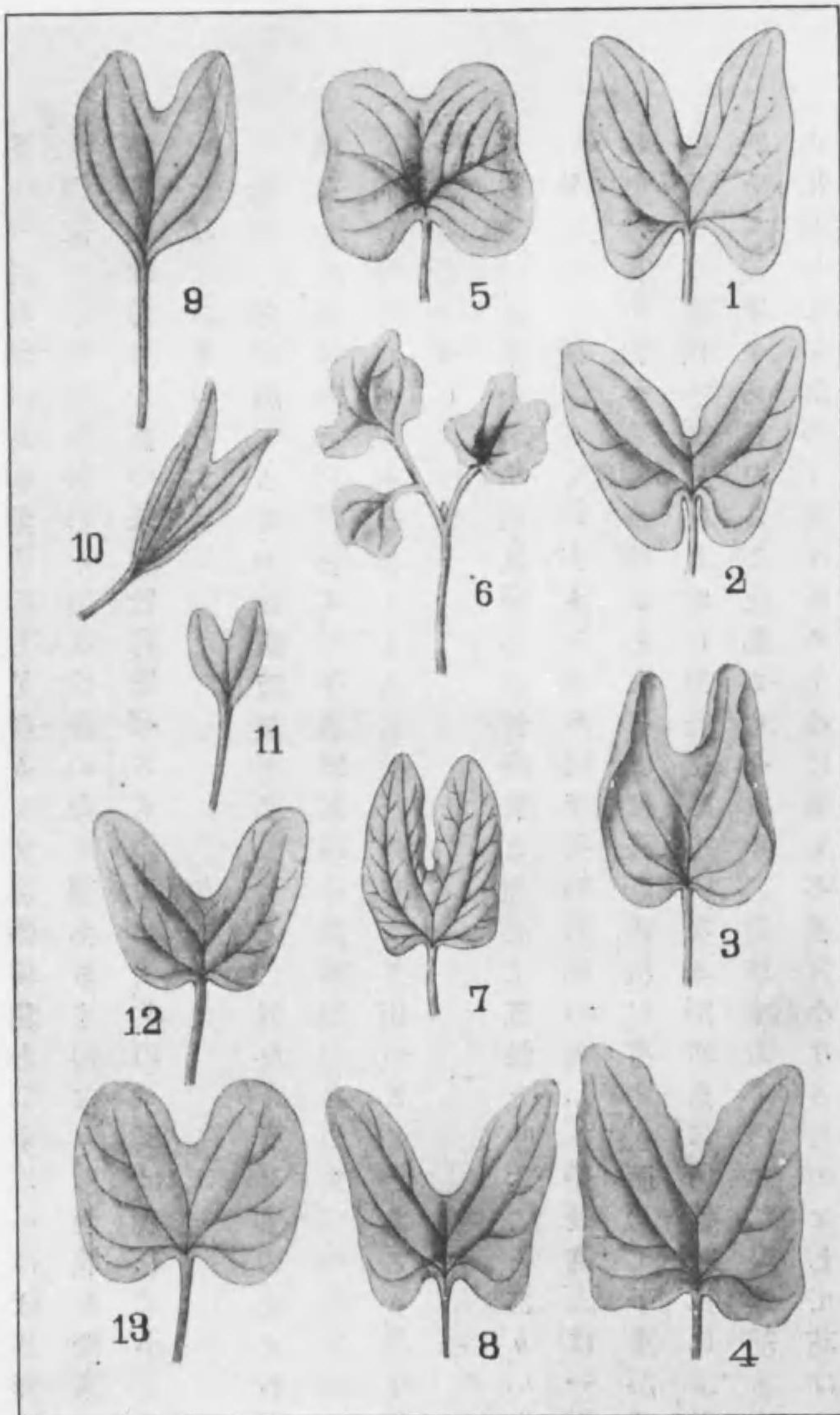
圖八十八第



花の系田立

笹 之に屬するものは笹葉と稱し、三枚の笹の葉を組合せたるが如き形の葉を有し、立田系と等しく五裂せる花を開くも、其の花弁の幅は立田系のものより狭きを常とす。子葉は左右兩耳間の陷凹廣きを常とし、細脈は立田系のものゝ如く鮮明ならず。又笹葉及び其の子葉には、獅子系に見るが如く抱へたるもの少からず。笹葉は種々に變形するが、其の極細く抱へたるものに雨龍葉、糸雨龍

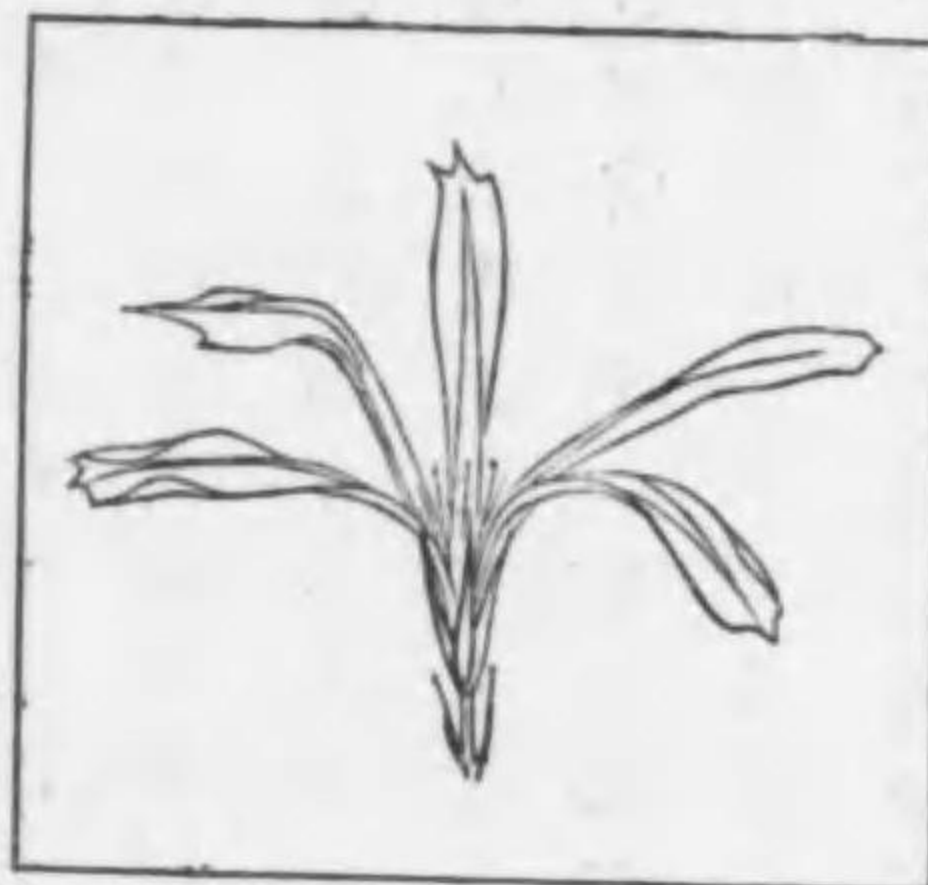
圖 一 十 九 第



子葉の圖
 1 並性
 2 渦性
 3 獅子
 4 桐
 5 6 亂菊
 7 立田
 8 南天
 9 手長
 10 柳
 11 燕
 12 笹
 13 洲濱

411

圖 九 十 八 第



花の系笹

葉前者よりも更に細し等あり。之等は他系より出でたるものと區別するがため、笹雨龍葉、笹糸雨龍葉などと呼ぶを可とす。而して之等笹系の雨龍葉よりは極細く切れ且つ直立して咲く所の采咲を生ず。尙ほ笹系よりは雀咲牡丹と稱する臺咲牡丹の出づるものにして、其の花は立田系の車咲牡丹に比して小なるも、亦一種の車咲牡丹と見

111

て可なり。但し雀咲牡丹には、立田の車咲牡丹に比して、烏甲などの噴出少きものとす。柳 之に屬するものは柳葉と稱し、柳の如く細長き葉を有し、細裂せる花を開くものにして、其の子葉は耳端の間隔廣きを常とす。尙ほ柳葉には種々ありて、其の優良なるものは葉形極めて細くして恰も糸の如く長き觀

圖 十 九 第



葉本及び葉子の葉柳澤淺

あり。絲柳葉細絲柳葉等即ち是なり。又淺澤柳葉と稱するものは葉形柳の如く細長くして支脈著しく現れ蛇腹の如き觀あるものなり。之等の柳系よりは撫子咲牡丹其の他の采咲牡丹出づるものにして、其の子葉は概して小く、且つ奇形を呈するものとす。

南天 之に屬するものは南天葉と稱し、南天に似たる葉を生じ、花は小形の劔咲にして筒部長きを常とす。子葉は耳端の間隔廣く、且つ葉柄の着生部は著しく凹むの性あり。本系よりも八重咲牡丹咲など出づることあるも、現今栽培せらるること少し。

以上の諸系中、獅子桐亂菊を並性、渦性と合せて五性と呼ぶことあり。尙ほ系の外に筋と稱するものあり。例へば手長筋燕筋の如し。手長筋とは一種の出物(親木より出づる變り物)にして子葉は長き葉柄を有す。而して子葉が手長なるときは、通例一種の牡丹咲に開花するものなるがゆゑに、明治時代には手長牡丹とて貴重せられたることあるも、今は殆ど栽培するものなし。燕筋も亦一種の出物にして、其の子葉は極めて小に、葉も亦甚だ小なるものにして、花は小輪の

切れ咲を常とす。

要するに以上述べたる性系の區別は其の大略を示したるに過ぎず。而して實際の牽牛花界にありては、諸種の系統は種々に混淆し居るものとす。即ち笹系と柳系との混ざるもの、桐系と獅子系との混ざるもの、立田系と笹系の混ざるもの等種々あり。之等は實地の經驗を重ねざれば、到底其の真相を看破すること能はざるものとす。

第二項 觀賞上の分類

牽牛花には種々の種類あるも、觀賞上重要な位置を占むるものは大輪咲種と變り咲種との二種にして、就中近年最も廣く栽培せらるゝものは大輪咲種なりとす。

(甲) 大輪咲種 大輪咲種とは、花輪の大なるがために賞せらるゝものにして、其の花形は平凡なる丸咲に過ぎず。元來大輪の花を開かしむるには、栽培の方法宜しきを得ざるべからざるは勿論なるも、又種類の選擇宜しきを得ざるべから

す。現今大輪咲種として栽培せらるゝものは蟬葉關西にて楯形千鳥葉と稱するもの、千鳥葉・多福葉等の葉形を有するものにして、一般に洲濱系に屬するものは花輪大なるものとす。就中、青斑入蟬葉と稱し、蟬葉にして綠色を呈し、白斑あるものは花輪の大きさ最も大にして徑七寸餘に及ぶものあり。關西地方は其の本場なるが如きも、現今廣く各地に栽培せらる。すべて大輪の花を開くものは、其の子葉丸味を有し、萊菔ダイコンなどの子葉に類するを以て、發芽後容易に檢出するをうべし。亂菊系に屬するものも亦其の花輪稍々大なるが如きも、到底前者に比すべくもあらざるなり。尙ほ大輪咲種は小輪の丸咲に比して結實歩合少きを常とす。

(乙) 變り咲種 變り咲種とは、大輪咲種と異なりて花形漏斗狀をなすことなく、種類によりて種々珍奇の花形を有し、到底牽牛花と認めがたきもの多し。變り咲種には種々の種類あるも、其の主要なるものは大別して八重咲種及び牡丹咲種の二種となす。

變り咲種は通例結實せざるを以て、之が栽培を年々繼續するには、毎年親木を

栽培して、之より種子を採收せざるべからず。親木とは出物に對する語にして、出物とは觀賞の目的となるも、雌雄蓋退化して種子を産せざるものを云ひ、親木とは出物と姉妹の關係にある平凡の丸咲にして、種子を産するものを云ふ。尙ほ時には正木と稱し、一種の出物にして觀賞に値するも、多少結實するものもありとす。

(一) 八重咲種 八重咲種とは有蓋複瓣花の總稱にして、獅子八重咲・唐花八重咲等種々あるも、之等の中、近年特に多く栽培せらるゝは、獅子八重咲なりとす。

(イ) 獅子八重咲は、獅子系の出物として現出するを常とし、其の出物は通例兩蓋(生理的機能を缺く)を有するも、時には全然雌雄蓋を失ふて牡丹咲となれるものあり。之を獅子牡丹と稱し、牡丹咲の中に入るべきものとす。

獅子咲(獅子八重及び獅子牡丹)は一般に其の花に藝の多きを特徴とし、風鈴鬚・管瓣などの珍奇なる花態は、屢々獅子咲に於て見る所なり。要するに、獅子咲は、花態の珍奇なる點に於て、他種に勝るものとす。尙ほ獅子咲の出物は、其の子葉が抱へと稱して上方に反卷する性あるを以て、子葉によりて出物を豫選しうる

ものとす。又獅子咲の出物は、一般に種子を産せざるが故に、親木によりて種子を採るを常とす。

(一) 唐花咲とは、桐系に属するものにして、通例、其の出物は唐花八重咲と稱する。一種の八重咲なりとす。されど唐花咲にも、亦全く雌雄蓋を失ふて、牡丹咲となるものあり。之を唐花牡丹と稱し、牡丹咲の中に入るべきものなり。

唐花咲の特徴は、瓣數多く、且つ大形にして、往々風鈴・鳥甲等を生じ、花姿の美大なるにありとす。尙ほ、唐花咲は、子葉の肉厚くして表面に凹凸多く、且つ毛茸の多きものに、美大の花を開く傾向あり、唐花咲の出物は種子を産せざるを常とす。

(二) 牡丹咲種 牡丹咲種とは、雌雄蓋の全く缺けたる複瓣花の總稱にして、種類頗る多し。筒牡丹の如きは、觀賞の價值甚だ低きも、獅子牡丹・臺咲牡丹・采咲牡丹

圖二十九第



風鈴甲交鬚吹唐花

管瓣咲獅子牡丹

雄風鈴咲獅子

總鳥甲噴上車咲牡丹

采咲牡丹

鬚咲獅子牡丹



普濟藥干抄本

蘇甲印土車藥干抄本

采知抄本

蘇甲印藥干

蘇甲印藥干抄本

等は之に反して大に珍重せらる。

(イ) 獅子牡丹 とは、獅子八重咲が全く雌雄兩蓋を失ふて無蓋複瓣花となれるものにして、風鈴・鬚管瓣等珍奇の花態を有すること獅子八重咲に勝るものとす。

(ロ) 采咲牡丹 とは、采咲牡丹・細切采咲牡丹・撫子咲牡丹・噴水咲牡丹・菊咲牡丹等の總稱にして、柳系・笹系などの出物として出づるを常とす。細切采咲牡丹とは普通の采咲牡丹よりも花瓣の細く切れたるものを云ひ、噴水咲牡丹とは細切采咲牡丹なるも其の咲方噴水の狀に似たるものを云ふ。又撫子咲牡丹とは撫子に似たる咲方をなすものを云ひ、菊咲牡丹は第九十四圖に示すが如し。

(ハ) 臺咲牡丹 には臺咲牡丹・車咲牡丹・雀咲牡丹

圖三十九第



筒牡丹

圖四十九第



菊咲牡丹